

# おせん

邦枝完二

青空文庫



虫<sup>むし</sup>

一

「おツとツとツと。そう乗出<sup>のりだ</sup>しちやいけない。垣根<sup>かきね</sup>がやわだ。落<sup>お</sup>

着<sup>ち</sup>いたり、落着<sup>おち</sup>いたり」

「ふふふ。あわててるな若旦那<sup>わかだんな</sup>、あつしよりお前<sup>まえ</sup>さんでげしよ

う」

「叱<sup>し</sup>ツ、静<sup>しず</sup>かに。——」

「こいつアまるであべこべだ。どっちが宰<sup>さいりよう</sup>領<sup>りやう</sup>だかわかりやアしねえ」

が、それでも互<sup>たがい</sup>の声<sup>こえ</sup>は、ひそやかに触<sup>ふ</sup>れ合<sup>あ</sup>う草<sup>くさ</sup>の草<sup>は</sup>ずれよりも低<sup>ひく</sup>かった。

「まだかの」

「まだでげすよ」

「じれツてえのう、向<sup>むこ</sup>う牆<sup>ずね</sup>を蚊<sup>か</sup>が食<sup>く</sup>いやす」

「御<sup>ご</sup>辛<sup>しん</sup>抱<sup>ぼう</sup>、御<sup>ご</sup>辛<sup>しん</sup>抱<sup>ぼう</sup>。——」

谷<sup>や</sup>中<sup>なか</sup>の感<sup>かん</sup>応<sup>おう</sup>寺<sup>じ</sup>を北<sup>きた</sup>へ離<sup>はな</sup>れて二<sup>ちよう</sup>丁<sup>ちやう</sup>あまり、茅<sup>かやぶ</sup>葺<sup>き</sup>の軒<sup>のき</sup>に苔<sup>こけ</sup>持<sup>も</sup>つささやかな住<sup>すま</sup>居<sup>い</sup>ながら垣<sup>かき</sup>根<sup>ね</sup>に絡<sup>から</sup>んだ夕<sup>ゆう</sup>顔<sup>がお</sup>も白<sup>しろ</sup>く、四<sup>つ</sup>五<sup>ぽ</sup>坪<sup>ば</sup>ばかりの庭<sup>にわ</sup>一<sup>ぱい</sup>杯<sup>はい</sup>に伸<sup>の</sup>びるがままの秋<sup>あき</sup>草<sup>ぐさ</sup>が乱<sup>みだ</sup>れて、尾<sup>おぼ</sup>花<sup>な</sup>に隠<sup>かく</sup>れた女<sup>おみなえ</sup>郎<sup>らう</sup>

花の、うつつともなく夢見る風情は、近頃評判の浮世絵  
えしすきはるのぶ 師鈴木晴信が錦絵をそのままの美しさ。次第に冴える三日月  
ひか の光りに、あたりは漸く朽葉色の闇を誘つて、草に鳴く虫の音  
 のみが繁かつた。

「松つあん」

「へえ」

「たしかにここに、間違いはあるまいの」

「冗談じゃござんせんぜ、若旦那。こいつを間違えたんじ

や、松五郎めくら犬にも劣りやさア」

「だつてお前、肝腎の弁天様は、かたちどころか、影も見せ

やしないじゃないか」

「御辛抱、御辛抱、急いちゃア事を仕損じやす」

「ここへ来てから、もう半時近くも経つてるんだよ。それだのにお前。――」

「でげすから、あつしは浅草を出る時に、そう申したじやござんせんか。松の位の太夫でも、花魁ならば売り物買い物。耳のほくろはいうに及ばず、足の裏の筋数まで、読みたい時に読めやすが、きょうのはそうはめえりやせん。半時はおろか、事によつたら一時でも二時でも、垣根のうしろにしがんだまま、お待ちんならなきやいけませんと、念をお押し申した時に、若旦那、あなたは何んと仰しかったです。当時、江戸の三人女なの随一と名を取った、おせんの肌が見られるなら、蚊に食われ

ようが、虫に刺されようが、少しも厭うことじやアない、好きな  
 煙草も慎むし、声も滅多に出すまいから、何んでもかんでもこれ  
 から直ぐに連れて行け。その換りお礼は二分まではずもうし、羽  
 織もお前に進呈すると、これこの通りお羽織まで下すつたんじ  
 やござんせんか。それなのに、まだほんの、半時経つか経たな  
 いうちから、そんな我儘をおいいなさるんじや、お約束が違  
 いやす。頂戴物は、みんなお返しいたしやすから、どうか松  
 五郎に、お暇をおくんなさいやして。……」  
 「おっとお待ち。あたしや何も、辛抱しないたいやアしないよ。  
 ええ、辛抱しますとも、夜中ンなろうが、夜が明けようが、こ  
 こは滅多に動くんじやないけれど、お前がもしか門違いで、お

せんの家でもない人の……」

「そ、それがいけねえというんで。……いくらあつしが酔狂でも、若旦那を知らねえ家の垣根まで、引張つて来る筈ありませんや。松五郎自慢の案内役、こいつばかりや、たとえ江戸がどんなに広くツても——」

「叱ッ」

「うッ」

帯ははやりの呉絙であろう。引ツかけに、きりりと結んだ立姿、滝縞の浴衣が、いつそ背丈をすつきり見せて、颯と簾の片陰から縁先へ浮き出た十八娘。ぽつんと一本咲き初めた、桔梗の花のそれにも増して、露は紅より濃やかであつた。

明和<sup>めいわ</sup>戌<sup>いぬ</sup>年<sup>とし</sup>秋<sup>あき</sup>八月<sup>がつ</sup>、そよ吹<sup>ふ</sup>きわたるゆうべの風<sup>かぜ</sup>に、静<sup>しず</sup>かに揺<sup>ゆ</sup>れ  
 る尾花<sup>おばな</sup>の波路<sup>なみじ</sup>。娘<sup>むすめ</sup>の手から、団扇<sup>うちわ</sup>が庭<sup>にわ</sup>にひらりと落<sup>お</sup>ちた。

## 二

顔<sup>かお</sup>を掠<sup>かす</sup>めて、ひらりと落<sup>お</sup>ちた桔梗<sup>ききよう</sup>の花<sup>はな</sup>のひとひらにさえ、音<sup>おと</sup>  
 も氣遣<sup>きづか</sup>う心<sup>こころ</sup>から、身動<sup>みうご</sup>きひとつ出来<sup>でき</sup>ずにいた、日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>橋<sup>ばし</sup>通<sup>とお</sup>油<sup>あぶら</sup>  
 ちよう町の紙問屋<sup>かみどんや</sup>橘屋<sup>たちばなや</sup>徳兵衛<sup>とくべゑ</sup>の若<sup>わ</sup>旦<sup>かだん</sup>那<sup>な</sup>徳<sup>とく</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>ろう</sup>と、浮<sup>う</sup>世<sup>きよ</sup>絵<sup>え</sup>師<sup>し</sup>春<sup>はる</sup>  
 信<sup>のぶ</sup>の彫<sup>ほり</sup>工<sup>こう</sup>松<sup>まつ</sup>五<sup>ご</sup>郎<sup>ろう</sup>の眼<sup>め</sup>は、釘<sup>くぎ</sup>着<sup>づ</sup>けにされたように、夕<sup>ゆう</sup>顔<sup>がお</sup>の下<sup>した</sup>  
 から離<sup>はな</sup>れなかつた。

が、よもやおのが垣根<sup>かきね</sup>の外<sup>そと</sup>に、二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>の男<sup>おとこ</sup>が示<sup>しめ</sup>し合<sup>あ</sup>わ  
 せて、眼<sup>め</sup>をす

えていようとは、夢想もしなかつたのであろう。娘は落ちた団扇  
 を流し目に、呉縞の帯に手をかけると、廻り燈籠の絵よりも速  
 く、きりりと廻ったただずまい、器用に帯から脱け出して、さて  
 もう一廻り、ゆるりと廻った爪先を縁に停めたその刹那、俄に  
 音を張る鈴虫に、浴衣を肩から滑らせたまま、半身を縁先  
 へ乗りだした。

「南無大願成就。——」

「叱ッ」

あとには再び虫の声。

京師の、花を翳して過す上臈達はいざ知らず、天下の大  
 将軍が鎮座する江戸八百八町なら、上は大名の姫君か

ら、下は歌舞うたまいの菩薩ぼさつにたとえられる、よろず吉原千の遊女よしわら ちの ゆうじよ  
 をすぐつても、二人ふたりとないとの評判ひょうばん娘むすめ。下谷谷中の片ほとしたややなか かた  
 り、笠森かさもり稲荷いなりの境内けいだいに、行燈あんどん懸けた十一軒けんの水茶屋娘みずちややむすめ  
 が、三十余人束よにんたばになろうが、縹緖きりようはおろか、眉まゆ一つ及ぶ者およものがな  
 いという、当時とうじ鈴木春信すずきはるのぶが一枚まい刷ずりの錦絵にしきえから、子供達こどもたちの  
 毬唄まりうたにまで持もて囃はやされて、知るも知らぬも、噂うわさの花は咲さき放ほうだ  
 題い、かぎ屋やのおせんならではの、夜よも日ひも明あけぬ煩惱ぼんのうは、血氣けつきぎ  
 盛かりの若わか衆しゆうばかりではないらしく、何なにひとつ心願しんがんなんぞ  
 のありそうもない、五十を越こした武家ぶけまでが、雪駄せつたをちやらちや  
 らちやらつかせてお稲荷詣いなりもうでに、御手洗みたらしの手拭てぬぐいは、常つねに乾かわく  
 ひまとてないくらいであつた。

橘屋の若旦那徳太郎も、この例に漏れず、日に一度は、

判で捺したように帳場格子の中から消えて、目指すは谷中の笠

森様、赤い鳥居のそれならで、赤い襟からすすきりのぞいたお

せんが雪の肌を、拝みたさの心願に外ならならなかったのであ

るが、きょうもきょうとて浅草の、この春死んだ志道軒の小屋

前で、出会頭に、ばったり遭ったのが彫工の松五郎、それと

察した松五郎から、おもて飾りを見るなんざ大野暮の骨頂で

げす。おせんの桜湯飲むよりも、帯紐解いた玉の肌が見たか

アござんせんかとの、思いがけない話を聞いて、あとはまったく

有頂天、どこだどこだと訪ねるまでもなく、二分の礼と着てい

た羽織を渡して、無我夢中は、やがてこの垣根の外となった次第。

——百匹の蚊が一度に臍にとまっても、痛さもかゆさも感じない程、徳太郎の眼は、野犬のようにすわっていた。

「若旦那」

「黙つて。——」

「黙つてじゃアござんせん。もっと低くおなんなすつて。——」

「判つてるよ」

「そんならお速く」

「ええもういらぬお接介。——」

おおかた、縁から上手へ一段降りて戸袋の陰には既に盥が用意されて、釜で沸した行水の湯が、かるい渦を巻いているのであるが、上半身を現わにしたまま、じつと虫の音に聴き

いてゐるおせんは、容易に立とうとしないばかりか、背から腰  
 へと浴衣の滑り落ちるのさえ、まったく気づかぬのであろう。三  
 かづきあわひかりあおはもんおおに、日月の淡い光が青い波紋を大きく投げて、白珊瑚を想わせる肌  
 に、吸い着くように冴えてゆく滑らかさが、秋草の上になで映  
 え盛ったその刹那、ふと立上ったおせんは、颯と浴衣をかなぐ  
 り棄てると手拭片手に、上手の段を二段ばかり、そのまま戸  
 袋の蔭に身を隠した。

「あッ」

「たッ」

辱も外聞も忘れ果てたか、徳太郎と松五郎の口からは、同  
 時に奇声が吐きだされた。

## 三

「おせんや」

「あい」

「何<sup>な</sup>んだえ、いまのあの音<sup>おと</sup>は。――」

「さア、何<sup>な</sup>んでござんしょう。おおかた金<sup>きん</sup>魚<sup>ぎよ</sup>を狙<sup>ね</sup>う、泥<sup>どろ</sup>棒<sup>ぼう</sup>猫<sup>ねこ</sup>かも知<sup>し</sup>れませんよ」

「そんならいいが、あたしやまたおまえが転<sup>ころ</sup>びでもしたんじやないかと思<sup>おも</sup>つて、びっくりしたのさ。おまえあつて、あたし、というより、勿<sup>もつ</sup>体<sup>たい</sup>ないが、おまえあつてのお稲<sup>いな</sup>荷<sup>なり</sup>様<sup>さま</sup>、滅<sup>め</sup>多<sup>った</sup>に怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>

でもしてごらん、それこそ御参詣が、半分はんぶんに減へつてしまふだらうじゃないか。——縹緞きりようがよくつて孝行こうこうで、その上愛想うえあいそうならとりなしなら、どなたの眼めにも笠森かさもり一、お腹なかを痛いためた娘むすめを賞ほめる訳わけじゃないが、あたしやどんなに鼻はなが高たかいか。……」

「まアお母さん。——」

「いいやね。恥はずかしいこたアありやアしない。子こを賞ほめる親おやは、世間せけんには腐くさる程ほどあるけれど、どれもこれも、これ見みよがしの自慢じまんたらたら。それと違ちがつてあたしのは、おまえに聞きかせるお礼れいじゃないか。さ、ひとつついでに、背せ中なかを流ながしてあげようから、その手拭てぬぐいをこつちへお出だし」

「いいえ、汗あせさえ流ながせばようござんすから……」

「何を<sup>なに</sup>いうのさ。いいからこつちへお向<sup>む</sup>きというのに」

二十二で倅<sup>せがれ</sup>の千吉<sup>きち</sup>を生<sup>う</sup>み、二十六でおせんを生<sup>う</sup>んだその翌<sup>よく</sup>年<sup>ねん</sup>、

蔵<sup>くら</sup>前の質<sup>しちみ</sup>見<sup>せい</sup>世<sup>い</sup>伊勢<sup>いせい</sup>新<sup>しん</sup>の番頭<sup>ばんとう</sup>を勤<sup>つと</sup>めていた亭主<sup>ていしゅ</sup>の仲吉<sup>なかきち</sup>が、

きゆうびよう

急<sup>きゆう</sup>病<sup>びよう</sup>で亡<sup>な</sup>くなった、幸<sup>こう</sup>から不幸<sup>ふこう</sup>への逆<sup>さか</sup>落<sup>おと</sup>しに、細<sup>ほ</sup>々<sup>そ</sup>なが

ひとぬいもの

ら人の縫<sup>ぬい</sup>物<sup>もの</sup>などをさせてもらつて、その日<sup>ひ</sup>その日<sup>ひ</sup>を過<sup>す</sup>ごして早<sup>はや</sup>

くも十八<sup>ねん</sup>年<sup>ねん</sup>。十八<sup>いえて</sup>に家出<sup>いえで</sup>をしたまま、いまだに行方<sup>ゆくえ</sup>も知<sup>し</sup>れない倅<sup>せがれ</sup>

きちふがい

千吉<sup>きち</sup>の不<sup>ふ</sup>甲斐<sup>がい</sup>なさ<sup>おも</sup>は、思<sup>おも</sup>いだす度<sup>たびごと</sup>毎<sup>まい</sup>にお岸<sup>きし</sup>が涙<sup>なみだ</sup>の種<sup>たね</sup>ではあつた

ふ

が、踏<sup>ふ</sup>まれた草<sup>くさ</sup>にも花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>くた<sup>さ</sup>とえの文字<sup>もじ</sup>通<sup>とお</sup>り、去<sup>き</sup>年<sup>よねん</sup>の梅<sup>うめ</sup>見<sup>み</sup>時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>

いせしん

から伊勢<sup>いせい</sup>新<sup>しん</sup>の隠<sup>いん</sup>居<sup>きよ</sup>の骨折<sup>ほねお</sup>りで、出<sup>だ</sup>させてもらつた笠<sup>かさ</sup>森<sup>もり</sup>稻<sup>いな</sup>荷<sup>なり</sup>の

みずぢややたちま

水茶屋<sup>みずぢやや</sup>が忽<sup>えど</sup>ち<sup>じゆう</sup>江<sup>ひ</sup>戸<sup>よう</sup>中<sup>ばん</sup>の評<sup>ひ</sup>判<sup>はん</sup>となつては、凶<sup>きよう</sup>が<sup>だい</sup>大<sup>き</sup>吉<sup>きち</sup>に返<sup>かえ</sup>

ありがた

つた有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>さを、涙<sup>なみだ</sup>と共<sup>とも</sup>に喜<sup>よろこ</sup>ぶより外<sup>ほか</sup>になく、それにつけても持<sup>も</sup>

つべきは娘だと、近頃、お岸が掌を合せるのは、笠森様ではなくておせんであつた。

「おせん」

「あい」

「つかぬことを訊くようだが、おまえ毎日見世へ出ていて、まだこれぞと思う、好いたお方は出来ないのかえ」

「まあ何かと思えばお母さんが。——あたしやそんな人なんか、ひとりもありアしませんよ」

「ほほほほ。お怒りかえ」

「怒りやしませんけれど、あたしや男は嫌いでござんす」

「なに、男は嫌いといえ」

「あい」

「ほんにまア。——」

この春<sup>はる</sup>まで、まだまだ子供<sup>こども</sup>と思<sup>おも</sup>つていたおせんとは、つい食<sup>くい</sup>違<sup>ちが</sup>つて、一つ盥<sup>たら</sup>で行<sup>ぎ</sup>水<sup>みづ</sup>つかう折<sup>おり</sup>もないところから、お岸<sup>きし</sup>は  
いまだにそのままのなりかたちを想<sup>そう</sup>像<sup>ぞう</sup>していたのであつたが、  
ふとした物<sup>もの</sup>音<sup>おと</sup>に駆<sup>か</sup>け着<sup>つ</sup>けたきつかけに、半年<sup>はんとしふり</sup>振<sup>み</sup>で見たおせん  
の体<sup>からだ</sup>は、まったく打<sup>う</sup>つて変<sup>か</sup>わつた大人<sup>おとな</sup>びよう。七八<sup>しちばん</sup>つの時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>から、  
鴉<sup>からす</sup>の生<sup>う</sup>んだ鶴<sup>つる</sup>だといわれたくらい、色<sup>いろ</sup>の白<sup>しろ</sup>いが自<sup>じ</sup>慢<sup>まん</sup>は知<sup>し</sup>れていた  
ものの、半年<sup>はんとしみ</sup>見<sup>み</sup>ないと、こうも変<sup>か</sup>わるものかと驚<sup>おどろ</sup>くばかりの色<sup>いろ</sup>つ  
ぼさは、肩<sup>かた</sup>から乳<sup>ちち</sup>へと流<sup>なが</sup>れるほうずきのふくらみをそのままの線<sup>せん</sup>  
に、殊<sup>こと</sup>にあらわの波<sup>なみ</sup>を打<sup>う</sup>たせて、背<sup>せ</sup>から腰<sup>こし</sup>への、白<sup>しろ</sup>薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>の徳<sup>とく</sup>利<sup>り</sup>

を寝かしたような弓なりには、触ればそのまま手先が滑り落ちるかと、怪しまれるばかりの滑らかさが、親の目にさえ迫らずにはいなかった。

嫌いな客が百人あつても、一人は好きがあらうかと、訊いて見たいは、娘もつ親の心であらう。

## 四

「若旦那」

「何んどの」

「何んどの、じゃアござんせんぜ。あの期に及んで、垣根へ首を

突<sup>つ</sup>込<sup>こ</sup>むなんぎ、情<sup>なさけ</sup>なすぎて、涙<sup>なみだ</sup>が<sup>で</sup>出るじやアござんせんか」

「おやおや、これはけしからぬ。お前<sup>まえ</sup>が腰<sup>こし</sup>を押<sup>お</sup>したからこそ、あんな態<sup>ざま</sup>になつたんじやないか、それを松<sup>まつ</sup>つあん、あたしにすりつけられたんじや、おたまり小法師<sup>こほし</sup>がありやアしないよ」

「あれだ、若<sup>わか</sup>旦那<sup>だんな</sup>。あつしやア後<sup>うしろ</sup>にいたんじやねえんで。若<sup>わか</sup>旦那<sup>だんな</sup>と並<sup>なら</sup>んで、のぞいてたんじやござんせんか。腰<sup>こし</sup>を押<sup>お</sup>すにも

押<sup>お</sup>さないにも、まず、手<sup>て</sup>が届<sup>とど</sup>きやアしませんや。——それにでえいち、あの声<sup>こえ</sup>がいけやせん。おせんの浴衣<sup>ゆかた</sup>が肩<sup>かた</sup>から滑<sup>すべ</sup>るのを、見<sup>み</sup>ていなすつたまでは無事<sup>ぶじ</sup>でげしたが、さつと脱<sup>ぬ</sup>いで降<sup>お</sup>りると同時<sup>どうじ</sup>に、きやつと聞<sup>き</sup>こえた異様<sup>いよう</sup>な音声<sup>おんせい</sup>。差<sup>さ</sup>し詰<sup>づめ</sup>志道<sup>しどう</sup>軒<sup>けん</sup>なら、一天<sup>てん</sup>

俄<sup>にわか</sup>にかき曇<sup>くも</sup>り、あれよあれよといいもあらせず、天女<sup>てんによ</sup>の姿<sup>すがた</sup>は忽<sup>たちま</sup>

ちに、隠<sup>かく</sup>れていつか盥<sup>たら</sup>の中<sup>なか</sup>。……」

「おいおい松<sup>まつ</sup>つあん。いい加減<sup>かげん</sup>にしないか。声<sup>こえ</sup>を出<sup>だ</sup>したなお前<sup>まえ</sup>が初<sup>はじ</sup>めだ」

「おやいけねえ。いくら主<sup>しゅ</sup>と家来<sup>けらい</sup>でも、あつしにばかり、罪<sup>つみ</sup>をなするなひどうげしよう」

「ひどいことがあるもんか。これからゆつくりかみしめて、味<sup>あじ</sup>を見<sup>み</sup>ようというところで、お前<sup>まえ</sup>に腰<sup>こし</sup>を押<sup>お</sup>されたばかりに、それごらん、手<sup>て</sup>までこんなに傷<sup>きず</sup>だらけだ」

「そんならこれでもお付<sup>つ</sup>けなんつて。……おつとしまった。きのうかかあが洗<sup>あら</sup>ったんで、まるつきり袂<sup>たもと</sup>くそがありやアしねえ」

「冗<sup>じょうだん</sup>談<sup>だん</sup>いわつし、お前<sup>まえ</sup>の袂<sup>たもと</sup>くそなんぞ付<sup>つ</sup>けられたら、それこ

そ肝腎かんじんの人ひとさし指ゆびが、本もとから腐くさつて落おちるわな」

「あつしやアまだ瘡氣かさけの持もち合せはござせんぜ」

「なにかいことがあるものか。三日みっかにあげず三枚橋まいばしへ横よこ丁ちようへ売女やまねこを買かいにで出でかけてるじゃないか。——鼻はながまともに付つい

てるのが、いつそ不思議ふしぎなくらいなものだ」

「こいつアどうも御挨拶ごあいさつだ。人ひとの知しらない、おせんの裸はだかをのぞ

かせた挙句あげく、鼻はなのあるのが不思議ふしぎだといわれたんじや、松五郎まつごろう立

つ瀬せがありやせん。冗談じようだんは止よしにして、ひとつ若旦那わかだんな、縁え

起直んぎなおしに、これから眼めの覚さめるところへ、お供ともをさせておくんな

さいまし」

「眼めの覚さめるところは。——」

「おとぼけなすつちやいけません。闇やみの夜よのない女護によこヶ島しま、ここ

から根岸ねぎしを抜ぬけさえすりやア、眼めをつぶつても往いけやさアね」

「折角せつかくだが、そんな所ところは、あたしやきようから嫌きらいになったよ」

「なんでげすつて」

「橘屋徳太郎たちばなやとくたろう、女房にようぼうはかぎ屋のおせんにきめました」

「と、とんでもねえ、若旦那わかだんな。おせんはそんなまやさしい。」

――

「おつと皆みなまでのたまうな。手前てまえ、孫呉そんごの術じゆつを心得こころえて居おりやす」

「損そん五とくも得七とくしちもありやアしません。当時とうじ名代なだいの孝行こうこう娘むすめ、たと

い若旦那わかだんなが、百日ひゃくにちお通かよいなすつても、こればかりは失礼しつれいな

がら、及およばぬ鯉こいの滝登たきのぼりで。……」

「まつ  
松つあん」

「へえ」

「かえ  
帰つとくれ」

「えッ」

「あたしや何<sup>な</sup>んだか頭痛<sup>ずつう</sup>がして来<sup>き</sup>た。もうお前<sup>まえ</sup>さんと、話<sup>はなし</sup>をする  
のもいやンなつたよ」

「そ、そんな御無<sup>ごむたい</sup>態<sup>たい</sup>をおいいなすつちや。——」

「どうせあたしや無<sup>むたい</sup>態<sup>たい</sup>さ。——この煙<sup>たばこ</sup>草<sup>いれ</sup>入<sup>れ</sup>もお前<sup>まえ</sup>に上<sup>あ</sup>げるから、  
とつとと帰<sup>かえ</sup>つてもらいたいよ」

みかづき　やなか　よみち　くら  
三日<sup>みかづき</sup>月に、谷<sup>や</sup>中<sup>なか</sup>の夜<sup>よ</sup>道<sup>みち</sup>は暗<sup>くら</sup>かつた。その暗<sup>くら</sup>がり<sup>が</sup>り<sup>を</sup>をただ独<sup>ひと</sup>り<sup>な</sup>鳴<sup>な</sup>く、  
蟋<sup>こ</sup>蟀<sup>おろぎ</sup>を踏<sup>ふ</sup>みつづす程<sup>ほど</sup>、やけな歩<sup>あゆ</sup>み<sup>を</sup>を続<sup>つづ</sup>けて行<sup>い</sup>く、若<sup>わか</sup>旦<sup>だん</sup>那<sup>な</sup>徳<sup>とく</sup>

太郎ろうの頭あたまの中なかは、おせんおせんの姿すがたで一杯いっぱいであつた。

## 五

「ふん、何なんて馬鹿ばか氣げた話はなしなんだろう。こつちからお頼たのみ申もうして来きてもらつた訳わけじゃなし。若わか旦だ那なが手てを合あせて、たつての頼たのみだといふからこそ、連つれて来きてやつたんじゃねえか、そいつを、自分じぶんからあわてちまつてよ。垣根かきねの中なかへ突つんのめつたばっかりに、ゆつくり見物けんぶつ出で来るはずのおせんおせんの裸はだかがちらツとしきやのぞけなかつたんだ。——面白おもしろくもねえ。それもこれも、みんなおいらのせえだツてんじや、てんで立たつ瀬せがありやしねえや。どこの

殿様とのさまがこさえたたとえか知らねえが、長い物ながものにや巻まかれろなんて、あんまり向むかうの都合つごうが良過よすぎるぜ。橘屋たちばなやの若旦那わかだんなは、八百蔵ぞうに生いき写うつしたなんて、つまらねえお世辞せじをいわれるもんだから、当人とうにんもすっかりいい氣きンなってるんだろうが、八百蔵ぞうはおろか、八百屋やの丁稚でつちにだって、あんな面つらがあるもんか。飛とんだ料簡りょうけん違ちがいのこんこんちきだ」

誰だれにいうともない 独言ひとりごとながら、吉原よしわらへの供ともまで見事みごとにはねられた、版下彫はんしたぼりの松五郎まつごろうは、止度とめどなく腹はらの底そこが沸わえくり返かえつていたのであろう。やがて二三丁ちようさきも先いへ行いつてしまった徳太郎とくたろうの背後はいごから、浴あびせるように罵ののつていた。

「おいおい松まつつあん」

「えッ」

「はッはッは。何をぶつぶついってるんだ。三日月様が笑ってる

ぜ」

「お前さんは。――」

「おれだよ。春重だよ」

うしろから忍ぶようにして付いて来た男は、そういいながら徐ろに頬冠ほおかぶりをとったが、それは春信はるのぶの弟子でしの内うちでも、変り者かわもので通とおっている春重はるしげだった。

「なアんだ、春重さんかい。今時分いまじぶん、一人ひとりでどこへ行いきなす

った」

「一人ひとりでどこへは、そっちより、こっちで訊ききたいくらいのもん

だ。——お前まえ、橘屋たちばなやの徳さんとくにまかれたな」

「まかれやしねえが、どうしておいらが、若旦那わかだんなと一緒しよだったのを知しってるんだ」

「ふふふ。平賀源内ひらがげんないの文句もんくじゃねえが、春重はるしげの眼めは、一里先りさきまで見透みとおしが利きくんだからの。お前まえが徳さんとくとこで会あつて、どこへ行いったかぐらいのこたア、聞きかねえでも、ちゃんと判わかつてらアな」

「おやツ、行いった先さきが判わかつてるツて」

「その通とおりだ、当あててやろうか」

「冗じょうだん談だんじゃねえ、いくらお前まえさんの眼めが利きいたにしたつて、こいつが判わかつてたまるもんか。断ことわつとくが、当時とうじ十六文もんの売女やまねこ

なんぎ、買かいに行いきやアしねえよ」

「だが、あのざまは、あんまり威張いばれもしなからう」

「あのざまア何なによ」

「垣根かきねへもたれて、でんぐる返かえしを打うったざまだ」

「何なにんだって」

「おせんの裸はだかを窺のぞこうツてえのは、まず立派りっぱな智恵ちえだがの。おのれを忘わすれて乗出のりだした挙句あげく、垣根かきねへ首くびを突つつ込こんだんじや、折角せつかくの趣向しゅこうも台だいなしだらうじやねえか」

「そんなら重しげさん、お前まえさんはあの様子ようすを。――」

「気きの毒どくだが、根ねこそぎ見みちまったんだ」

「どこで見みなすった」

「知れたこつた。庭にわなかの中なかでよ」

「庭にわなかの中」

「おいらア泥棒猫どろぼうねこのように、垣根かきねの外そとでうろうろしちやアいねえからの。——それ見みな。鬼童丸きどうまるの故智こちにならつて、牛うしの生なまか皮わじゃねえが、この犬いぬの皮かわを被かぶつての、秋草城あきくさじょうでの籠城ろうじょうだ。おかげで画囊がのうはこの通り。——」

懐中ふとこから取り出とした春重はるしげの写生帳しやせいちようには、十数枚すうまいのおせんらぞうの裸像さまざまが様々に描かかれていた。

## 六

まつろう 松五郎は、狐につままれでもしたように、しばし三日月の光に  
 うで 浮いて出たおせんの裸像を、春重の写生帳の中に凝視し  
 われ いていたが、やがて我に還つて、あらためて春重の顔を見守つた。  
 まえ 重さん、お前、相変らず素ばしっこいよ」

「なんでよ」

いぬ 犬の皮をかぶつて、おせんの裸を思う存分見た上に写し取つ  
 しろ てるなんざ、素人にや、鯰鉾立をしても、考えられる芸  
 じや ねえツてのよ」

あさめし ふうふ、そんなこたア朝飯前だよ。——おいらあ実ア、もう  
 ちつ といいいことをしてるんだぜ」

「ほう、どんなことを」

「聞<sup>き</sup>きてえか」

「聞<sup>き</sup>かしてくんねえ」

「ただじやいけねえ、一朱<sup>しゆ</sup>だしたり」

「一朱<sup>しゆ</sup>は高<sup>たけ</sup>えの」

「なにが高<sup>たけ</sup>えものか。時<sup>とき</sup>によつたら、安<sup>やす</sup>いくらいのもんだ。――

だがきようは見た<sup>み</sup>ところ、一朱<sup>しゆ</sup>はおろか、財布<sup>さいふ</sup>の底<sup>そこ</sup>にや十文<sup>もん</sup>もな

さそうだの」

「けちなことアおいてくんねえ。憚<sup>はばか</sup>ながら、あしたあさまで持<sup>も</sup>

越<sup>ちこ</sup>したら、腹<sup>はら</sup>が冷<sup>ひ</sup>え切<sup>き</sup>つちまうだらうツてくれえ、今夜<sup>こんや</sup>は財布<sup>さいふ</sup>が

唸<sup>うな</sup>つてゐんだ」

「それア豪儀<sup>ごうぎ</sup>だ。ついでだ、ちよいと拝<sup>おが</sup>ませな」

「ふん、重さん。眼をつぶさねえように、大丈夫か」

「小判の船でも着きやしめえし、御念にや及び申さずだ」

財布はなかつた。が、おおかた晒しの六尺にくるんだ錢を、内

ぶところから探っているのであろう。松五郎は暫しの間、唾が筍

を掘るような恰好をしていたが、やがて握り拳の中に、五六枚

の小粒を器用に握りしめて、ぱつと春重の鼻の先で展げてみせ

た。

「どうだ、親方」

「ほう、こいつア珍しい。どこで拾った」

「冗談いわつし。当節錢を落す奴なんざ、江戸中尋ねた

つてあるもんじゃねえ。稼えだんだ」

「版はん下したか」

「はんはんはんだが、字じが違ちがうやつよ。ゆうべお旗本の墓がま本多ほんだの部へ屋やで、半はんを続つづけて三度張どはったら、いう目めが出でての俄分にわか限げんでの、急きゆうに今朝けさから仕事しごとをするのがいヤンなつて、天道様てんとうさまがベそをか  
くまで寝ねてえたんだが蝙蝠こうもりと一緒しよに、ぶらりぶらりと出でたところ  
を、浅草あさくさでぼったり出遭であったのが若旦那わかだんな。それから先さきは、お前まえ  
さんに見みられた通とおりのあの始末しまつだ。——」

「そいつア夢ゆめに牡丹餅ぼたんもちだの。十文もんと踏ふんだ手ての内うちが、三両りょうだとな  
りやア一朱しゆはあんまり安過やすぎた。三両りょうのうちから一朱しゆじゃア、髪かみ  
の毛け一本ほん、抜ぬくほどの痛いたさもあるまいて」

「こいつア今夜こんやのもとでだからの」

「そんなら止よしなつ聞きしちややらねえ」

「聞きかせねえ」

「だすか」

「仕方しかたがねえ、出だしやしよう」

すると春重はるしげは、きよろりと辺あたりを見廻みまわしてから、俄にわかに首くびだけ前まえへ突出つきだした。

「耳みみをかしな」

「こうか」

「――」

「ふふ、ほんとうかい。重しげさん。――」

「嘘うそはお釈迦しゃかの御法度ごはつとだ」

やせまつろうめふたたはるしげ  
 瘦た松五郎の眼が再び春重の顔に戻つた時、春重はおもむ  
 るに、ふところから何物かを取りだまつろうはなさき  
 かした。

## 七

あし  
 足もとに、尾花の影は淡かつた。

「なんだい」

「なんだかよく見さつし」

八の字を深くしながら、寄せた松五郎の眼先を、ちらとかすめ  
 たのは、鶯の糞をいれて使うという、近頃はやりの紅色の糠

かぶくろ  
袋 だった。

「こいつア重<sup>しげ</sup>さん、  
糠<sup>ぬか</sup>袋<sup>かぶくろ</sup>じゃアねえか」

「まずの」

「一朱<sup>しゆ</sup>はずんで、  
糠<sup>ぬか</sup>袋<sup>かぶくろ</sup>を見<sup>み</sup>せてもらうどじはあるめえぜ。――

――お前<sup>めえ</sup>いまなんてツた。おせんの雪<sup>ゆき</sup>のはだから切<sup>き</sup>り取<sup>と</sup>った、天下<sup>てんか</sup>  
に二つと無<sup>ね</sup>え代<sup>しろもの</sup>物<sup>もの</sup>を拝<sup>おが</sup>ませてやるからと。――」

「叱<sup>し</sup>ッ、極<sup>ごく</sup>内<sup>ない</sup>だ」

「だってそんな糠<sup>ぬか</sup>袋<sup>かぶくろ</sup>。……」

「袋<sup>ふくろ</sup>じゃねえよ。おいらの見<sup>み</sup>せるなこの中<sup>なか</sup>味<sup>み</sup>だ。文<sup>もん</sup>句<sup>く</sup>があるンな  
ら、拝<sup>おが</sup>んでからにしてくんない。――それこいつだ。触<sup>さわ</sup>った味<sup>あじ</sup>はど  
んなもんだの」

ぐつと伸ばした松五郎の手先へ、春重は仰々しく糠袋を突出したが、さて暫くすると、再び取っておのが額へ押し当てた。

「開けて見せねえ」

「拝みたけりや拝ませる。だが一つだつて分けちやアやらねえか

ら、そのつもりでいてくんねえよ」

そういうながら、指先を器用に動かした春重は、糠袋の口を解くと、まるで金の粉でもあけるように、松五郎の掌へ、三つばかりを、勿体らしく盛り上げた。

「こいつア重さん。——」

「爪だ」

「ちえツ」

「おつとあぶねえ。棄てられて堪るものか。これだけ貯めるにや、まる一年かかつてるんだ」

松五郎の掌へ、おのが掌をかぶせた春重は、あわてて相手の掌ぐるみ裏返して、ほつとしたように眼の前へ引き着けた。

「湯屋で拾い集めた爪じやアねえよ。蚤や蚊なんざもとよりのこと、腹の底まで凍るような雪の晩だつて、おいらアじつと縁の下へもぐり込んだまま辛抱して来た苦心の宝だ。——この明りじ

やはつきり見分けがつくめえが、よく見ねえ。お大名のお姫様の爪だつて、これ程の艶はあるめえからの」

三日月なりに切つてある、目にいれたいくらの小さな爪を、

母指おやゆびと中指なかゆびの先で摘つまんだまま、ほのかな月光げっこうに透すかした春はる重げの面おもてには、得意とくいの色いろが明々浮ありありうかんで、はては傍そばに松五郎まつろうのいることをさえも忘わすれた如ごとく、独り頻ひとしきりにうなずいていたが、ふと向むこう牒ずねにたかつた藪蚊やぶかのかゆさに、漸ようやくおのれに還かえつたのである。突然とつぜん平手ひらてで牒すねをたたくと、くすぐつたそうにふふふと笑わらつた。

「重しげさん、お前まえままつたかく変ものり者ものだの」

「なんでよ」

「考かんがえても見みねえ。これが金きんの棒ぼうを削けずつた粉こなとでもいうンなら、拾ひろいがいもあろうけれど、高たかが女おんなの爪つめだぜ。一貫目かんめひろ拾ひろつたところで、瘰癧ひようそくすりの薬くすりになるくれえが、関せきの山やまだらうじゃねえか。よく

師匠ししょうも、春重はるしげは変かわり者ものだといつてなすつたが、まさかこれ程ほど

たア思おもわなかつた」

「おいおい松まつつあん、はつきりしなよ。おいらが変かわり者ものじゃアね

え。世間せけんの奴やつらが変かわつてゐるんだ。それが証しょうこ拠こにや。願がんにかけて

おせんの茶屋ちややへ通かよう客きやくは山程やまほどあつても、爪つめを切きるおせんのかた

ちを、一度どだつて見みた男おとこは、おそらく一人ひとりもなからうじゃねえか。

——そこから生うまれたこの爪つめだ」

一つずつ数かずえたら、爪つめの数かずは、百個こちか近くもあるであらう。春はるし

重げは、もう一度ど糠ぬかぶくろ袋にぎを握にぎりしめて、薄気味うすきみわる悪わるくにやりと笑

つた。

朝<sup>あさ</sup>

一

ちち、ちち、ちちち。

行<sup>あんどん</sup>燈はともしたままになつていたが、外<sup>そと</sup>は既<sup>すで</sup>に明<sup>あ</sup>けそめたのであろう。今<sup>いま</sup>まで流<sup>なが</sup>し元<sup>もと</sup>で頻<sup>しき</sup>りに鳴<sup>な</sup>いていた虫<sup>むし</sup>の音<sup>ね</sup>が、絶<sup>た</sup>えがちに細<sup>ほそ</sup>つたのは、雨戸<sup>あまど</sup>から差<sup>さ</sup>す陽<sup>ひ</sup>の光<sup>ひか</sup>りに、おのずと怯<sup>おび</sup>えてしまつたに相違<sup>そうい</sup>ない。

が、虫<sup>むし</sup>の音<sup>ね</sup>の細<sup>ほそ</sup>つたことも、外<sup>そと</sup>が白<sup>しら</sup>々と明<sup>あ</sup>けそめて、路地<sup>ろじ</sup>の

溝板<sup>どぶいた</sup>を踏む<sup>ふ</sup>人の足音<sup>あしおと</sup>が聞え<sup>きこ</sup>はじめたことも、何もかも知らず  
 に、ただ独り<sup>ひと</sup>、破れ畳<sup>やぶ</sup>の上に据えた寺子屋机<sup>てらこやつくえ</sup>の前に頑張<sup>まへ</sup>つたま  
 ま、手許<sup>てもと</sup>の火鉢<sup>ひばち</sup>に載せた薬罐<sup>やかん</sup>からたぎる湯気<sup>ゆげ</sup>を、千切<sup>ぎ</sup>れた蟋蟀<sup>こおろぎ</sup>  
 の片脚<sup>かたあし</sup>のように、頬<sup>ほほ</sup>を引<sup>ひ</sup>ツつらせながら、夢中<sup>むちゆう</sup>で吸<sup>す</sup>い続<sup>つづ</sup>けて  
 いたのは春重<sup>はるしげ</sup>であつた。

七軒長屋<sup>けんながや</sup>のまん中は縁起<sup>えんぎ</sup>がよくないという、人のいやがるそん  
 まん中<sup>なか</sup>へ、所帯道具<sup>しよたいどうぐ</sup>といえ、土竈<sup>どがま</sup>と七輪<sup>りん</sup>と、箸<sup>はし</sup>と茶碗<sup>ちやわん</sup>に鍋  
 が一つ、膳<sup>ぜん</sup>は師匠<sup>ししよう</sup>の春信<sup>はるのぶ</sup>から、縁<sup>ふち</sup>の欠けた根ごろの猫脚<sup>ねこあし</sup>を  
 もらつたのが、せめて道具<sup>どうぐ</sup>らしい顔<sup>かお</sup>をしているくらいが関<sup>せき</sup>の山<sup>やま</sup>。  
 いわばすツてんてんの着<sup>き</sup>の着<sup>き</sup>のままで蛆<sup>うじ</sup>が湧<sup>わ</sup>くのも面白<sup>おもしろ</sup>から  
 うと、男<sup>おとこ</sup>やもめの垢<sup>あか</sup>だらけの体<sup>からだ</sup>を運び込<sup>こ</sup>んだのが、去年<sup>きよねん</sup>の暮<sup>くれ</sup>も

押し詰つまつて、引摺ひきずりり餅もちが向むこツ鉢ばち巻まきで練ねり歩あるいていた、廿五日にちの夜よるの八どきつ時ときだった。

ざつと二年ねん。きのうもきょうもない春はる重しげのことながら、二十七ななのきょうの若わかきで、女おんなの数は千人にちん近くも知しり尽つくくしたのが自慢じまんなだけに、並大抵なみたいていのことでは興きょう味みが湧わかず、師匠ししやうの通とおりに描かく美人画びじんがなら、いま直すぐにも描かける器用きような腕うでが却かえつて邪間じやまになつて、着物きものなんぞ着きた女おんなを描かいても、始はじまらないとの心こころからであらう。自然しぜんの風景ふうけいを写うつすほかは、画帳がちやうは悉ことごとく、裸婦らふの像ぞうに満みたさされているという変かわり様ようだった。

二畳じように六畳じようの二間まは、狭せまいようでも道具どうぐがないので、独ひとり住居ずまいには広ひろかった。そのぐるりの壁かべに貼はりめぐらした絵えの数かずが、一目め

で数<sup>かず</sup>えて三十余<sup>あま</sup>り、しかも男<sup>おとこ</sup>と名<sup>な</sup>のつく者<sup>もの</sup>は、半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>も描<sup>か</sup>いてあるのではなく、女<sup>おんな</sup>と、いうよりも、殆<sup>ほとん</sup>ど全<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>が、おせんの様<sup>さま</sup>々<sup>ざま</sup>な姿<sup>したい</sup>態<sup>つく</sup>に尽<sup>つく</sup>されているのも凄<sup>すさ</sup>まじかつた。

その六<sup>じゅう</sup>畳<sup>あんどん</sup>の行<sup>した</sup>燈<sup>つくえ</sup>の下<sup>な</sup>に、机<sup>だ</sup>の上<sup>か</sup>から投<sup>しへん</sup>げ出<sup>まい</sup>されたのであろう、腰<sup>こし</sup>の付<sup>つけ</sup>根<sup>ね</sup>から下<sup>した</sup>だけ<sup>とき</sup>を、幾<sup>いく</sup>つともなく描<sup>か</sup>いた紙<sup>し</sup>片<sup>へん</sup>が、十<sup>まい</sup>枚<sup>ちか</sup>近くもちらばつたのを、時<sup>とき</sup>おりじろりじろりとにらみながら、薬<sup>やかん</sup>罐<sup>の</sup>湯<sup>ゆ</sup>氣<sup>げ</sup>を、鼻<sup>はな</sup>の穴<sup>あな</sup>が開<sup>ひら</sup>きツ放<sup>はな</sup>しになる程<sup>ほど</sup>吸<sup>す</sup>い込<sup>こ</sup>んでいた春<sup>はる</sup>重<sup>しげ</sup>は、ふと、行<sup>あん</sup>燈<sup>どん</sup>の芯<sup>しん</sup>をかき立<sup>た</sup>てて、薄<sup>うす</sup>氣<sup>き</sup>味<sup>み</sup>悪<sup>わる</sup>くニヤリと笑<sup>わら</sup>つた。

「ふふふ。わるくねえにおいだ。——世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>の奴<sup>やつ</sup>らア智<sup>ち</sup>恵<sup>え</sup>なしだから、女<sup>おんな</sup>のおい<sup>は</sup>は、肌<sup>はだ</sup>からじかでなけりや、嗅<sup>か</sup>げねえように思<sup>おも</sup>つてるが、情<sup>なさけ</sup>ねえもんだ。この爪<sup>つめ</sup>が、薬<sup>やかん</sup>罐<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>で煮<sup>に</sup>えくり返<sup>かえ</sup>る甘<sup>あま</sup>い

句を、一度でいいから嗅<sup>か</sup>がしてやりてえくれえのもんだ。紅<sup>べに</sup>やお  
 しろいのおいなんぞたア訳<sup>わけ</sup>が違<sup>ちが</sup>つて、魂<sup>たましい</sup>が極樂遊<sup>ごくらくあそ</sup>びに出<sup>で</sup>かけ  
 るたアこのことだろう。おまけにただの駄<sup>だ</sup>爪<sup>づめ</sup>じやねえ。笠<sup>かさ</sup>森<sup>もり</sup>お  
 さんの、磨<sup>みが</sup>きのかかった珠<sup>たま</sup>のような爪<sup>つめ</sup>様<sup>さま</sup>だ。——大方<sup>おおかた</sup>松<sup>まつ</sup>五<sup>ご</sup>郎<sup>ろう</sup>  
 の奴<sup>やつ</sup>ア、今<sup>いま</sup>時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>、やけで出<sup>で</sup>かけた吉<sup>よし</sup>原<sup>わら</sup>で、折<sup>せ</sup>角<sup>かく</sup>拾<sup>ひろ</sup>つたよう  
 な博<sup>ばく</sup>打<sup>うち</sup>の金<sup>かね</sup>を、手<sup>て</sup>もなく捲<sup>まき</sup>揚<sup>あ</sup>げられてることだろうが、可<sup>かわ</sup>哀<sup>い</sup>想<sup>そう</sup>  
 にこうしておさんの脚<sup>あし</sup>を描<sup>か</sup>きながらこの句<sup>く</sup>をかいでる氣<sup>き</sup>持<sup>もち</sup>ア、鯨<sup>し</sup>  
 やちほこだち 鉾<sup>ほ</sup> 立<sup>た</sup>をしたつてわかるこつちやアあるめえて。——ふふふ。  
 もうひと摘<sup>つか</sup>み、新<sup>あた</sup>しいこいつをいれ、肚<sup>はら</sup>一<sup>ぱい</sup>杯<sup>はい</sup>にかぐとしようか」  
 春<sup>はる</sup>重<sup>しげ</sup>は傍<sup>かたわ</sup>らに置<sup>お</sup>いた紅<sup>べに</sup>の糠<sup>ぬか</sup>袋<sup>ぶくろ</sup>を、如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>にも大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>そうに  
 取<sup>とり</sup>上<sup>あ</sup>げると、おもむろに口<sup>くち</sup>紐<sup>ひも</sup>を解<sup>と</sup>いて、十<sup>じゅう</sup>ばかりの爪<sup>つめ</sup>を掌<sup>のひら</sup>にあ

けたが、そのまま湯のたぎる薬罐の中へ、一つ一つ丁寧につまみ込んだ。

「ふふふ、こいつアいい匂だなア。堪らねえ匂だ。——笠森の茶屋で、おせんを見てよだれを垂らしての野呂間達に、猪口半分でいいから、この湯を飲ましてやりてえ気がする。——」

どこぞの秋刀魚を狙った泥棒猫が、あやまつて庇から路地へ落ちたのであろう。突然雨戸を倒したような大きな音が窓下に聞えたが、それでも薬罐の中に埋められた春重の長い顔はただその眉が阿波人形のように、大きく動いただけで、決して横には向けられなかった。

「おたき」

「え」

「隣<sup>となり</sup>じゃまた、いつもの病<sup>やまい</sup>が始<sup>はじ</sup>まつたらしいぜ。何<sup>なに</sup>しろあ<sup>な</sup>の匂<sup>におい</sup>じ

や、臭<sup>くさ</sup>くツてたまらねえな」

「ほんとうに、何<sup>な</sup>んて因<sup>いん</sup>果<sup>が</sup>な人<sup>ひと</sup>なんだろうね。顔<sup>かお</sup>を見<sup>み</sup>りや、十<sup>じゅう</sup>人<sup>にん</sup>

なみの男<sup>おとこ</sup>前<sup>まえ</sup>だし絵<sup>え</sup>も上<sup>じょう</sup>手<sup>ず</sup>だつて話<sup>はなし</sup>だけど、してゐることは、ま

るツきり並<sup>なみ</sup>の人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>と変<sup>かわ</sup>つてゐるんだからね」

「おめえ。ちよいと隣<sup>となり</sup>へ行<sup>い</sup>つて来<sup>き</sup>ねえ」

「何<sup>なに</sup>しにさ」

「夜のこたア、こつちが寝てるうちだから、何をしてなにかも構かまわねえが、お天道様てんとうさまが、上あがつたら、その匂においだけに止やめてもらいてえツてよ。仕事しごとに行いつたつて、えたいの知しれぬ匂においが、半纏はんてんにまでしみ込んでるんで、外間げえぶんが悪わるくツて仕様しやうがありやアしねえ」

「女おんなじゃ駄目だめだよ。お前まえさん行いつて、かけ合あつて来きとくれよ」

「だからね。おいら行いくな知しつてるが、今いまもそいつた通とおり、帳ち場ようばへ出でかけてからがみつともなくて仕様しやうがねえんだ。あんな匂においの中なかへ這入へえつちやいかねえツてのよ」

「あたしだつていやだよ。まるで焼場やきばのような匂においだもの。きのうだつて、髪結かみゆいのおしげさんがいうじやアないか。お上かみさんここへ結ゆいに行くのもいいけれど、お隣となりの壁越かべごしに伝つたわつてくる匂においを

かぐと、ほとけくさ 仏 臭いようなき気がしてたまらないから、なるたけこ

つちへ、で出かけて来てもらいたいって。——いったいお前さん、まえ

あれア何なにを焼くや匂においだと思おもってるの」

「わか分つてらアな」

「な何んだえ」

「やつえ奴ア絵かきツて振れ込みだが、うそ嘘ツ八だぜ」

「えおや、絵かきじやないのかい」

「やつそうとも。奴ア雪駄直しだ」

「せつたなお雪駄直し。——」

「ちげそれに違えねえやな。でえいち、ほか外にあんな匂においをさせる家業かぎよう

が、はずある筈はなかうじやねえか。せつた雪駄の皮かわを、なべ鍋で煮にるんだ。

軟<sup>やわ</sup>らかにして、針<sup>はり</sup>の通りがよくなるようによ」

「そうかしら」

「しらも黒<sup>くろ</sup>もありアしねえ。それが為<sup>ため</sup>に、忙<sup>いそ</sup>しい時<sup>とき</sup>にや、夜<sup>よ</sup>ツピ  
て鍋<sup>なべ</sup>をかけツ放<sup>はな</sup>しにしとくから、こつちこそいい面<sup>つら</sup>の皮<sup>かわ</sup>なんだ。

——この壁<sup>かべ</sup>ンところ鼻<sup>はな</sup>を当てて臭<sup>か</sup>いで見<sup>み</sup>ねえ。火事場<sup>かじば</sup>で雪駄<sup>せつた</sup>の焼<sup>や</sup>  
け残<sup>のこ</sup>りを踏<sup>ふ</sup>んだ時<sup>とき</sup>と、まるツきり変<sup>かわ</sup>りがねえじやねえか」

「あたしやもう、ここにいてさえ、いやな気持<sup>きもち</sup>がするんだから、  
そんなところへ寄<sup>よ</sup>るなんざ、真<sup>ま</sup>ツ平<sup>ひら</sup>よ。——ねえお前<sup>まえ</sup>さん。後生<sup>ごしょう</sup>  
だから、かけ合<sup>あ</sup>つて来<sup>き</sup>とくれよ」

「おめえ行<sup>い</sup>つて来<sup>き</sup>ねえ」

「女<sup>おんな</sup>じや駄目<sup>だめ</sup>だというのにさ」

「男おとこが行いつちやア、穩おだやかでねえから、おめえ行いきねえツてんだ」  
 「だつて、こんなこたア、どこの家うちだつて、みんな亭主ていしゅの役やくじやないか」

「おいらアいけねえ」

「なんて氣きの弱よわい人ひとなんだろう」

「臭くせえからいやなんだ」

「お前まえさんより、女おんなだもの。あたしの方ほうが、どんなにいやだか知しれやしない。——昔むかしツから、公事くじかけ合あいは、みんな男おとこのつとめな

んだよ」

「ふん。昔むかしも今いまもあるもんじやねえ。隣近所となりきんじよのこたア、女によう房ぼうがするに極きまツてらアな。行いつて、こつぴどくやつ付つけて来きね

えッてことよ」

壁かべ一重隣えとなりの左官夫婦さかんふうふが、朝飯あさめしの膳ぜんをはさんで、聞えよがしの  
いやがらせも、春重はるしげの耳みみへは、秋あきの蠅はえの羽はばたき程ほどにも這入はいら  
なかつたのであろう。行燈あんどんの下したの、薬罐やかんの上うえに負おいかぶさつた  
その顔かおは、益々ますます上気じょうきしてゆくばかりであつた。

### 三

「重しげさん。もし、重しげさんは留守るすかい。——おやッ、天道様てんとうさまが臍へそ  
の皺しわまで御覧ごらんなさろうツて真ツ昼間まびるま、あかりをつけッ放はなしにして  
るなんざ、ひど過ぎするぜ。——寝ねているのかい。起おきてるんなら

開<sup>あ</sup>けてくんねえ」

どこかで一杯<sup>ぱいひ</sup>引<sup>ひ</sup>っかけて来<sup>き</sup>た、酔<sup>よ</sup>いの廻<sup>まわ</sup>った舌<sup>した</sup>であろう。声<sup>こえ</sup>は確<sup>たしかほりし</sup>に彫<sup>まつ</sup>師<sup>ろう</sup>の松五郎であつた。

「ふふふふ。とうとう寄<sup>よ</sup>りやがつたな」

首<sup>くび</sup>をすくめながら、口<sup>くち</sup>の中<sup>なか</sup>でこう呟<sup>つぶや</sup>いた春重<sup>はるしげ</sup>は、それでも爪<sup>つめ</sup>を煮<sup>に</sup>込<sup>こ</sup>んでいる薬<sup>やかん</sup>罐<sup>そ</sup>の傍<sup>そば</sup>から顔<sup>かお</sup>を放<sup>はな</sup>さずに、雨<sup>あまど</sup>戸<sup>ほ</sup>の方<sup>ぬす</sup>を偷<sup>み</sup>み見た。陽<sup>ひ</sup>は高<sup>たか</sup>々と昇<sup>のぼ</sup>っているらしく、今<sup>いま</sup>さら氣<sup>き</sup>付<sup>づ</sup>いた雨<sup>あまど</sup>戸<sup>ほ</sup>の隙<sup>すき</sup>間<sup>ま</sup>には、なだらかな日<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>が、吹<sup>ふ</sup>矢<sup>きや</sup>で吹<sup>ふ</sup>き込<sup>こ</sup>んだように、こまいの現<sup>あらわ</sup>れた壁<sup>かべ</sup>の裾<sup>すそ</sup>へ流<sup>なが</sup>れ込<sup>こ</sup>んでいた。

「春重<sup>はるしげ</sup>さん。重<sup>しげ</sup>さん。――」

が、それでも春重<sup>はるしげ</sup>は返<sup>へん</sup>事<sup>じ</sup>をしずに、そのまま鎌<sup>かまくび</sup>首<sup>あ</sup>を上げて、

ひそかに上りあがはなの方ほうへ這はい寄よつて行いった。

「おかしいな。いねえはずアねえんだが。——あかりをつけて寝ねてるなんぎ、どっちにしても不用心ぶようじんだぜ。おいらだよ。松五郎まつろう様の御登城ごとうじょうだよ」

「もし、親方おやかた」

突然とつぜん、隣となりの女房にようぼうおたきの声こえが聞きこえた。

「ねえお上さんかみ。ここの家うちア留守るすでげすかい。寝ねてるんだか留守るすなんだか、ちつともわからねえ」

「いますともさ。だが親方おやかた、悪いわるこたアいわないから、滅多めったに戸とを開あけるなアお止よしなさいよ。そこを開あけた日ひにや、それこそ生皮なまかわの匂におで、隣近所となりきんじよは大迷惑おおめいわくだわな」

「生皮なまかわの匂においつてなんなの、お上かみさん」

「おや、親方おやかたにやこの匂においがわからないのかい。このたまらないいやな匂においが。……」

「判わからねえこたアねえが、こいつアおまえ、膠にかわを煮にてる匂においだわな」

「冗じようだん談なべじゃない。そんな生なまやさしいもんじやありやアしない。

お鍋なべを火鉢ひばちにかけて、雪駄せったの皮かわを煮にてるんだよ。今いまもうちで、絵え師しなんて振ふれ込こみは、大嘘おおうそだつて話はなしを。……」

がらツと雨戸あまどが開あいて、春重はるしげの辛からい顔かおがぬツと現あらわれた。

「お早はよう」

「お早はようじやねえや。何なんだつて松まつつあんこんな早はやくツからや

つて来きたんだ」

「早え<sup>はや</sup>ことがあるもんか。お天道様<sup>てんとうさま</sup>は、もうとつくに朝湯<sup>あさゆ</sup>を済<sup>す</sup>まして、あんなに高く昇<sup>たか</sup>つてゐるじゃねえか。——いつてえ重<sup>しげ</sup>さん。おめえ、寝<sup>ね</sup>てえたんだか起<sup>お</sup>きてたんだか、なぜ返事<sup>へんじ</sup>をしてくれねえんだ」

「返事<sup>へんじ</sup>なんざ、しちやアいられねえよ。——いいからこつちへ這<sup>は</sup>入<sup>い</sup>ンねえ」

不機嫌<sup>ふきげん</sup>な春重<sup>はるしげ</sup>の顔<sup>かお</sup>は、桐油<sup>とうゆ</sup>のように強張<sup>こわば</sup>つていた。

「へえつてもいいかい」

「帰<sup>かえ</sup>るんなら帰<sup>かえ</sup>ンねえ」

「いやにおどかすの」

「振<sup>ふ</sup>られた朝<sup>あさ</sup>帰<sup>かえ</sup>りなんぞに寄<sup>よ</sup>られちや、かなわねえ」

「ふふふ。振られてなんざ来ねえよ。それが証拠にや、いい土産を持って来た」

「土産なんざいらねえから、そこを締めたら、もとの通り、ちやんと心張棒をかけといてくんねえ」

「重さん、おめえまだ寝るつもりかい」

「いいから、おいらのいった通りにしてくんねえよ」

松五郎が不承無承に、雨戸の心張棒をかうと、九尺二間の家の中は再び元通りの夜の世界に変わって行った。

「上ねえ」

が、松五郎は、次第に鼻を衝いてくる異様な匂に、そのままそこへ佇んでしまった。

## 四

行燈<sup>あんどん</sup>はほのかにともつていたものの、日向<sup>ひなた</sup>から這入<sup>はい</sup>つて来<sup>き</sup>たばかりの松五郎<sup>まつごろう</sup>の眼<sup>め</sup>には、家<sup>うち</sup>の中<sup>なか</sup>は真ッ暗<sup>まくら</sup>闇<sup>やみ</sup>であつた。

「松<sup>まつ</sup>つあん、何<sup>な</sup>んで上<sup>あが</sup>らねえんだ」

「暗<sup>くら</sup>くつて、足<sup>あし</sup>もとが見<sup>み</sup>えやしねえ」

「不自由<sup>ふじゆう</sup>な眼<sup>まなこ</sup>だの。そんなこつちや、面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>い思<sup>おも</sup>いは出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ねえぜ」

「重<sup>しげ</sup>さん、おめえ、ずつと起<sup>お</sup>きて何<sup>なに</sup>をしてなすつた」

「ふふふ。こつちへ上<sup>あが</sup>りやア、直<sup>す</sup>ぐに判<sup>わか</sup>るこつた。——まアこの  
行燈<sup>あんどん</sup>の傍<sup>そば</sup>へ来<sup>き</sup>て見<sup>み</sup>ねえ」

漸く眼に慣れて来たのであろう。行燈の輪が次第に色を濃くするにつれて、狭いあたりの有様は、おのずから松五郎の前にはつきり浮き出した。

「絵をかいてたんじやねえのかい」

「絵なんざかいちやアいねえよ。——おめえにや、この匂がわか

らねえかの」

「膠だな」

「ふふ、膠は情ねえぜ」

「じやアやつぱり、牛の皮でも煮てるのか」

「馬鹿をいわッし。おいらが何んで、牛の皮に用があるんだ。も

つともこの薬罐の傍へ鼻を押ツつけて、よく嗅いで見ねえ」

「おいらア、こんな匂においは真まア平ひらだ」

「何なんだって。この匂においがかけねえツて。ふふふ。世よの中なかにこれ程ほど

のいい匂においは、またとあるもんじやねえや、伽羅沈香きやらちんこうだろうが、

蘭らんじや麝じゃだろうが及びおよもつかねえ、勿もつた体たいねえくれえの名香めいこうだぜ。

——そんな遠とくにいたんじや、本ほん当とうの香かりは判わからねえから、も

つと葉罐やかんの傍そばに寄よつて、鼻はなの穴あなをおツぴろげて嗅かいで見みねえ」

「いつてえ、何なにを煮にてるのよ」

「江戸えどはおろか、日本中にほんじゅうに二つとねえ代物しろものを煮にてるんだ」

「おどかしちやいけねえ。そんな物ものがある訳わけはなからうぜ」

「なにねえことがあるものか。——それ見みねえ。おめえ、この袋ふくろ

にや覚えおぼえがあらう」

鼻はなの先さきへ付つき付つけた紅べにの糠ぬか袋ぶくろは、春重はるしげの手ての中なかで、珠たまのようちいに小ちいさく躍おどった。

「あッ。そいつを。……」

「どうだ。おせんつめの爪つめだ。この匂におを嫌きらうようじや、男おとこに生うれた甲か斐いがねえぜ」

「重しげさん。おめえは、よつぽどの変かわり者ものだのう」

松五郎まつろうは、あらためて春重はるしげの顔かおを見守みまもった。

「変かわり者ものじやアねえ。そういうおめえの方ほうが、変かわつてるんだ。――

――四角四面かくめんにかしこまおとこっているお武家ぶけでも、男おとこと生うれたからにや、女おんなの嫌きらいな者ものツ、ただの一人ひとりもありやアしめえ。その万まん人にんが万ま人にん、好きすで好きすでたまらねえ女おんなの、これが本ほん当とうの匂におだろうじ

やねえか。成る程、肌の匂もある。髪かみの匂においもある。乳ちちの匂においもある  
 にア違ちがえねえ。だが、その数かずある女おんなの匂においを、一つにまとめた有ありが  
 難味たみの籠こもつたのが、この匂においなんだ。——三浦屋うらやの高尾たかおがどれほ  
 ど綺麗きれだろうが、楊枝見世ようじみせのお藤ふじがどんなに評判ひようばんだろうが、  
 とどのつまりは、みめかたちよりは、女おんなの匂においに酔よつて客きやくが通かようと  
 いう寸法すんぽうじゃねえか。——よく聞ききなよ。匂においだぜ。このたまら  
 ねえいい匂においだぜ」  
 「冗談じやうだんじゃねえ。おいらアいくら何なんだつて、こんな匂においをか  
 ぎたくツて、通かようような馬鹿ばか氣けたこたア。……」  
 「あれだ。おめえにやまだ、まるツきり判わからねえと見みえるの。こ  
 いつだ。この匂においが、嘘うそも隠かくしもねえ、女おんなの匂においだつてんだ」

「馬鹿な、おめえ。——」

「そうか。そう思おもつてゐるんなら、いまおめえに見みせてやる物ものがある。きつとびつくりするなよ」

春はる重しげはこういいながら、いきなり真ま暗くらな戸棚とだなの中なかへ首くびを突つ込んだ。

## 五

じりじりツと燈とう芯しんの燃もえ落おちる音おとが、しばしのしじまを破やぶつてえあたりを急きゆうに明あかるくした。が、それも束つかの間ま、やがて油あぶらが尽つきたのであろう。行あん燈どんは忽たちまち消きえて、あたりは真しんの闇やみに變かわつて

しまった。

「いたずらしちやアいけねえ。まるつきりまつ暗くらで、何なんにも見みえやしねえ」

背せ伸びをして、三尺じやくとだなの戸棚おくの奥さぐを探さぐっていた春重はるしげは、闇やみの中なかから重い声おもいこえでこいいいながら、もう一度ど、ごとりと鼠ねずみのように音おとを立てた。

「いたずらじゃねえよ。油あぶらが切きれちやつたんだ」

「油あぶらが切きれたツて。そんなら、行燈あんどんのわきに、油あぶら差さしと火口ほくち

がおいてあるから、速はやくつけてくんねえ」

「どこだの」

「行燈あんどんの右手みぎてだ」

くち口でそういわれても、勝手<sup>かつて</sup>を知ら<sup>し</sup>ない暗<sup>やみ</sup>の中<sup>なか</sup>では、手探<sup>てさぐ</sup>りも容易<sup>よ</sup>でなく、松五郎<sup>まつごろう</sup>は破<sup>やぶ</sup>れ置<sup>たま</sup>の上<sup>うえ</sup>を、小氣味<sup>こきみ</sup>悪<sup>わる</sup>く這<sup>は</sup>い廻<sup>まわ</sup>つた。

「速<sup>はや</sup>くしてもらいてえの」

「いまつける」

探<sup>さぐ</sup>り当<sup>あ</sup>てた油<sup>あぶら</sup>差<sup>さし</sup>を、雨戸<sup>あまど</sup>の隙間<sup>すきま</sup>から微<sup>かす</sup>かに差<sup>さ</sup>し込<sup>こ</sup>む陽<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>を頼<sup>たよ</sup>りに、油<sup>あぶら</sup>皿<sup>ざら</sup>のそばまで持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>つた松五郎<sup>まつごろう</sup>は、中<sup>なか</sup>指<sup>ゆび</sup>の先<sup>さき</sup>で冷<sup>つめ</sup>たい真<sup>しん</sup>鍬<sup>ちゆう</sup>の口<sup>くち</sup>を加<sup>か</sup>減<sup>げん</sup>しながら、とツとツとと、おもく落<sup>お</sup>ちた油<sup>あぶら</sup>を透<sup>す</sup>かして見<sup>み</sup>たが、さてどうやらそれがうまく運<sup>はこ</sup>ぶと、これ<sup>あし</sup>も足<sup>さき</sup>の先<sup>さぐ</sup>で探<sup>だ</sup>り出<sup>だ</sup>した火口<sup>ほくち</sup>を取<sup>と</sup>つて、やつとの思<sup>おも</sup>いで行<sup>あん</sup>燈<sup>どん</sup>に灯<sup>ひ</sup>をいれた。

ぱつと、漆<sup>うるし</sup>盆<sup>ぼん</sup>の上<sup>うえ</sup>へ鬱金<sup>うこん</sup>の絵<sup>え</sup>の具<sup>ぐ</sup>を垂<sup>た</sup>らしたように、あた

りが明<sup>あか</sup>るくなつた。同時<sup>どうじ</sup>に、春重<sup>はるしげ</sup>のニヤリと笑<sup>わら</sup>つた薄氣味<sup>うすきみ</sup>悪い顔<sup>かお</sup>が、こつちを向<sup>む</sup>いて立<sup>た</sup>つていた。

「松<sup>まつ</sup>つあん。おめえ本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に、女<sup>おんな</sup>の匂<sup>におい</sup>は、麝<sup>じゃ</sup>香<sup>こう</sup>の匂<sup>におい</sup>だと思<sup>おも</sup>つてるんだの」

「そりやアそうだ。こんな生<sup>なま</sup>皮<sup>かわ</sup>のよう<sup>に</sup>な匂<sup>におい</sup>が女<sup>おんな</sup>の匂<sup>におい</sup>でたまるもんか」

「そうか。じやアよくわかるように、こいつを見<sup>み</sup>せてやる」

編<sup>あ</sup>めば牛蒡<sup>ごぼう</sup>締<sup>じめ</sup>くらい<sup>ふと</sup>の太<sup>ふと</sup>さはあるであらう。春重<sup>はるしげ</sup>の手<sup>て</sup>から、無<sup>む</sup>造<sup>ぞう</sup>作<sup>さく</sup>に投<sup>な</sup>げ出<sup>だ</sup>された真<sup>ま</sup>ツ黒<sup>くろ</sup>な一束<sup>たば</sup>は、松<sup>まつ</sup>五<sup>ご</sup>郎<sup>ろう</sup>の膝<sup>ひざ</sup>の下<sup>した</sup>で、蛇<sup>へび</sup>のよう<sup>に</sup>にひと<sup>ま</sup>うねりうねると、ぐさりとそのま<sup>た</sup>ま<sup>み</sup>上<sup>うえ</sup>へ、とぐろを巻<sup>ま</sup>いて納<sup>おさ</sup>まつてしまつた。

「あッ」

「気味の悪いもんじゃねえよ。よく手に取って、その匂を嗅いで見ねえ」

まつろう あんどん  
松五郎は行燈の下に、じっと眼を瞠った。

「これア重さん、髪の毛じゃねえか」

「その通りだ」

「こんなものを、おめえ。……」

「ふふふ、気味が悪いか。情ねえ料簡だの、爪の匂がいやだ

というから、そいつを嗅がせてやるんだが、これだって、髭なん

ぞたわけが違って、滅多矢鱈に集まる代物じゃアねえんだ。数

にしたら何万本。しかも一本ずつがみんな違った、若い女の髪

の毛だ。——その中へ黙つて顔を埋めて見ねえ。ひとりひとりの違つた女の声が、代り代りに聞えて来る。この世ながらの極楽だ。上はお大名のお姫様から、下は橋の下の乞食まで、十五から三十までの女と名のつく女の髪は、ひと筋残らずはいってるんだぜ。——どうだ松つあん。おいらア、この道へかけちや、江戸はおろか、蝦夷長崎の果へ行つても、ひけは取らねえだけの自慢があるんだ。見ねえ、髪かみの毛はこの通り、一本残らず生きてるんだから。……」

松五郎まつごろうの膝もとから、黒髪くろかみの束を取りあげた春重はるしげは、忽ちそれを顔へ押し当てると、次第しだいに募る感激かんげきに身をふるわせながら、異様な声で笑い始めた。

「重<sup>しげ</sup>さん。おれア<sup>けえ</sup>帰<sup>けえ</sup>る」

「帰<sup>けえ</sup>るンなら、せめて匂<sup>におい</sup>だけでも嗅<sup>か</sup>いできねえ」

が、松<sup>まつ</sup>五<sup>ろう</sup>郎<sup>わう</sup>は、もはや腰<sup>こし</sup>が坐<sup>すわ</sup>らなかつた。

## 六

「ああ氣<sup>き</sup>味<sup>み</sup>が悪<sup>わる</sup>かつた。ついゆうべの惚<sup>のろけ</sup>氣<sup>き</sup>を聞<sup>き</sup>かせてやろうと思<sup>おも</sup>つて、寄<sup>よ</sup>つたばかりに、ひでえ目<sup>め</sup>に遇<sup>あ</sup>つちやつた。変<sup>かわ</sup>り者<sup>もの</sup>ツてこたア知<sup>し</sup>つてたが、まさか、あれ程<sup>ほど</sup>たア思<sup>おも</sup>わなかつた。——あん

な奴<sup>やつ</sup>につかまつちやア、まつたくかなわねえ」

彈<sup>はじ</sup>かれた煎<sup>いり</sup>豆<sup>まめ</sup>のように、雨<sup>あま</sup>戸<sup>ど</sup>の外<sup>そと</sup>へ飛<sup>と</sup>び出<sup>だ</sup>した松<sup>まつ</sup>五<sup>ろう</sup>郎<sup>わう</sup>は、酔<sup>よ</sup>

いも一時に醒め果てて、一寸先も見えなかつたが、それでも溝  
 板ぶいたの上を駆けだして、角かどの煙草屋の前まで来ると、どうやらほ  
 つと安心あんしんの胸むねを撫なでおろした。

「だが、いったいあいつは、何んだってあんな馬鹿ばか氣たことが好  
 きなんだろう。爪つめを煮たり、髪かみの毛けの中なかへ顔かおを埋うめたり、氣狂  
 じみた真似まねをしちやア、いい氣持きもちになつてるようだが、虫むしのせえ  
 だとする、ちと念ねんがいり過ぎるしの。どうも料簡りょうけん方がたがわか  
 らねえ」

ぶつぶつひとり呟つぶやきながら、小首こくびを傾かしげて歩いて来た松五郎まつごろうは、  
 いきなりぽんと一つ肩かたをたたかれて、はッとした。

「どうした、兄あにイ」

「おおこりや松住町」  
まつずみちよう

「松住町じゃねえぜ。朝あさつぱらから、素人芝居しろうとしばいの稽古けいこでも

なからう。いい若わえ者ものがひとり言ごをいつてるなんざ、みつともね

えじゃねえか」

ぼうずあたま

坊主頭へ四つにたたんだ手拭てぬぐいを載のせて、朝あさの陽差ひざしを避さけな

がら、高たか々と尻しりを絡からげたいでたちの相手あいては、同じ春信おな はるのぶの摺師すりし

をしている八五郎ろうだった。

「みつともねえかも知しれねえが、あれ程ほどたア思おもわなかったからよ」

「何がよ」  
なに

「春重はるしげだ」

「春重はるしげがどうしたツてんだ」

「どうもこうもねえが、あいつアおめえ、日本一にほんの変り者かわものだぜ」

「春重はるしげの変り者かわものだつてこたア、いつも師匠ししょうがいつてるじやね

えか。今いまさら変り者かわものぐれえに、驚くおめえでもなからうによ」

「うんにや、そうでねえ。ただの変り者かわものなら、おいらもこうまじ

や驚かおどろねえが、一晚ばんじゅう中寝ねずに爪つめを煮にたり、束たばにしてある女おんなの

髪かみの毛けを、一本ぽん一本ぽんしやぶつたりするのを見みちやアいくらおいら

が度どきよう胸むすを据すえたつて。……」

「爪つめを煮にるたア、そいつアいつてえ何なんのこつたい」

「薬罐やかんに入いれて、女おんなの爪つめを煮にるんだ」

「女おんなの爪つめを煮にる。——」

「そうよ。おまけにこいつア、ただの女おんなの爪つめじやアねえぜ。当時とうじ

江戸で、一といつて二と下らねえといわれてる、笠森おせんかさもりの爪つめなんだ」

「冗談じょうだんじゃねえ。おせんの爪つめが、何なんで煮にる程ほどと取れるもんか、おめえも人ひとが好過よすぎるぜ。春重はるしげに欺だまされて、気味きみが悪いの恐おそろしいのと、頭あたまを抱かかえて帰かえってくるなんぞ、お笑わらい草ぐさだ。おおかた絵えを描かく膠にかわでも煮にていたんだろう。そいつをおめえが間違まちがつて。

……」

「そ、そんなんじやねえ。真しん正しょう間違まちがいのねえおせんの爪つめを紅べにの糠ぬか袋ぶくろから小出こだしに出だして、薬罐やかんの中なかで煮にてるんだ。そいつも、ただ煮にてるんならまだしもだが、薬罐やかんの上うえへ面つらを被かぶせて、立たちのぼ昇のぼる湯気ゆげを、血相けつそう変かえて嗅かいでるじやねえか。あれがおめえ、

いい心こころもち持もて見ていられるか、いられねえか、まず考かんえてくんねえ」

「そいつを嗅かいで、どうしようツてんだ」

「奴やつにいわせると、あのたまらなく臭くせえ匂におが本ほん当とうの女おんなの匂におだといふんだ。嘘うそだと思おもつたら、論ろんより証しょうこ拠こ、春はる重しげの家うちへ行いつて見みねえ。戸とを締しめ切きつて、今いまが嬉うれしがりの真まツ最さい中ちゆうだぜ」

が、八五郎ろうは首くびを振ふつた。

「そいつアいけねえ。おれア師匠ししょうの使つかいで、おせんのとこまで行いかにやならねえんだ」

隈取りくまどでもしたように眼めの皮かわをたるませた春重はるしげの、上気じょうきした頬ほほのあたりに、蠅はえが一匹びきぽつんととまって、初秋しよしゅうの陽ひが、路地ろじの瓦かわらから、くすぐつたい顔かおをのぞかせていた。

「おつといけねえ。春重はるしげがやつてくるぜ」

煙草屋たばこやの角かどに立つたまま、爪つめを煮にる噂うわさをしていた松五郎まつごろうは、あわてて八五郎ろうに目めくばせをすると、暖簾のれんのかげに身みを引ひいた。

「隠かくれるこたあなからう」

「そうでねえ。おいらは今逃いまにげて来きたばかりだからの。見付みつかつちアことだ」

「そんなら、そつちへ引ひつ込こんでるがいい。もののついでに、お

れがひとつ、鎌かまをかけてやるから。――」

かえる

蛙かえるのように、眼玉めだまばかりきよろつかせて暖簾のれんのかげから顔かおをだ

した松五郎まつごろうは、それでもまだ怯おびえていた。

だいじようぶ

「大丈夫かの」

「叱しツ。そこへ来きたぜ」

であいがしら

出合頭であいがしらのつもりかなんぞの、至極しごく気軽きがな調子ちようしで、八五郎ろろうは

はるしげ

春重はるしげの前まえへ立ちたふさがった。

しげ

「重さん、大層たいそう早えの」

びくつとしたように、春重はるしげが爪先つまさきで立たち止どまった。

「八つあんか」

「八つあんじゃないやねえぜ、一ぺえやったようない顔かお色いろをして、

どこへ行きなさる」

「柳湯やなぎゆへの」

「朝湯あさゆたアしやれてるの」

「しやれてる訳わけじゃねえが、寝ねずに仕事しごとをしてたんで、湯ゆへでも這入はいらねえことにや、はつきりしねえからよ」

「ふん、夜よなべたア恐れ入おそった。そんなに稼かせいじや、銭ぜにがたまつて仕方しかたがあるめえ」

「だからよ。だから垢あかと一緒にしよに、柳湯やなぎゆへ捨すてに行くところだ」

「ほう、済すまねえが、そんな無駄むだな銭ぜにがあるんなら、ちとこつちへ廻まわして貰もらいてえの。おれだの松五郎まつろうなんざ、貧乏神びんぼうがみに見込みこまれたせい、いつもぴいぴい風車かざぐるまだ。そこへ行いくとおめえな

んぎ、おせんの爪つめを糠ぬか袋ぶくろへ入れて。……」

「なんだって八つあん、おめえ夢ゆめを見てるんじやねえか。爪つめだの糠ぬか袋ぶくろだの、とそんなことア、おれにやアてんで通つうじねえよ」  
 「えええ隠かくしちやアいけねえ。何なにから何なにまで、おれア根ねこそぎ知しつてるぜ」

「知しつてるツて。——」

「知らねえでどうするもんか。重しげさん、おめえの夜よあかしの仕事しごとは、銭ぜにのたまる稼かせぎじやなくツて、色気いろけのたまる楽たのしみじやねえか」

「そ、そんなことが。……」

「嘘うそだといいなさるのかい。」

証しょうこ拠こはちゃんと上あがつてゐるんだぜ。

おせんの爪つめを煮にる匂におは、さぞ香かうばしくツて、いいだろうの」

「そいつを、おめえは誰だれから聞ききなすつた」

「誰だれから聞きかねえでも、おいらの眼めは見透みとおしだて。——人間にんげんは、

四百四病びよううつわの器けだというが、重しげさん、おめえの病やまいは、別べつあつらえか

も知しれねえの」

春重はるしげは、きよろりとあたりを見廻みまわしてから、一段声だんこゑを落おとした。

「ちよいと家うちへ寄よらねえか。おもしろい物ものを見みせるぜ」

「折角せつかくだが、寄よつてゐる暇ひまがねえやつさ。これから大急おおいそぎぎで、

おせんの見世みせまで行いかぎアならねえんだ」

「おせんの見世みせへ行いくツて、何なんの用ようだよ」

「何なんの用ようだか知しらねえが、春信はるのぶ師匠ししょうが、急きゆうに用ようありとのこ

とでの」

八五郎は、春信から預つた結文を、ちよいと懐中から  
 覗かせた。

紅べに

一

ゆく末は誰が肌触れん紅の花

ばせを

「おツとツと、そう一人で急いじゃいけねえ。まず御手洗で手を

きよ  
浄めての。肝腎かんじんのお稲荷いなりさんへ参詣さんけいしねえことにや、罰ばちが当あた

つて眼めがつぶれやしよう」

「いかさまこれは早はやまった。こかア笠森様かさもりさまの境内けいだいだつたツけ  
の」

「冗じようだん談だんじゃごわせん。そいつを忘わすれちや、申もうしわけ訳わけがありま

すめえ。——それぞれ、何なんでまた、洗あらった手てを拭ふきなさらねえ。

おせんは逃にげやしねえから、落着おちついたり、落着おちついたり」

「御隠居ごいんきよ、そうひやかしちやいけやせん。堪かんにん忍かんにん堪かんにん忍かんにん」

「はッはッはッ、徳とくさん。お前まえの足あしッ、まるツきり、地じべたを踏ふ

んじアイねえの」

こおろぎの音ねも細ほそ々と明あけ暮くれて、風かぜに乱みだれる芒すすき叢むらに、

三つ四つ五つ、子雀こすずめの飛び交かうさまも、いとど憐あわれの秋あきながら、  
 ここ谷中やなかの草道くさみちばかりは、枯野かれのも落葉おちばも影かげさえなく、四季しきを分わか  
 たず咲さき競そうた、芙蓉ふようの花はなが清すがすが々しうしくも色いろを染そめて、西にしの空そらに  
 澄すみ渡わたつた富岳ふがくの雪ゆきに映はえていた。

名なにし負おう花はなの笠かさ森感応寺もりかんのうじ。渋茶しぶちやの味あじはどうであらうと、

おせんが愛想あいそうの鑿えくを拝おがんで、桜貝さくらがいをちりばめたやうな白しろう

魚おの手てから、お茶ちや一服ぱくを差し出だされれば、ぞつと色氣いろけが身みにし

みて、帰かえりの茶代ちやだいは倍ばいにならうという。女おんなならではの夜よのあけぬ、

その大江戸おおえどの隅すみ々ずみまで、子供こどもが唄うたう毬唄まりうたといえ、近頃ちかごろ

「おせんの茶屋ちやや」にきまつていた。

夜よるが白しら々と明あけそめて、上野うえのの森もりの恋こいの鴉からすが、まだ漸ようやく夢ゆめか

ら覚めたか覚めない時分、早くも感応寺中門前町は、参詣  
 の名に隠れての、恋知り男の雪駄の音で賑わいそめるが、十一軒  
 の水茶屋の、いずれの見世に休むにしても、当の金的はかぎ屋  
 のおせんただ一人。ゆうべ吉原で振り抜かれた捨鉢なのが、  
 帰りの駄賃に、朱羅宇の煙管を背筋に忍ばせて、可愛いおせんに  
 やろうなんぞと、飛んだ親切なお笑い草も、数ある客の中にも  
 珍しくなかった。

「はいお早う」

「ああ喉がかわいた」

赤い鳥居の手前にある。伊豆石の御手洗で洗った手を、拭くの  
 を忘れた橘屋の若旦那徳太郎が、お稲荷様への参詣

は二の次ぎに、連れの隠居の台詞通り、土へつかない足を浮かせて、飛び込んで来たおせんの見世先。どかりと腰をおろした縁台に、小腰をかがめて近寄ったのは、肝腎のおせんではなくて、雇女のおきぬだった。

「いらつしやいまし。お早くからようこそ御参詣で。――」

「茶をひとつもらいましょう」

「はい、唯今」

三四人の先客への遠慮からであろう。おきぬが茶を汲みに行つてしまうと、徳太郎はじくりと固唾を呑んで声をひそめた。

「おかしいの。居りやせんぜ」

「そんなこたアごわすまい。看板かんばんのねえ見世みせはあるまいからの」  
 「だが御隠居ごいんきよ。おせんは影かげもかたちも見えやせんよ」  
 「あわてずに待まつたり。じきに奥おくから出でて来きようツて寸法すんぽうだろ  
 う」

「朝飯あさめしとお踏ふみなすつたか」

「そうだ。それともお前まえさんのくるのを知しつて、念入ねんいりの化粧けしょう  
 ツてところか」

「嬉うれしがらせは殺せつ生しょうでげす。——おつと姐ねえさん。おせんちや  
 んはどうしやした」

「唯ただいま今いまちよいとお詣まいりに。——」

「どこへの」

「お稲荷様いなりさまでござんすよ」

「うむ、違ちがいがない。ここアお稲荷様いなりさまの境内けいだいだっけの」

徳太郎とくたろうは漸ようやく安心あんしんしたように、ふふふと軽かるく内所ないしょで笑わらつた。

## 二

橘屋たちばなやの若旦那わかだんな徳太郎とくたろうが、おせんおせんの茶屋ちややで安心あんしんの胸むねを

撫なでおろしていた時分じぶん、当とうのおせんは、神田白壁町かんだしろかべちようの鈴木すずきは

春信るのぶの住居すまいへと、ひたすら駕籠かごを急いそがせた。

「相棒あいぼう」

「おお」

「威勢いせいよくやんねえ」

「合が点てんだ」

「そんじよそこらの、だいどううす大道白のを乗せてるんじやねえや。江戸一  
番ばんのおせんちゃんを乗せてるんだからの」

「そうとも」

「こうなると、ぜにかね銭金きやくのお客じやアねえ。こちとらの見得みえになる  
んだ」

「その通とおりだ」

「おれア、一度ど、半蔵はんぞう松葉まつばの粧よそおいという花魁おいらんを、こうめりよう小梅せんせいの寮しょう  
まで乗のせたことがあつたつけが、いりやまがた入山形いりやまがたに一つ星ぼしの、ぜんせい全盛ぜんせいの

太夫たゆうを乗のせた時ときだつて、こんないい氣持きもはしなかつたぜ」

「もつともだ」

「垂たれを揚あげて、世間せけんの仲間なかまに見みせてやりてえくれえのものだの」

「おめえばかりじゃねえ。そいつアおいらもおんなじこツた」

「もし姐ねえさん」と、後うしろの方ほうから声こえがかかった。

「あい」

「どうでげす。駕籠かごの垂たれを揚あげさしちアおくんなさるめえか」

「堪かん忍にんしておくんなさい。あたしや内所ないしょの用事ようじでござんすか

ら。……」

「折角せつかくお前まえさんを乗のせながら、垂たれをおろして担かついでたんじや、もつたい勿体もったいなくつて仕方しかたがねえ。憚はばかながら駕籠定かごさだの竹たけと仙蔵せんぞうは、

江戸一番のおせんちゃんを乗せてるんだと、みんなに見せてやりてえんで。……」

「どうかそんなことは、もういわないでोकくなさい」  
ひょうばんむすめ

「評判娘のおせんちゃんだ。両方揚げて悪かったら、片ッ方だけでもようがしよう」

「そうだ、姐さん。こいつア何も、あつしらばかりの見得じやア  
ごあんせんぜ。春信さんの絵で売り込むのも、駕籠から窺いて  
見せてやるのも、いずれは世間へのおんなじ功德でげさアね。ひ  
とつ思い切つて、ようがしよう」

「どうか堪忍。……」

「欲のねえお人だなア。垂を揚げてごらんなせえ。あれ見や、あ

れが水茶屋のおせんだ。みづちやや笠森のおせんだと、誰だれいうとなく口くちから耳みみへ伝わつたて白壁町しろかべちようまで往くうちにやア、この駕籠かごの棟むねッ鼻ばなにや、人垣ひとがきが出来できやすぜ。のう竹たけ」

「そりやアもう仙蔵せんぞうのいう通り真正間違えなしの、生いきたおせんちゃんを江戸えどの町中まちなかで見たとなりやア、また評判ひようばんは格別かくべつだ。——片ツ方かたほうでもいけなけりや、せめて半分はんぶんだけでも揚あげてやったら、通とおりがかりの人達ひとたちが、どんなに喜よろこぶか知しれたもんじやねえんで。……」

「駕籠屋さんかごや」

「ほい」

「あたしやもう降おりますよ」

「何<sup>な</sup>んでげすツて」

「無理難題<sup>むりなんだい</sup>をいうんなら、ここで降<sup>お</sup>ろしておくんなさいよ」

「と、とんでもねえ。お前<sup>まえ</sup>さんを、こんなところでおろした日<sup>ひ</sup>にや、それこそちとらア、二度<sup>ど</sup>と再<sup>また</sup>び、江戸<sup>えど</sup>じや家業<sup>かぎよう</sup>が出来<sup>でき</sup>やせんや。——そんなにいやなら、垂<sup>たれ</sup>を揚<sup>あ</sup>げるたいわねえから、そうじたばたと動<sup>うご</sup>かねえで、おとなしく乗<sup>の</sup>つておくんなせえ。——だが、考<sup>かん</sup>げえりや考<sup>かん</sup>げえるほど、このまま担<sup>かつ</sup>いでるな、勿<sup>もつ</sup>体<sup>たい</sup>ねえなア」

駕籠<sup>かご</sup>はいま、秋元<sup>あきもと</sup>但馬守<sup>たじまのかみ</sup>の練堀<sup>ねりべい</sup>に沿<sup>そ</sup>つて、蓮<sup>はす</sup>の花<sup>はな</sup>が妍<sup>けん</sup>を競<sup>きそ</sup>つた不忍池<sup>しのばず池</sup>畔<sup>はん</sup>へと差掛<sup>さしかか</sup>つていた。

## 三

とうえいざん かんえいじ  
 東叡山 寛永寺の山裾に、  
 周圀一里の池を見ることは、  
 かいふいらいえど  
 開府以来江戸つ子がもつ誇りの一つであつたが、わけても雁の訪  
 れを待つまでの、蓮の花が池面に浮き出た初秋の風情は、  
 えどかぶき あらごと とも  
 江戸歌舞伎の荒事と共に、八百八町の老若男女が、得意  
 ゆう とくい  
 中の得意とするところであつた。

ちかごろ  
 近頃はやり物のひとつになつた黄縞格子の薄物に、  
 もよう ひごろ おび し  
 模様のあつた緋呉羅の帯を締めて、首から胸へ、  
 くろ ひも  
 袋の紐をのぞかせたおせんは、洗髪に結いあげた島田髷も  
 すがすが  
 すがすがしく、正しく座つた膝の上に、両の手を置いたまま、  
 ただ すわ ひざ うえ りようて お  
 駕籠

の中なかから池いけのおもてに視線しせんを移うつした。

夜よが明あけて、まだ五ごつには間まがあるであらう。ひと抱かかえもある  
うと想おもわれる蓮はすの葉はに、置おかれた露つゆの玉たまは、いずれも朝風あさかぜに揺ゆ  
れて、その足あしもとに忍しのび寄よるさざ波なみを、ながし目めに見みながら咲さい  
た花はなの紅べにが招まねく尾花おぼなのそれとは変かわつた清きよい姿すがたを、水みづ鏡かがみに映うつす  
たわわの風情ふぜい。ゆうべの夢見ゆめみが忘わすれられぬであらう。葉隠はかくれにち  
よいと覗のぞいた青蛙あおがえるは、今いまにも落おちかかった三角頭かくとうに、陽射ひざ  
しを眩まばゆく避さけていた。

「駕籠屋かごやさん」

ふと、おせんが声こえをかけた。

「へえ」

「こつち側<sup>がわ</sup>だけ、垂<sup>たれ</sup>を揚<sup>あ</sup>げておくんなさいな」

「なんでげすツて」

「花<sup>はな</sup>が見<sup>み</sup>とうござんすのさ」

「合<sup>が</sup>点<sup>ってん</sup>でげす」

先<sup>さき</sup>棒<sup>ぼう</sup>と後<sup>うしろ</sup>との声<sup>こえ</sup>は、正<sup>ま</sup>に一<sup>し</sup>緒<sup>よ</sup>であつた。駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>が地<sup>ち</sup>上<sup>じょう</sup>におろ

されると同時<sup>どうじ</sup>に、池<sup>いけ</sup>に面<sup>めん</sup>した右<sup>みぎ</sup>手<sup>て</sup>の垂<sup>たれ</sup>は、颯<sup>さつ</sup>とばかりにはね揚<sup>あ</sup>げられた。

「まア綺麗<sup>きれい</sup>なこと」

「でげすからあつしらが、さつきツからいつてたじやござんせんか。こんないい景<sup>け</sup>色<sup>しき</sup>ア、毎<sup>まい</sup>朝<sup>あさ</sup>見<sup>み</sup>られる図<sup>ず</sup>じやアねえツて。——  
 ごらんさせえやし。お前<sup>まえ</sup>さんの姿<sup>すがた</sup>が見<sup>み</sup>えたら、つぼんでいた花<sup>はな</sup>が、

あの通<sup>とお</sup>り一遍<sup>ぺん</sup>に咲<sup>さ</sup>きやしたぜ」

「ちげえねえ。葉ッぱにとまつてた蛙<sup>かえる</sup>の野郎<sup>やろう</sup>までが、あんな大<sup>おお</sup>きな眼<sup>め</sup>を開<sup>あ</sup>きやアがつた」

「もういいから、やつておくんない」

「そんなら、ゆつくりめえりやしよう。——おせんちゃんが垂<sup>たれ</sup>を揚<sup>あ</sup>げておくんないや、どんなに肩身<sup>かたみ</sup>が広<sup>ひろ</sup>いか知<sup>し</sup>れやアしねえ。  
のう竹<sup>たけ</sup>」

「そうともそうとも。こうなつたら、急<sup>いそ</sup>いでくれろと頼<sup>たの</sup>まれても、  
足<sup>あし</sup>がいうことを聞<sup>き</sup>きませんや。あつしと仙蔵<sup>せんぞう</sup>との、役得<sup>やくとく</sup>でげ  
さアね」

「ほほほほ、そんならあたしや、垂<sup>たれ</sup>をおろしてもらいますよ」

「飛とんでもねえ。駕籠かごに乗のる人ひとかつぐ人ひと、行く先さきアお客きやくのままだが、かついでるうちア、こつちのままでげすぜ。——それ竹たけ、なるたけ往來おうらいの人達ひとたちに目立めだつように、腰こしをひねつて歩きあるねえ」

「おっと、御念ごねんには及およばねえ。お上かみが許ゆるしておくんなさりやア、棒ぼう鼻はなへ、笠かさ森もりおせん御用ごよう駕籠かごとでも、札ふだを建てて行きゆきてえくらいだ」

いうまでもなく、祝儀しゅうぎや酒手さかての多寡たかではなかつた。当時江とうじえど

戸女んなの人氣にんきを一人ひとりで背負せおつてゐるような、笠森かさもりおせんを乗のせた嬉うれしさは、駕籠屋仲間かごやなかまの誉ほまれでもあろう。竹たけも仙蔵せんぞうも、金きんの延の棒ぼうを乗のせたよりも腹はらは得意とくいで一ぱいになっていた。

「こみう見みや。あすこへ行いくなアおせんだぜ」

「おせんだ」

「そうよ。人違えのはずはねえ。罨が立派な証拠だて」

「おツと違えねえ。向うへ廻つて見ざアならねえ」

帳場へ急ぐ大工であろう。最初に見つけた誇りから、二人

が一緒に、駕籠の向うへかけ寄つた。

#### 四

「ふうりゆうえこよみどころすずきはるのぶ  
風流絵曆所鈴木春信」

水くきのあとも細々と、流したように書きつらねた木目の浮

いた看板に、片枝折の竹も朽ちた屋根から柴垣へかけて、

ぶどう 葡萄の蔓が伸び放題の姿を、三尺ばかりの流れに映した風雅な  
 ひと構え、お城の松も影を曳きそうな、日本橋から北へ僅に十  
 丁の江戸のまん中に、かくも鄙びた住居があるうかと、道往く人  
 のささやき交す白壁町。夏ならば、すいと飛びだす迷い螢を、  
 あれさ待ちなど、団扇で追い寄るしなやかな手も見られるであろ  
 うが、はや秋の声聞く垣根の外には、朝日を受けた小葡萄の房が、  
 漸く小豆大のかたちをつらねた影を、真下の流れに漂わせてい  
 るばかりであった。

池と名付ける程ではないが、一坪余りの自然の水溜りに、  
 十匹ばかりの緋鯉が数えられるその鯉の背を覆つて、なかば花の  
 散りかけた萩のうねりが、一叢ぐつと大手を広げた枝の先から、

今しもぼたりと落ちたひとしずく。波紋が次第に大きく伸びたさ  
 さやかな波の輪を、小枝の先でかき寄せながら、じつと水の面を  
 見詰めていたのは、四十五の年よりは十年も若く見える、五尺に  
 満たない小作りの春信であつた。

おおかた銜えた楊枝を棄てて、顔を洗つたばかりなのであろう。  
 まだ右手に提げた手拭は、重く濡れたままになっていた。

「藤吉」

春信は、鯉の背から眼を放すと、急に思ひだしたように、縁  
 先の万年青の葉を掃除している、少年の門弟藤吉を呼  
 んだ。

「へえ」

「八つあんは、まだ帰かえつて来こないようだの」

「へえ」

「おせんもまだ見みえないか」

「へえ」

「堺さかい屋やの太夫たゆうもか」

「へえ」

「おまえちよいと、枝折戸しおりどへ出でて見みて来きな」

「かしこまりました」

藤吉とうきちは、万おも年青との葉はから掃除そうじの筆ふでを放はなすと、そのまま萩はぎの裾すそ

を廻まわつて、小走こばしりにおもてへ出でて行いった。

「今時いまじぶん分、おせんがいないはずはないから、ひよつとすると八

五郎ごろうの奴やつ、途中とちゅうで誰だれかに遇あつて、道草みちくさを食くつてゐるのかも知しれぬの。堺屋さかいやでもどつちでも、早くはや来くればいいのに。――」

濡ぬれた手拭てぬぐいを、もう一度どていねい丁寧しほに絞はるつた春信はるのぶは、口くちのうちでこつぶやう呟つぶやきながら、おもむろに縁先えんさきの方ほうへ歩あゆみ寄よつた。すると、その額ひたいの汗あせを拭ふきながら駆け込かこんで来きたのは、摺師すりしの八五郎ごろうであつた。

「行いつてめえりやした」

「御苦勞ごくろう、御苦勞ごくろう。おせんはいたかの」

「へえ。居おりやした。でげすが師匠ししょう、世よの中なかにや馬鹿ばかな野郎やろうが多いおおのに驚おどろきやしたよ。あつしが向むこうへ着ついたのは、まだ六つをちつと回まわつたばかりでげすのに、もうお前まえさん、かぎ屋やの前まえにや、

ひと<sup>ひと</sup>た<sup>た</sup>ば  
 人が束ンなつてゐるじやござんせんか。それも、女一人いるんじや  
 ねえ。みんな、おいらこそ江戸一番の色男だと、いわぬばか  
 りの顔<sup>かお</sup>をして、反<sup>そ</sup>りツかえつてゐる野郎ぞつきでげさアね。——お  
 せんちゃんにや、千人の男が首ツたけンなつても、及ばぬ鯉<sup>こい</sup>の滝<sup>たき</sup>  
 のぼりだとは、知らねえんだから浅間<sup>あさま</sup>しいや」  
 「八つあん。おせんの返事<sup>へんじ</sup>はどうだつたんだ。直<sup>す</sup>ぐに來<sup>く</sup>るとか、  
 來<sup>こ</sup>ないとか」

「めえりやすとも。もうおツつけ、そこいらで声<sup>こえ</sup>が聞<sup>き</sup>えますぜ」  
 八五郎<sup>ろう</sup>は得意<sup>とくい</sup>そうに小首<sup>こくび</sup>をかしげて、枝折戸<sup>しおりど</sup>の方<sup>ほう</sup>を指<sup>ゆび</sup>さした。

枝折戸しおりどの外そとに、外道げどうの面つらのような顔かおをして、ずんぐり立たって待まつていた藤吉とうきちは、駕籠かごの中なかからこぼれ出でたおせんの裾すその乱みだれに、いま今しもきよろりと、団栗どんぐりまなこを見張みはつたところだった。

「やッ、おせんちゃん。師匠ししょうがさつきから、首くびを長くしてお待ま

ちかねだぜ」

朱しゆとお納戸なんどの、二ふたこくの鼻緒はなおの草履ぞうりを、後うしろの仙蔵せんぞうにそろえさ

せて、扇あふぎで朝日あさひを避けさけながら、静しずかに駕籠かごを立たち出でたおせんは、

どこぞ大店おおだなの一人娘ひとりむすめでもあるかのように、如何いかにも品ひんよく落お

着ちついていた。

「藤吉とうきちさん。ここであたしを、待まってでござんすかえ」

「そうともさ、肝腎かんじんの万年青おもとの掃除そうじを半端はんぱでやめて、半時はんときも前から、お前まえさんの来るくのを待つてたんだ。——だがおせんちゃん。お前は相変あいかわらず、師匠ししょうの絵えのように綺麗きれいだのう」

「おや、朝あさツからおなぶりかえ」

「なぶるどころか。おいらア惚ほれ惚ほれ見みとれてるんだ。顔かおといい、  
 姿すがたといい、お前まえほどの佳い女おんなは江戸中探えどじゅうさがしてもなかるうツて、  
 師匠ししょうはいつも口癖くちぐせのようにいつてなさるぜ。うちのお鍋なべも女おんな  
 なら、おせんちゃんも女おんなだが、おんなじ女おんなに生うまれながら、お鍋なべは  
 なんて不纏ぶきりようなんだろう。お鍋なべとはよく名なをつけたと、おいら  
 アつくづくあいつの、親父おやじの智恵ちえに感心かんしんしてるんだが、それと  
 違ちがつておせんさんは、弁天様べんてんさまも跣足はだしの女おんなツぷり。いやもう江戸えど

はおろか日本中、にほんじゆう 鉦と太鼓で探したって……」

「おいおい藤さんとうさん」

肩かたを掴つかんで、ぐいと引ひつ張ばった。その手てで、顔かおを逆さかさに撫なでた

八五郎ろうは、もう一度帯どおびを把とつて、藤吉とうきちを枝折戸しおりどの内うちへ引ひきずり

込こんだ。

「何なにをするんだ。八つあん」

「何なにもこうありやアしねえ。つべこべと、余計よけいなことをいつてね

えで、速はやくおせんちゃんを、奥おくへ案内あんないしてやらねえか。師匠ししょう

がもう、茶ちやを三杯ばいも換かえて待まちかねだぜ」

「おっと、しまった」

「おせんちゃん。少すこしも速はやく、急いそいだ、急いそいだ」

「ほほほほ。八つあんがまた、おどけた物のいいようは。……」  
 駕籠かごを帰かえしたおせんの姿すがたは、小溝こどぶへ架かけた土橋どばしを渡わたつて、逃のがれるように枝折戸しおりどの中なかへ消きえて行いつた。

「ふん、八五郎ろうの奴やつ、余計よけいな真似まねをしやアがる。おせんちゃんの家内役あんないやくは、いっさいがっさい、おいらときまつてるんだ。――

よし、あとで堺屋さかいやの太夫たゆうが来きたら、その時ときあいつに辱はじをかかせてやる」

手ての内うちの宝たからを奪うばわれでもしたように、藤吉とうきちは地駄じだン駄踏だふんで、あとから、土橋どばしをひと飛とびに飛とんで行いつた。

鉤かぎなりに曲まがつた縁えん先さきでは、師匠ししょうの春信はるのぶとおせんとが、既すでに挨拶あいさつを済すませて、池いけの鯉こいに眼めをやりながら、何事なにごとかを、声こえ

をひそめて話し合っていた。

「八つあん、ちよいと来てくんない」

「何んだ藤さん」

立つて来た八五郎を、睨めるようにして、藤吉は口を尖らせた。

「お前、あとから誰が来るか、知ってるかい」

「知らねえ」

「それ見な。知らねえで、よくそんなお接介が出来たもんだの」

「お接介たア何んのこった」

「おせんちゃんを、先に立って連れてくなんざ、お接介だよ」

「冗談じゃねえ。おせんちゃんは、師匠に頼まれて、おい

らが呼びに行つたんだぜ。——おめえはまだ、顔を洗わねえんだ

の」

顔はどうに洗つていたが、藤吉の眼頭には、目脂が小汚なくこすり付いていた。

## 六

赤とんぼが障子へくつきり影を映した画室は、金の砂子を散らしたように明るかつた。

広々と庭を取つてはあるが、僅かに三間を数えるばかりの、茶室がかった風流の住居は、ただ如何にも春信らしい好

みにまかせて、手いれが行き届いているというだけのこと、諸  
 大名の御用絵師などにくらべたら、まことに粗末なものであ  
 った。

その画室の中ほどに、煙草盆をはさんで、春信とおせんと  
 が対座していた。おせんの初な心は、春信の言葉にためらいを  
 見せているのであろう。うつ向いた眼許には、ほのかな紅を差し  
 て、鬢の毛が二筋三筋、夢見るように頬に乱れかかっていた。

「どうだの、これは別に、おいらが堺屋から頼まれた訳ではな  
 いが、何んといつても中村松江なら、当時押しも押されもし  
 ない、立派な太夫。その堺屋が秋の木挽町で、お前のことを  
 重助さんに書きおろさせて、舞台上上せようというのだから、

まず願<sup>ねが</sup>つてもないもつけの幸<sup>さいわ</sup>い。いやの応<sup>おう</sup>のいうことはなからうじやないか」

「はい、そりやアもう、あたしに取<sup>と</sup>つては勿<sup>もつ</sup>体<sup>たい</sup>ないくらいの御<sup>ご</sup>鼻<sup>ひいき</sup>眞<sup>ま</sup>、いや応<sup>おう</sup>いつたら、眼<sup>め</sup>がつぶれるかも知<sup>し</sup>れませぬが。……」

「それなら何<sup>な</sup>んでの」

「お師<sup>ししやう</sup>匠<sup>じやう</sup>さん、堪<sup>かん</sup>忍<sup>にん</sup>しておくんなさい。あたしや知<sup>し</sup>らない役<sup>や</sup>者<sup>しやしゆう</sup>衆<sup>しゆう</sup>と、差<sup>さ</sup>しで会<sup>あ</sup>うのはいやでござんす」

「はッはッは、何<sup>なに</sup>かと思<sup>おも</sup>つたら、いつもの馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>気<sup>け</sup>たはにかみからか。ここへ堺<sup>さかい</sup>屋<sup>や</sup>を招<sup>よ</sup>んだのは、何<sup>なに</sup>もお前<sup>まえ</sup>と差<sup>さ</sup>しで会<sup>あ</sup>わせようの、ふたりはなし二人で話をさせようのと、そんな訳<sup>わけ</sup>合<sup>あい</sup>じアありやしない。松<sup>しょう</sup>江<sup>こう</sup>は日頃<sup>ひごろ</sup>、おいらの絵<sup>え</sup>が大<sup>だい</sup>好<sup>す</sup>きとかで、板<sup>いた</sup>おろしをしたのはも

とより、版下までを集めてゐる程の好き者仲間、それがゆうべ、  
 芝居しばいの帰りかえにひよつこり寄つて、この次の狂言つぎ きやうげんには、是非と  
 も笠森かさもりおせんちゃんを、芝居しばいに仕組しくんで出だしたいとの、たつて  
 の望のぞみさ。どういう筋すじに仕組しくむのか、そいつは作者さくしやの重助じゆうすけ  
 さんに謀はかつてからの寸法すんぽうだから、まだはつきりとはいえないと  
 のことだった、松江しょうこうが写うつしたお前の姿まえすがたを、舞台ぶたいで見みられると  
 なりや、何なんといつても面白おもしろい話はなし。おいらは二つ返事へんじで、手てを  
 打うつてしまつたんだ。——そこで、善ぜんは急いそげのたとえをそのまま、  
 あしたの朝あさ、ここへおせんに来てきもらおうから、太夫たゆうももう一度ど、  
 ここまで出でて来きてもらいたいと、約束事やくそくごとが出来できたんだが、——  
 のうおせん。おいらの前まえじゃ、肌はだまで見みせて、絵えを写うつさせるお前まえ

じゃないか、相手あいてが誰だれであろうと、ここで一時いつとき、茶のみ話ばなしをするだけだ。心持こころもよく会あつてやるがいいわな」

「さア。――」

「今いまさらしあん更思案しあんもないであろう。こうしているうちにも、もうそこらへ、やつて来きたかも知しれまいて」

「まア、師匠ししょうさん」

「はッはッは。お前まえ、めつきり氣きが小ちいさくなつたの」

「そんな訳わけじゃござんせぬが、あたしや知しらない役者衆やくしやしゅうとは。

……」

「ほい、まだそんなことをいつてるのか。なまじ知しつてる顔かおよりも、はじめて会あつて見みる方ほうに、はずむ話はなしがあるものだ。――それ

にお前まえ、相手あいては当時とうじ上じよう上じよう吉きちの女形おやま、会あつてゐるだけでも、氣きが晴はれ晴ばれとするようだぜ」

ふと、とんぼの影かげが障子しょうじから離はなれた。と同時に藤吉とうきちの聲こえが、遠慮えんりよ勝ちに縁えん先さきから聞きこえた。

「師匠ししょう、太夫たゆうがおいでになりました」

「おおそうか。直すぐにこつちへお通とおししな」

じつと畳たたみの上うへを見詰みつめているおせんは、たじろぐように周しゆう圍ういを見廻みまわした。

「お師匠ししょうさん、後生ごしやうでござんす。あたしをこのまま、歸かえして

おくんなさいまし」

「なんだって」

春信は大きく眼を見ひらいた。

## 七

たとえば青苔の上に、二つ三つこぼれた水引草の花にも似て、畳の上に裾を乱して立ちかけたおせん、浮き彫のような爪先は、もはや固く畳を踏んではいなかった。

「ははは、おせん。みつともない、どうしたというんだ」

春信の、いささか当惑した視線は、そのまま障子の方へおせんを追って行ったが、やがて追い詰められたおせんの姿が、障子の際にうずくまるのを見ると、更に解せない思いが胸の底に

ひろ  
 拡がつてあわてて障子しょうじの外そとにいる藤吉とうきちに声こえをかけた。

「藤吉とうきち、堺屋さかいやの太夫たゆうに、もうちつとの間あいだ、待つておもらい申もうしてくれ」

「へえ」

おおかた、もはや縁先えんさき近くまで来ていたのであろう。藤吉とうきちが直すぐさま松江しょうこうに春信はるのぶの意いを伝つたえて、池いけの方ほうへ引ひき返かえしてゆく気配けはいが、障子しょうじに映うつつた二つの影かげにそれと知しれた。

「おせん」

「あい」

「お前まえ、何か訳なにわけがあつてだの」

「いいえ、何も訳なにわけはござんせぬ」

「隠<sup>かく</sup>すにや当<sup>あた</sup>らないから、有<sup>あり</sup>様<sup>よう</sup>にいつて見<sup>み</sup>な、事<sup>こと</sup>と次第<sup>しだい</sup>に因<sup>よ</sup>つたら、堺<sup>さかい</sup>屋<sup>や</sup>は、このままお前<sup>まえ</sup>には会<sup>あ</sup>わせず<sup>わ</sup>に、帰<sup>かえ</sup>つてもらうことにする」

「そんなら、あたしの願<sup>ねが</sup>いを聞<sup>き</sup>いておくんなさいますか」

「聞<sup>き</sup>きもする。かなえもする。だが、その訳<sup>わけ</sup>は聞<sup>き</sup>かしてもらうぜ」

「さアその訳<sup>わけ</sup>は。――」

「まだ隠<sup>かく</sup>しだてをするつもりか。あくまで聞<sup>き</sup>かせたくないというなら、聞<sup>き</sup>かずに済<sup>す</sup>ませもしようけれど、そのかわりおいらはもうこの先<sup>さき</sup>、金輪<sup>こんりんざい</sup>際<sup>さい</sup>、お前<sup>まえ</sup>の絵<sup>え</sup>は描<sup>か</sup>かないからそのつもりでいるが  
いい」

「まアお師匠<sup>ししやう</sup>さん」

「なアにいいやな。笠かさ森のおせんは、江戸一番の縹きりよう緻佳ししだ。おいらが拙ますい絵えなんぞに描かかないでも、客きやくは御府内ごふないの隅々すみずみから、蟻ありのように寄よつてくるわな。——いいたくなけりや、聞きかずにいようよ」

いたずらに、もてあそんでいた三味線みせんの、いとがぼつんと切れきたように、おせんは身内みうちに積つもる寂さびしさを覚おぼえて、思おもわず瞼まぶたが熱あつくなった。

「お師匠ししょうさん、堪かん忍にんしておくんなさい。あたしや、お母かあさんにもいうまいと、固かたく心こころにきめていたのでござんすが、もう何なに事とも申もうしましょう。どつと笑わらつておくんなさいまし」

「おお、ではやつぱり何なにかの訳わけがあつて。……」

「あい、あたしやあの、浜村屋の太夫さんが、死ぬほど好きなんでござんす」

「えッ。菊之丞きくのじょうに。――」

「あい。おはずかしゅうござんすが。……」

消えも入いりたいおせんの風情ふぜいは、庭にわに咲さく秋海棠しゅうかいどうが、なまめき落おちる姿すがたをそのまま悩なやましさに、面おもてを袂たもとにおおい隠かくした。

じつと、釘くぎづけにされたように、春信はるのぶの眼めは、おせんの襟えりあ脚しから動うごかなかった。が、やがて静しずかにうなずいたその顔かおには、晴はれやかな色いろが漂ただよっていた。

「おせん」

「あい」

「よくほれた」

「えッ」

「当代とうだい一の若女形わかおやま、瀬川菊之丞せがわきくのじょうなら、江戸えど一番ばんのお前まえの相あ手にや、少しすこの不足ふそくもあるまいからの。——判わかった。相手あいてがやつぱり役者やくしゃとあれば、堺屋さかいやに会うのは氣きが差さそう。こりやア何なんどでもいつて断ことわるから、安心あんしんするがいい」

八

勢きおい込こんで駕籠かごで乗のり着つけた中村松江なかむらしやうこうは、きのうと同じおなように、藤吉とうきちに案内あんないされたが、直ぐ様通すさまおしてもらえるはずの画が

室へは、何やら訳があつて入ることが出来ぬところから、ぽつねんと、池の近くにたたずんだまま、人影に寄つて来る鯉の動きをじつと見詰めていた。

師の歌右衛門を慕つて江戸へ下つてから、まだ足かけ三年を経たばかりの松江が、鼯鼠筋といつても、江戸役者ほどの数がある訳もなく、まして当地には、当代随一の若女形といわれる、二代目瀬川菊之丞が全盛を極めていることとて、その影は決して濃いものではなかった。が、年は若いし、芸は達者であるところから、作者の中村重助が頻りに肩を入れて、何か目先の變つた狂言を、出させてやりたいとの心であろう。近頃春信の画で一層の評判を取った笠森おせんを仕組

んで、一番<sup>ばんあ</sup>当てさせようと、松<sup>しょうこう</sup>江<sup>はるのぶ</sup>が春<sup>こん</sup>信<sup>い</sup>と懇<sup>きん</sup>意<sup>い</sup>なのを幸<sup>さいわ</sup>い、  
 善<sup>ぜん</sup>は急<sup>いそ</sup>げと、早<sup>さつ</sup>速<sup>そく</sup>きのうここへ訪<sup>たず</sup>ねさせての、きようであつた。  
 「太夫<sup>たゆう</sup>、お待<sup>まち</sup>遠<sup>ど</sup>さまでござんしようが、どうかこちらへおいで  
 なすつて、お茶<sup>ちや</sup>でも召<sup>めし</sup>上<sup>あが</sup>つて、お待<sup>まち</sup>ちなすつておくんなまし」  
 藤<sup>とう</sup>吉<sup>きち</sup>にも、何<sup>な</sup>んで師<sup>し</sup>匠<sup>しょう</sup>が堺<sup>さかい</sup>屋<sup>や</sup>を待<sup>まち</sup>たせるのか、一向<sup>こゝがつて</sup>合<sup>あ</sup>  
 点<sup>てん</sup>がいかなかったが、張<sup>は</sup>り詰<sup>つ</sup>めていた氣<sup>き</sup>持<sup>もち</sup>が急<sup>きゆう</sup>に緩<sup>ゆる</sup>んだように、  
 しよんぼりと池<sup>いけ</sup>を見<sup>み</sup>詰<sup>つ</sup>めて立<sup>た</sup>つている後<sup>うしろ</sup>姿<sup>すがた</sup>を見ると、こうい  
 つて声<sup>こゑ</sup>をかけずにはいられなかった。

「へえ、おおきに。——」

「太夫<sup>たゆう</sup>は、おせんちゃんには、まだお会<sup>あ</sup>いなすつたことがないん  
 でござんすか」

「へえ、笠森様のお見世では、お茶を戴いたことがおますが、先様は、何を知つてではござりますまい。——したが若衆さん。おせんさんは、もはやお見えではおますまいかな」

「つい今し方。——」

「では何か、絵でも習うていやはるのでは。——」

「さア、大方そんなことでげしようが、どっちにしても長いことじやござんすまい。そこは日が当りやす。こっちへおいでなすツて。……」

ふと踵を返して、二足三足、歩きかかった時だった。隅の障子を静かに開けて、庭に降り立った春信は、蒼白の顔を、振り袖姿の松江の方へ向けた。

「太夫<sup>たゆう</sup>」

「おお、これはお師匠<sup>ししょう</sup>さんは。早<sup>はよう</sup>からお邪間<sup>じやま</sup>して、えろ済<sup>す</sup>みません」

「済<sup>す</sup>まないのは、お前<sup>まえ</sup>さんよりこつちのこと、折角<sup>せつかく</sup>眠<sup>ねむ</sup>いところを、早起<sup>はやお</sup>きをさせて、わざわざ来<sup>き</sup>てもらいながら、肝腎<sup>かんじん</sup>のおせんが。――」

「おせんさんが、なんぞしやりましたか」  
「急病<sup>きゅうびよう</sup>での」

「えッ」

「血<sup>ち</sup>の道<sup>みち</sup>でもあろうが、ここへ来<sup>く</sup>るなり頭痛<sup>ずつう</sup>がするといつて、ふさぎ込<sup>こ</sup>んでしまったまま、いまだに顔<sup>かお</sup>も挙<sup>あ</sup>げない始末<sup>しまつ</sup>、この分<sup>ぶん</sup>じ

や、半時<sup>はんとき</sup>待<sup>まち</sup>つてもらつても、今朝<sup>けさ</sup>は、話<sup>はなし</sup>は出来<sup>でき</sup>まいと思<sup>おも</sup>つての、お氣<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>だが、またあらためて、会<sup>あ</sup>つてやつておもらい申<sup>もう</sup>すより、仕方<sup>しかた</sup>がないじやなかうかと、実<sup>じつ</sup>は心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>している訳<sup>わけ</sup>だが。……」

「それはまア」

「のう太夫<sup>たゆう</sup>。お前<sup>まえ</sup>さん、詫<sup>わび</sup>はあたしから幾重<sup>いくえ</sup>にもしようから、きようはこのまま、帰<sup>かえ</sup>つておくんなさるまいか」

「それアもう、帰<sup>かえ</sup>ることは、いつでも帰<sup>かえ</sup>りますけれど、おせんさんが急<sup>きゆう</sup>病<sup>びよう</sup>とは、氣<sup>き</sup>がかりでおますさかい。……」

「いや、氣<sup>き</sup>に病<sup>や</sup>むほどのことでもなかうが、何<sup>なん</sup>せ若い女<sup>わかおんな</sup>の急<sup>きゆう</sup>病<sup>びよう</sup>での。ちつとばかり、朝<sup>あさ</sup>から世間<sup>せけん</sup>が暗<sup>くら</sup>くなつたような氣<sup>き</sup>がするのさ」

「へえ」

春<sup>はる</sup>信<sup>のぶ</sup>の眼<sup>め</sup>は、松<sup>しょう</sup>江<sup>こう</sup>を<sup>そ</sup>反<sup>そ</sup>れて、地<sup>ち</sup>に曳<sup>ひ</sup>く萩<sup>はぎ</sup>の葉<sup>は</sup>に移<sup>うつ</sup>つてい  
た。

雨<sup>あめ</sup>

一

「おい坊<sup>ぼう</sup>主<sup>ず</sup>、火鉢<sup>ひばち</sup>の火<sup>ひ</sup>が消<sup>き</sup>えちやつてるぜ。ぼんやりしてえちや  
困<sup>こま</sup>るじゃねえか」

はまちよう  
浜町の細川邸の裏門前を、右へ折れて一町あまり、角  
に紺屋の干し場を見て、伊勢喜と書いた質屋の横について曲がつ  
た三軒目、おもてに一本柳が長い枝を垂れたのが目印の、  
人形師亀岡由斎のささやかな住居。

まだ四十を越していくつにもならないというのが、一見五十四  
五に見える。鬚も白髪もおかまいなし、床屋の鴨居は、もう二月  
も潜ったことがない程の、垢にまみれたうす汚なさ。名人とか  
上手とか評判されているだけに、坊主と呼ぶ十七八の弟子  
の外は、猫の子一匹もない、たった二人の暮しであつた。

「おめえ、いつてえ弟子に来てから、何年経つと思つてい  
るんだ」

「へえ」

「へえじやねえぜ。人形師にんぎょうしに取とつて、胡粉ごふんの仕し事ごとがどんなもん  
だぐれえ、もうてえげえ判わかつても、罰ばちは当あたるめえ。この雨あめだ。愚ぐ  
図ず々ずしてえりや、湿気しつけを呼よんで、みんなねこんなつちまうじや  
ねえか。速はやくおこしねえ」

「へえ」

「それから何なんだぜ。火がおこつたら、直すぐに行あんどん燈を掃除そうじしと  
きねえよ。こんな日ひア、いつもより日ひの暮くれるのが、ぐつと早はえ  
からの」

「へえ」

「ふん。何なにをいっても、張合はりあいのねえ野郎やろうだ。飯めしは腹はら一杯ぱい食くわせ

であるはずだに。もつとしつかり返事をしねえ」

「かしこまりました」

「糠に釘ツてな、おめえのこつた。——火のおこるまで一服やるから、その煙草入を、こつちへよこしねえ」

「へえ」

「なぜ煙管を取らねえんだ」

「へえ」

「それ、螢火ほどの火もねえじゃねえか。何んで煙草をつけるんだ」

相手は黙々とした少年だが、由齋は、たとえにある箸の揚げおろしに、何か小言をいわないではいられない性分な

のであろう。殆んど立続けに口小言をいいながら、胡坐の上  
 にかけた古い浅黄のきれをはずすと、火口箱を引き寄せて、鉄  
 の長煙管をぐつと銜えた。

勝手元では、頻りにばたばたと七輪の下を煽ぐ、団扇の音が  
 聞えていた。

その団扇の音を、じりじりと妙にいら立つ耳で聞きながら、由  
 斎は前に立てかけている、等身大に近い女の人形を、睨  
 めるように眺めていたが、ふと何か思い出したのであろう。あた  
 り憚らぬ声で勝手元へ向つて叫んだ。

「坊主。坊主」

「へえ」

「おめえ、今朝面を洗ったか」

「へえ」

「嘘をつけ。面を洗った奴が、そんな粗相をするはずアなからう。ここへ来て、よく人形の足を見ねえ。甲に、こんなに蟬が垂れているじゃねえか」

恐る恐る仕事場へ戻った。坊主の足はふるえていた。

「こいつアおめえの仕事だな」

「知りません」

「知らねえことがあるもんか。ゆうべ遅く仕事場へ蠟燭を持って這入って来たなア、おめえより外にねえ筈だぜ。こいつアただの人形じゃねえ。菊之丞さんの魂までも彫り込もうという

人形にんぎようだ。

粗相そそうがあつちやアならねえと、

あれ程ほどいっておいた

じゃねえか」

二

廂ひさしふかの深さがおいかぶさつて、

雨あめに煙けむった家いえの中なかは、

蔵くらのように

手許てもとくが暗く、

まだ漸ようやく石町こくちようの

八つの鐘かねを聞きいたばかりだとい

うのに、あたりは行燈あんどんがほしいくらい、

鼠ねずみいろ色

にぼけていた。

軒のきの樋といはこ十年ねんの間あいだ、

一度ども

換かえたことがない

のであろう。

竹たけの節ふし々に

青苔あおこけが盛もり上あがつて、

その破われ目めから落おちる

雨あま水みず

が砂すな時計どけいの砂すなが

目めもりを落おちるの

と同じに、

絶たえ間まなく耳みみを奪うば

った。

への字に結んだ口に、煙管を銜えたまま、魅せられたように人  
 形を凝視し続けている由齋は、何か大きく頷くと、今し  
 がぼうず  
 方坊主がおこして来た炭火を、十能から火鉢にかけて、独りひそ  
 かに眉を寄せた。

「坊主。おめえ、表の声が聞えねえのか」

「誰か来ておりますか」

「来てる。戸を開けて見ねえ」

「へえ」

「だが、こつちへ通しちやならねえぜ」  
 はんしんはんぎ  
 半信半疑で立って行つた坊主は、背をまるくして、  
 あまど  
 雨戸の隙

間きまから覗のぞいた。

「おや、あたしでござんすよ」

「おお、おせんさん」

坊主ぼうずは、たてつけの悪い雨戸あまどを開けて、ぺこりと一つ頭あたまをさげた。そこには頭巾ずきんで顔かおを包つつんだおせんが、傘かさを肩かたにして立たつていた。

「親方おやかたは」

「仕事しごとなんです。――」

「御免ごめんなさいよ」

「あッ いけません。お前まえさんをお上あげ申もうしちや、叱しかられる」

「ほほほほ、そんな心配しんぱいは止やめにしてさ」

「でもあたしが親方おやかたに。――」

「坊主ぼうず」と、鋭い声すどこえが奥おくから聞えたきこ。

「へえ」

「いまもいった通りだとお。たとえどなたでも、仕事場しごとばへは通しちや

ならねえ」

「親方おやかた」と、おせんは訴えるうったように声こえをかけた。

「どうかきようだけ、堪忍かんにんしておくんないよ」

「いけねえ」

「あたしやお前まえさんに、断ことわられるのを知りながら、もう辛抱しんぼうが

出来できなくなつて、この雨あめの中なかを来たきたんじやござんせんか。――後ご

生しょうでござんす。ちよいとの間あいだだけでも。……」

「折角せつかくだが、お断りことわしやすよ。あつしやアお前まえさんから、この人形にんぎようを請合うけあう時とき、どんな約束やくそくをしたかはつきり覚えていなさろう。——のうおせんちゃん。あの時ときお前まえは何なんといいなすつた。あたしや死しんでる人形にんぎようは欲ほしくない。生いきた、魂たましいのこもつた人形にんぎようをこさえておくんなさるなら、どんな辛抱しんぼうでもすると、あれ程ほど堅かたく約束やくそくをしたじやアねえか。——江戸えど一番ばんの女お形やま、瀬川菊之丞せがわきくのじようの生人形いきにんぎようを、舞台ぶたいのままに彫ほろうツてんだ。なまやさしい業わざじやアねえなア知しれている。あつしもきようまで、これぞと思おもつた人形にんぎようを、七つや十はこさえて来きたが、これさえ仕上しあげりや、死しんでもいいと思おもつた程ほど、精魂せいこんを打込うちこんだ作さくはしたこたアなかつた。だが、今度こんどの仕事しごとばかりアそうじやアねえ。

この生人形いきにんぎようさえ仕上げたら、たとえあすが日、血へどを吐いはてたおれても、決して未練みれんはねえと、覚悟かくごをきめての真剣勝しんけんしょう負だ。——お前まえさんが、どこまで出来たか見みたいという。その心持こころもちア、腹はらの底そこから察さつしてるが、ならねえ、あつしやア、いま、人形にんぎようを塗ぬってるんじやアねえ。おのが魂たましいを血みどろにして、死ぬしか生きるかの、仕事しごとをしてるんだからの」

由齋ゆうさいの声こえを聞きながら、ひと足あしずつ後あとずさりしていたおせんは、いつか礫はりつけにされたように、雨戸あまどの際きわへ立ちすくんでいた。

ひと目<sup>め</sup>でいい、ひと目<sup>め</sup>でいいから会<sup>あ</sup>いたいの、切<sup>せつ</sup>なる思<sup>おも</sup>いの耐<sup>た</sup>え難<sup>がた</sup>く、わざと両<sup>りよう</sup>国<sup>こく</sup>橋<sup>ばし</sup>の近<sup>ちか</sup>くで駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>を捨<sup>す</sup>てて、頭<sup>ずきん</sup>巾<sup>ひとめ</sup>に人<sup>ひと</sup>目を避<sup>さ</sup>けながら、この質<sup>しちや</sup>屋<sup>うら</sup>の裏<sup>うら</sup>の、由<sup>ゆう</sup>齋<sup>さい</sup>の仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>場<sup>ば</sup>を訪<sup>おも</sup>れたおせん

の胸<sup>むね</sup>には、しとど降<sup>ふ</sup>る雨<sup>あめ</sup>よりしげき思<sup>おも</sup>いがあつた。

とし

年<sup>とし</sup>からいえば五<sup>ご</sup>つ<sup>ちが</sup>の違<sup>ちが</sup>いはあつたものの、おなじ王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>で生<sup>う</sup>れた

幼<sup>おさな</sup>なじみの菊<sup>きく</sup>之<sup>の</sup>丞<sup>じよう</sup>とは、けし奴<sup>やつこ</sup>の時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>から、人<sup>ひと</sup>もうらやむ仲<sup>なか</sup>好<sup>よ</sup>

しにて、ままごと遊<sup>あそ</sup>びの夫<sup>め</sup>婦<sup>おと</sup>にも、吉<sup>きち</sup>ちゃん<sup>きち</sup>はあたいの旦<sup>だんな</sup>那<sup>な</sup>、お

せんちゃんはおいらのお上<sup>かみ</sup>さんだよと、度<sup>たび</sup>重<sup>かさ</sup>なる文<sup>もん</sup>句<sup>く</sup>はいつか

遊<sup>あそ</sup>び仲<sup>なか</sup>間<sup>ま</sup>に知<sup>し</sup>れ渡<sup>わた</sup>つて、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の口<sup>くち</sup>からいわずとも、二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>は真<sup>ま</sup>ぐさ

ま夫<sup>ふう</sup>婦<sup>ふ</sup>にならべられるのが却<sup>かえ</sup>てきまり悪<sup>わる</sup>く、時<sup>とき</sup>にはわざと背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>

合<sup>あ</sup>せにすわる場<sup>ば</sup>合<sup>あい</sup>もままあつたが、さて、吉<sup>きち</sup>次<sup>じ</sup>はやがて舞<sup>ぶ</sup>台<sup>たい</sup>に

で、子役としての評判が次第に高くなつた時分から、王子  
 を去つた互の親が、芳町と蔵前に別れ別れに住むようにな  
 ったばかりに、いつか会つて語る日もなく二年は三年三年は五年  
 と、速くも月日は流れ流れて、辻番付の組合せに、振袖  
 姿の生々しさは見るにしても、吉ちゃんおせんちゃんと、呼  
 び交わす機はまったくないままに、過ぎてしまつたのであつた。  
 女形といえ、中村富十郎をはじめ、芳沢あやめにしろ、  
 中村喜代三郎にしろ、または中村桑太郎にしろ、中村松  
 江にしろ、十人いれば十人がいづれもそろつて上方下りの人  
 達である中に、たった一人、江戸で生れて江戸で育つた吉次が、  
 他の女形を尻目にかけて、めきめきと売出した調子もよく、や

がて二代目菊之丞を継いでからは上上吉の評判記は、  
 弥が上にも人気を煽つたのであらう。「王子路考」の名は、押し  
 も押されもしない、当代随一の若女形と極まつて、出し物は  
 何んであらうと菊之丞の芝居とさえいえば、見ざれば恥の如き  
 有様となつてしまつた。

したがつて、人気役者に付きまとう様々な噂は、それから  
 それえと、日毎におせんひごとの耳へ伝えられた。——どこそこのお大  
 名のお妾が、小袖を贈つたとか。何々屋の後家さんが、帯を  
 縫つてやつたとか。酒問屋の娘が、舞台で挿した簪が欲しさに、  
 親の金を十両持ち出したとか。数えれば百にも余る女出入の出来  
 事は、おせんの茶見世へ休む人達の間にさえ、聞くともなく、

語<sup>かた</sup>るともなく伝<sup>つた</sup>えられて、嘘<sup>うそ</sup>も真<sup>ま</sup>も取交<sup>とりま</sup>ぜた出来事<sup>できごと</sup>が、きのうよりはきよう、きようよりは明日<sup>あす</sup>と、益<sup>ます</sup>々<sup>ます</sup>菊<sup>きく</sup>之<sup>の</sup>丞<sup>じよう</sup>の人氣<sup>にんき</sup>を高<sup>たか</sup>くするばかり。

が、おせん<sup>むね</sup>の胸<sup>そこ</sup>の底<sup>ひ</sup>にひそんでゐる、思慕<sup>しほ</sup>の念<sup>ねん</sup>は、それら<sup>うわさ</sup>の噂<sup>うわさ</sup>には一切<sup>さい</sup>おかまいなしに日毎<sup>ひごと</sup>につのつてゆくばかりだった。それもそのはずであろう。おせん<sup>した</sup>が慕<sup>きく</sup>う菊<sup>の</sup>之<sup>じ</sup>丞<sup>じよう</sup>は、江戸中<sup>えどじゆう</sup>の人氣<sup>にんき</sup>を背負<sup>せお</sup>つて立<sup>た</sup>つた、役者<sup>やくしや</sup>の菊<sup>きく</sup>之<sup>の</sup>丞<sup>じよう</sup>ではなくて、かつての幼<sup>おきな</sup>なじみ、王子<sup>おうじ</sup>の吉<sup>きち</sup>ちゃん<sup>ひと</sup>その人<sup>ひと</sup>だったのだから。――

何<sup>なに</sup>某<sup>がし</sup>の御子息<sup>ごしそく</sup>、何屋<sup>なにや</sup>の若旦那<sup>わかだんな</sup>と、水茶屋<sup>みずちや</sup>の娘<sup>むすめ</sup>には、勿<sup>も</sup>体<sup>つたい</sup>ないくらい<sup>えんだん</sup>の縁談<sup>えんだん</sup>も、これまでに五つや十ではなく、中<sup>なか</sup>には用<sup>よう</sup>人<sup>にん</sup>を使者<sup>ししや</sup>に立<sup>た</sup>てての、れッきとしたお旗本<sup>はたもと</sup>からの申<sup>もうしこ</sup>込<sup>こ</sup>みも

二三は数えられたが、その度毎に、おせんくびの首は横に振られて、  
 あつたら玉たまの輿こしに乗りそこねるかひとびとと人々を惜しおがらせて来た腑ふ  
 甲斐がいなさ、しかも胸むねに秘ひめた菊きく之丞のじようへの切せつなる思おもいを、知しる人ひと  
 とては一人ひとりもなかつた。

名人めいじん由齋ゆうさいに、心こころの内うちを打うちあけて、三年ねん前まえに中村座なかむらざを  
 見た、八百屋やお七ふたの舞ふ台姿たいすがたをそのままの、生人形いきにんぎように頼たのみ込こ  
 んだ半年はんとし前まえから、おせんはきようか明日あす日ひかと、出来上できあがる日ひを、  
 どんなに待まったか知しれなかつたが、心魂しんこんを傾かたむけつくす仕事しごとだか  
 ら、たとえなにかあつても、その日ひまでは見みに來きちやアならねえ、  
 行ゆきますまいと誓ちかつた言葉ことばの手前てまえもあり、辛抱しんぼうに辛抱しんぼうを重かさね  
 て來きたとどのつまりが、そこは女おんなの乱みだれる思おもいの堪たえ難がたく、きの

うときよ<sup>う</sup>の二度<sup>ど</sup>も続<sup>つづ</sup>けて、この仕事<sup>しごと</sup>場<sup>ば</sup>を、ひそかに訪<sup>おとず</sup>れる氣<sup>き</sup>になつたのであろう。頭巾<sup>ずきん</sup>の中<sup>なか</sup>に瞠<sup>みは</sup>つた眼<sup>め</sup>には、涙<sup>なみだ</sup>の露<sup>つゆ</sup>が宿<sup>やど</sup>つていた。

「親方<sup>おやかた</sup>。——もし親方<sup>おやかた</sup>」

もう一度<sup>ど</sup>おせんは奥<sup>おく</sup>へ向<sup>むか</sup>つて、由齋<sup>ゆうさい</sup>を呼<sup>よ</sup>んで見<sup>み</sup>た。が、聞<sup>きこ</sup>えるものは、わずかに樋<sup>とい</sup>を伝<sup>つた</sup>わつて落<sup>お</sup>ちる、雨垂<sup>あまだ</sup>れの音<sup>おと</sup>ばかりであつた。

軒端<sup>のきば</sup>の柳<sup>やなぎ</sup>が、思<sup>おも</sup>ひ出<sup>だ</sup>したように、かるく雨戸<sup>あまど</sup>を撫<sup>な</sup>でて行<sup>い</sup>つた。

#### 四

「若旦那。——もし、若旦那」

「うるさいね。ちと黙<sup>だま</sup>ってお歩きよ」

「そう仰<sup>おつ</sup>しやいますが、これを黙<sup>だま</sup>って居<sup>お</sup>りましたら、あとで若<sup>わかだ</sup>旦那<sup>んな</sup>に、どんなお小言<sup>こごと</sup>を頂<sup>ちやうだい</sup>戴<sup>だい</sup>するか知<sup>し</sup>れませんや」

「何<sup>な</sup>んだツて」

「あすこを御覧<sup>ごらん</sup>なさいまし。ありやアたしかに、笠森<sup>かさもり</sup>のおせんさんでござんしょう」

「おせんがいるツて。——ど、どこに」

薬研堀<sup>やげんぼり</sup>の不<sup>ふ</sup>動<sup>どう</sup>様<sup>さま</sup>へ、心願<sup>しんがん</sup>があつての帰<sup>かえ</sup>りがけ、黒八丈<sup>くろじやう</sup>の襟<sup>えり</sup>のかかったお納戸茶<sup>なんどちや</sup>の半合羽<sup>はんがっぱ</sup>に奴<sup>やつこ</sup>蛇<sup>じや</sup>の目<sup>め</sup>を宗十郎<sup>そうじろ</sup>好<sup>こう</sup>みに差<sup>さ</sup>して、中小僧<sup>ちゆうこぞう</sup>の市松<sup>いちまつ</sup>を供<sup>とも</sup>につれた、紙問屋<sup>かみどんや</sup>橘<sup>たちばな</sup>屋<sup>や</sup>の

わかだんなとくたろう  
若旦那徳太郎の眼は、上ずつたように雨の中を見詰めた。

「あすこでござんすよ。あの筆屋の前から両替の看板の下  
を通つてゆく、あの頭巾をかぶつた後姿。――」

「うむ。ちよいとお前、急いで行つて、見届けといで」

「かしこまりました」

頭あたまのてつぺんまで、汚泥はねの揚がるのもお構かまいなく、横よこッ飛とびに  
飛とび出だした市松いちまつには、雨あめなんぞ、芝居しばいで使つかう紙かみの雪ゆきほども感かん  
じられなかつたのであらう。七八間けんさき先こを小きざみに往いく洩蛇しづじや  
の目めの横よこを、一文字もんじに駆脱かけぬけたのも束の間つかま、やがて踵くびすを返かえすと、  
鬼おにの首くびでも取とつたように、喜よろこび勇いさんで駆かけ戻もどつた。

「どうした」

「この二つの眼で睨んだ通り、おせんさんに違いござんせん」  
 「これこれ、何んでそんな頓狂な声を出すんだ。いくら雨の中なかでも、人様ひとさまに聞かれたら事じやアないか」

「へいへい」

「お前まえ、あとからついといで」

目はしの利いたところが、まず何よりの身上しんしようなのであろう。  
 若旦那わかだんなのお供ともといえ、常つねに市いちどんと朋輩ほうばいから指さされる慣ならわしは、時ときにかけ蕎麦そばの一杯ぱいくらいには有ありつけるものの、市松いちまつに取とつては、寧ろむし見世みせに坐すわつて、紙かみの小口こぐちをそろえている方ほうが、  
 どのくらい楽らくだか知しれなかつた。

が、そんな小僧こぞうの苦楽くらくなんぞ、背中せなかにとまつた蠅程はえほどにも思おもわ

ない徳太郎とくたろうの、おせんと聞いた夢中むちゆうの歩みあゆは、合羽かっぱの下から覗のぞいている生なまツ白しろい脛すねに出た青筋あおすじにさえうかがわれて、道みちの良よし悪わるしも、横よこツ降ふりにふりかかる雨あめのしぶきも、今いまは他所よその出来でき事ごとでもあるように、まったく意中いちゆうにないらしかった。

「ちよいと姐ねえさん。いえさ、そこへ行くのは、おせんちゃんじゃないかい」

それと呼よび止とめた徳太郎とくたろうの声こえは、どうやら勝手かってのわるさにふるえていた。

「え」

くるりと振ふり向むいたおせんは、頭巾ずきんの中なかで、眼めだけに愛あい嬌きようをもたせながら、ちらりと徳太郎とくたろうの顔かおを偷ぬすみ見たみたが、相あい手てがし

ばしば見世へ寄つてくれる若旦那だと知ると、あらためて腰をかがめた。

「おやまア若旦那、どちらへおいででござんす」

「つい、その不動様へ、参詣に行つたのさ。——そうして

お前さんは」

「お母さんの薬を買いに、浜町までまいりました。」

「浜町。そりやアこの雨に、大抵じやあるまい。お前さんがわざわざ行かないでも、ちよいと一言聞いてれば、いつでもう

ちの小僧に買いにやつてあげたものを」

「有難うはござんすが、親に服ませるお薬を人様にお願ひ申し

ましては、お稲荷様の罰が当ります」

「成る程、成る程、相変らずの親孝行だの」  
 徳太郎はそういつて、ごくりと一つ固唾を飲んだ。

## 五

当代の人気役者宗十郎に似ていると、太鼓持の誰かに一度いわれたのが、無上に機嫌をよくしたものの、のほほんと納まつた色男振りは、見る程の者をして、ことごとく虫ずの走るおもいをさせずにはおかないくらい、気障気たつぷりの若旦那徳太郎ではあつたが、親孝行の話を切ツかけに、あらたまつておせんを見詰めたその眼には、いつもと違った真剣な心持

が不思議に根強く現れていた。

「お前さんは、これから何か、急な御用がお有かの」

「あい、肝腎のお見世の方を、脱けて来たのでござんすから、

一刻も速く帰りませぬと、お母さんにいらぬ心配をかけますし、

それに、折角のお客様にも、申訳がござんせぬ」

「お客の心配は、別にいりやアすまいがの。しかし、お母さん

といわれて見ると。……」

「何か御用でござんすかえ」

「なアにの。思いがけないところで出遭った、こんな間のいいこ

とは、願ってもありやアしないからひとつどこぞで、御飯でもつ

き合つてもらおうと思つてさ」

「おや、それは御親切ごしんせつに、有難ありがとうはござんすが、あたしやいまも申もうします通りとお、風邪かぜを引ひいたお母かあさんと、お見世みせへおいでのお客きやく様さまがござんすから。――」

「この雨あめだ。いくら何なんでも、お客きやくの方は、気きになるほど行いきもしまい。それとも誰だれぞ、約束やくそくでもした人ひとがお有ありかの」

「まア何なんでそのようなお人ひとが。――」

「そんなら別べつに、一時ときやそこいら遅おそくなつたとて、案あんずることもなからうじやないか」

「お母かあさんが首くびを長ながくして、薬くすりを待まつてでございます」

「これ、おせんちゃん」

「ああもし。――」

「お手間を取らせることじゃない。ちと折<sup>おり</sup>いって、相談<sup>そうだん</sup>したい訳<sup>わけ</sup>もある。ついそこまで、ほんのしばらく、つき合<sup>あ</sup>っておくれないか」

「さアそれが。……」

「おまえ、お袋<sup>ふくろ</sup>さんの、薬<sup>くすり</sup>を買いに行<sup>い</sup>ったとは、そりや本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>かの」

「えッ」

「本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>かと訊<sup>き</sup>いてるのさ」

「何<sup>な</sup>んで、あたしが嘘<sup>うそ</sup>なんぞを。――」

「そんならその薬<sup>くすり</sup>の袋<sup>ふくろ</sup>を、ちよいと見<sup>み</sup>せておくれでないか」

「袋<sup>ふくろ</sup>とえ。――」

「持つてはいないとおいいだろう。ふふふ。やつぱりお前は、あたしの手前てまえをつくろつて、根ねもない嘘うそをついたんだの、おおかた好きな男おとこに、会あいに行いつた帰かえりであろう。それと知しつたら、なおさらこのまま帰かえすことじゃないから、観かん念ねんおし」

「あれ若旦那わかだんな。――」

「いいえ、放はなすものか、江戸中えどじゅうに、女おんなの数は降ふる程ほどあつても、思おもひ詰つめたのはお前一人まえひとり。ここでああへたな、日頃ひごろ願ねがひ申もうした、不動ふどう様の御利益ごりやくに違ちがひない。きょうというきょうはたとえ半はん時きでもつき合あつてもらわないうちにや。……」

押おえた袂たもとを振ふり払はらつて、おせんが体からだをひねつたその刹那せつな、ひよいと徳太郎とくたろうの手首てくびをつかんで、にやり笑わらつたのは、傘かさもささず

に、頭あたまから桐油とうゆを被かぶつた彫師ほりしの松五郎まつろうだった。

「若旦那わかだんな、殺せつ生しょうでげすぜ」

「ええ、うるさい。余計よけいな邪間じやまだてをししないで、引ッ込ひこんでおく  
れ」

「はははは。邪間じやまだてするわけじゃござんせんが、御覧ごらんなせえや

し。おせんちゃんは、こんなにいやだといつてるじゃござんせん  
か。若旦那わかだんな、色いろ男おとこの顔かおがつぶれやすぜ」

過日かじつの敵かたきを討うつたつもりなのであろう。松五郎まつろうはこういつて、  
髯ひげあとの青い顎あおあごを、ぐつと徳太郎とくたろうの方ほうへ突つきだした。

「はッはッは。若旦那わかだんな、そいつア御無理ごむりでげすよ。おせんは名な代だいの親孝行おやこうこう、薬くすりを買いかに行いつたといやア、嘘うそも隠かくしもござんすまい。ここで逢あつたが百年目ねんめと、とつ捕つかまえて口説くどこうツたつて、そうは問屋とんやでおろしませんや。——この近所きんじよの揚弓場ようきゆうばの姐ねえさんなら知しらねえこと、かりにもお前まえさん、江戸えど一番ばんと評判ひやうばんのあるおせんでげすぜ。いくら若旦那わかだんなの御威勢ごいせいでも、こればツかりは、そう易やすやす々たアいきますまいて」

おせんを首尾しゆびよく逃にがしてやつた雨あめの中で、桐油とうゆから半分はんぶん顔をかお出した松五郎まつごろうは、徳太郎とくたろうをからかうようにこういうと、我われとわが鼻はなの頭あたまを、二三度平手どひらてで引ひツこすつた。

腹<sup>はら</sup>立たしさに、なかば泣<sup>な</sup>きたい氣持<sup>きもち</sup>をおさえながら、松五郎<sup>まつごろう</sup>を  
 睨<sup>にら</sup>みつけた徳太郎<sup>とくたろう</sup>の細<sup>ほそ</sup>い眉<sup>まゆ</sup>は、止<sup>とど</sup>め度なくぴくぴく動<sup>うご</sup>いていた。

「市公<sup>いちこう</sup>」

思<sup>おも</sup>いがけない出来事<sup>できごと</sup>に、茫<sup>ぼう</sup>然<sup>ぜん</sup>としていた小僧<sup>こぞう</sup>の市松<sup>いちまつ</sup>が、ペ

こりと下<sup>さ</sup>げた頭<sup>あたま</sup>の上<sup>うへ</sup>で、若<sup>わか</sup>旦<sup>だん</sup>那<sup>な</sup>の声<sup>こえ</sup>はきりぎりすのようにふる

えた。

「馬鹿野郎<sup>ばかやろう</sup>」

「へえ」

「なぜおせんを捕<sup>つか</sup>まえないんだ」

「お放<sup>はな</sup>しなすつたのは、若<sup>わか</sup>旦<sup>だん</sup>那<sup>な</sup>でございます」

「ええうるさい。たとえあたしが放<sup>はな</sup>しても、捕<sup>つか</sup>まえるのはお前<sup>まえ</sup>の

やくめ  
役目だ。——もうお前まえなんぞに用ようはない。今いますぐここで暇ひまをやる

から、どこへでも行いつておしまい」

「ははは。若わか旦那だんな」と、松五郎まつろうが口くちをはさんだ。「そいつアち

と責せめが強過つよすぎやしよう。小僧こぞうさんに罪つみはねえんで。みんなあな

たの我わがままからじやござんせんか」

「松まつつあん、お前まえなんぞの出でる幕まくじやないよ。黙だまつてておくれ」

「そうでもござんしようが、市いちどんこそ災難さいなんだ。何なんにも知しら

ずにお供ともに來きて、おせんおせんに遭あつたばかりに、大だい事じな奉公ほうこうをし

くじるなんざ、辻つじ占うらないの文句もんくにしても悪過わるすぎやさアね。堪忍かんにん

してやつとくんない。——こう市いちどん。おめえもしつかり、若わ

旦那かだんなにあやまんねえ」

「若旦那、どうか御勘弁なすつておくんなさいまし」

「いやだよ。お前は、もう家の奉公人でもなけりや、あたしの供でもないんだから、ちつとも速くあたしの眼の届かないところへ消えちまうがいい」

「消えろとおつしやいまして。……」

「判らずやめ。泥の中へでも何んでも、勝手にもぐつて失せるんだ」

「へえ」

尻端折りの尾骶骨のあたりまで、高々と汚泥を揚げた市松の、猫背の背中へ、雨は容赦なく降りかかつて、いつの間にか人だかりのした辺の有様に、徳太郎は思わず亀の子のよ

うに首くびをすくめた。

「もし、若旦那わかだんな」

まるとりまなか  
円く取巻いた中から、ひよつこり首くびだけ差し伸のべて、如何いかにも  
はばかものごし  
憚はばつた物腰ものこしの、手てを膝ひざの下までさげたのは、五十がらみのぼて  
ふさかなや  
振り魚屋さかなやだった。

徳太郎とくたろうは、偷ぬすむように顔かおを挙げた。

「手前てまえでございます。市松いちまつの親父おやじでございます」

「えッ」

「通りとおがかりの御挨拶ごあいさつで、何なんとも恐れおそいりますが、どうやら、  
いちまつ  
市松いちまつの野郎やろうが、飛とんだ粗相そそうをいたしました様子ようす。早速さつそく連れて  
かえ  
帰りかえまして、性根しょうねの坐すわるまで、責め折檻せつかんをいたします。どう

かこのまま。手前<sup>てまえ</sup>にお渡し<sup>わた</sup>し下さ<sup>くだ</sup>いまし」

「おツとツとツと。父<sup>とつ</sup>つあん、そいつアいけねえ。おいらが悪い<sup>わる</sup>

ようにしねえから、おめえはそつちに引<sup>ひ</sup>ッ込<sup>こ</sup>んでるがいい」

まつろう おやし<sup>せい</sup> 松五郎が親爺<sup>おやじ</sup>を制<sup>せい</sup>している隙<sup>すき</sup>に、徳太郎<sup>とくたろう</sup>の姿<sup>すがた</sup>は、いつか人込<sup>ひとご</sup>

みの中<sup>なか</sup>へ消<sup>き</sup>えていた。

## 七

「政吉<sup>まさきち</sup>、辰蔵<sup>たつぞう</sup>、亀八<sup>かめ</sup>、分太<sup>ぶんた</sup>、梅吉<sup>うめきち</sup>、幸兵衛<sup>こうべえ</sup>。――」

殆<sup>ほと</sup>んどひといきに、二三日<sup>にちまえ</sup>前に奉公<sup>ほうこう</sup>に來<sup>き</sup>た八歳<sup>さい</sup>の政吉<sup>まさきち</sup>か

ら、番頭<sup>ばんとう</sup>の幸兵衛<sup>こうべえ</sup>まで、やけ半分<sup>はんぶん</sup>に呼びながら、中<sup>なか</sup>の口<sup>くち</sup>から

あたふたと駆け込んで来た徳太郎は、鬚の刷毛先に届く、背中一杯の汚泥も忘れたように、廊下の暖簾口で地駄ン駄踏んで、おのが合羽をむしり取っていた。

「へい、これは若旦那、お早いお帰りでございます」

番頭の幸兵衛は、帳付の筆を投げ出して、あわてて暖

簾口へ顔を出したが、ひと目徳太郎の姿を見るとつきり、

途中で喧嘩でもして来たものと、思い込んでしまったのである

う。頭のとツ辺から足の爪先まで、見上げ見おろしながら、言

葉を吃らせた。

「ど、どうなすつたのでございます」

「番頭さん、市松に直ぐ暇をだしとくれ」

「市松いちまつが、な、なにか、粗相そそうをいたしましたか」

「何なんでもいいから、あたしのいつた通りとおにしておくれ。あたしやきようくらい、恥はじをかいたことアありやしない。もう口惜くやしくツて、口惜くやしくツて。……」

「そ、それはまたどんなことでございます。小僧こぞうの粗相そそうは番頭ばんとうの粗相そそう、手前てまえから、どのようにもおわびはいたしましたししょうから、ごかんごかんべんべんねがねが御勘弁願ごかんべんねがえるものでございましたら、この幸兵衛こうべえに御免ごめんじ下くださいまして。……」

「余計よけいなことは、いわないでおくれ」

「へい。……左様さようでございましょうが、お見世みせの支配しはいは、大旦おおだんなさまなさま、一切さいお預あずかりいたして居おります幸兵衛こうべえ、あとで大旦おおだ

んなさま  
 那樣のお訊ねがございました時に、知らぬ存ぜぬでは通りませ

ぬ。どうぞその訳を、仰しやつて下さいまし」

「訳なんぞ、聞くことはないじゃないか。何んでもあたしのいつ

た通り、暇さえ出してくれりやいいんだよ」

駄々子がおもちや箱をぶちまけたように、手のつけられない

すね方かたをしている徳太郎の耳へ、いきなり、見世先から聞え来

たのは、松五郎まつろうの笑い声わらごえだった。

「はッはッは、若旦那わかだんな、まだそんなことを、いつといでなさる

んでござんすかい。耳寄りの話を聞いてめえりやした。いい智恵ちえ

をお貸し申しやすから、小僧さんのしくじりなんざさっぱり水に

なが流しておやんなさいまし」

ちゆうばんとう 中番頭から小僧達まで、一同の顔が一齊に松五郎の方へ  
む 向き直つた。が、徳太郎は暖簾口から見世の方を睨みつけた  
まま、返事もしなかつた。

「もし、若旦那。悪いこたア申しやせん。お前さんが、鯨

鉾立をしてお喜びなさる、うれしい話を聞いてめえりやした

んで。——ここで話しちやならねえと仰しやるんなら、そちらへ

行つてお話しいたしやす。着物もぬれちやア居りやせん。どうで

げす。それともこのまま帰りやしようか」

被つていた桐油を、見世の隅へかなぐり棄てて、ふところから

取出した銚豆煙管へ、呟の粉煙草を器用に詰めた松五郎は、

にゆツと煙草盆へ手を伸ばしながら、ニヤリと笑つて暖簾口

を見詰めた。

「松つあん」

「へえ」

「若旦那が、こつちへとおいなさる」

「そいつアどうも。——」

「おつと待った。その足で揚がられちやかなわな。辰どん、裏の鹽へ水を汲みな」

番頭の幸兵衛は、壁の荒塗りのように汚泥の揚がっている松五郎の脛を、渋い顔をしてじつと見守った。

「ふふふ、松五郎は、見かけに寄らねえ忠義者でげすぜ」  
ひとり言をいって顎を突出した松五郎の顔は、道化方の松島

茂平次もへいじをそのままであつた。

## 八

行水ぎようずいでもつかうように、股ももの付根つけねまで洗あらつた松五郎まつごろうが、北き向たむきの裏二階うらかいにそぼ降ふる雨あめの音おとを聞きながら、徳太郎とくたろうと対座たいざしていたのは、それから間まもない後あとだつた。瓦かわらのおもてに、あとからあとから吸すい込まれて行く秋雨あきさめの時ときおり、隣となりの家いえから飛とんできた柳きやなぎの落葉おちばを、貼はり付けるように濡ぬらして消えるのが、何なにか近頃ちかごろはやり始はじめた飛とび緋がすりのように眼めに映うつつた。

銀煙管ぎんぎせるを握にぎつた徳太郎とくたろうの手ては、火鉢ひばちの枠わくに釘着くぎづけにされた

ように、固かたくなつて動うごかなかつた。

「ではおせんにや、ちゃんとした情人いろがあつて、この節せつじや毎まい日ち、そこへ通かよい詰づめだというんだね」

「まず、ざつとそんなことなんで。……」

「いったい、そのおせんの情人いろというのは、何者なにものなんだか、松まつつあん、はつきりあたしに教おしえておくれ」

「さア、そいつアどうも。——」

「何なにをいつてんだね。そこまで明あかしておきながら、あとは幽ゆう霊れいの足あしにしちまうなんて、馬鹿ばかなことがあるもんかね。——お前まえさんさつき、何なんといつたい。若旦那わかだんなが鯪しや鉾ちよ立こして喜よろこぶ話はなしだと、見世みせであんなに、大おおきなせりふでいつたじやないか。あたし

や口惜しいけれど聞いてるんだよ。どうせその気で来たんなら、あからさまに、一から十まで話しておくれ。相手の名を聞かないうちは、気の毒だが松つあん、ここは滅多に動かしやアしないよ」

「ちよ、ちよいと待つとくんない、若旦那。無理をいいなすつちや困りやす」

「何が無理さ」

「何がと仰しやって、実アあつしやア、相手の名前まじア知らねえんで。……」

「名前を知らないツて」

「そうなんで。……」

「そんなら、名前はともかく、どんな男なんだか、それをいつと

くれ。お武家<sup>ぶけ</sup>か、商人<sup>あきんど</sup>か、それとも職人<sup>しよくにん</sup>か。――」

「そいつがやつぱり判<sup>わか</sup>らねえんで。――」

「松つあん」

徳太郎<sup>とくたろう</sup>の声<sup>こえ</sup>は甲走<sup>かんぱし</sup>った。

「へえ」

「たいがいにしとくれ。あたしや酔狂<sup>すいきやう</sup>で、お前<sup>まえ</sup>さんをここへ通<sup>とお</sup>したんじやないんだよ。おせんが隠<sup>かく</sup>れて逢<sup>あ</sup>つているという、相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>の男<sup>おとこ</sup>を知<sup>し</sup>りたいばかりに、見世<sup>みせ</sup>の者<sup>もの</sup>の手前<sup>てまえ</sup>も構<sup>かま</sup>わず、わざわざ二階<sup>かい</sup>へあげたんじやないか。名<sup>な</sup>を知ら<sup>し</sup>ないのはまだしものこと、お武家<sup>ぶけ</sup>か商人<sup>あきんど</sup>か、職人<sup>しよくにん</sup>か、それさえ訳<sup>わけ</sup>がわからないなんて、馬鹿<sup>ばか</sup>にするのも大<sup>たい</sup>概<sup>がい</sup>におし。――もうそんな人<sup>ひと</sup>にや用<sup>よう</sup>はないか

ら、とつとと消えて失せとくれよ」

「帰れと仰しやるんなら、帰りもしましようが、このまま帰つても、ようござんすかね」

「なんだつて」

「若旦那。あつしやアなる程、おせんの相手が、どこの誰だか知つちやいせんが、そんなこたア知ろうと思や、半日とかかからねえでも、ちやアんと突きとめてめえりやす。それよりも若旦那。もつとお前さんにや、大事なことがありやアしませんかい」

「そりや何んだい」

「まアようがす。とつとと消えて失せろツてんなら、あんまり畳

のあつたまらねえうちに、いい加減かげんで引揚げひきあげやしよう。——どう  
もお邪魔じやまいたしやした」

「お待ちま」

「何か御用なんごようで」

「あたしの大事なことだという、それを聞きかせてもらいましよう」  
が、松五郎まつろうはわざと頬ほほをふくらまして、鼻はなの穴あなを天てんじよう井むへ向む  
けた。

帯おび

祇園守の定紋を、鶯茶に染め抜いた三尺の暖簾から、  
 ちらりと見える四畳半。床の間に挿した秋海棠が、伊満  
 里の花瓶に影を映した姿もなまめかしく、行燈の焰が香のよう  
 に立昇つて、部屋の中程に立てた鏡台に、鬘下地の人  
 とかげ  
 影がおぼろであつた。

所は石町の鐘撞堂新道。白紙の上に、ぽつんと一点、  
 桃色の絵の具を垂らしたように、芝居の衣装をそのまま付け  
 て、すつきりたたずんだ中村松江の頬は、火桶のほてりに上  
 ようき  
 氣したのであろう。たべ酔つてでもいるかと思われるまでに赤

かった。

「おこの。——これ、おこの」

鏡のおもてにうつしたおのが姿を見詰めたまま、  
座敷にいるはずの、女房を呼んで見た。が、いずこへ行つたのやら、直ぐに返事は聞かれなかつた。

「ふふ、居らんと見えるの。このようによう映る格好を、見せようとおもとるに。——」

松江はそういういながら、きやしやな身体をひねって、踊の

ようなかたちをしながら、再び鏡のおもてに呼びかけた。

「おせんが茶をくむ格好じゃ、早う見に来たがいい」

「もし、太夫」

暖簾のれんの下したにうづくまつて、鬚まげの刷毛はけさき先を、ちよいと指ゆびで押おさえたまま、ぺこりと頭あたまをさげたのは、女房にようぼうのおこのではなくて、男衆おとこしゅうの新七しんだった。

「新七しんかいな」

「へえ」

「おこのは何なにをしてじや」

「さア」

「何なんとしたぞえ」

「お上かみさんは、もう一時ときも前まえにお出でかけなすつて、お留守るすでござります」

「留守るすやと」

「へえ」

「どこへ行<sup>い</sup>った」

しろかべちよう

「白壁町の、春<sup>はる</sup>信<sup>のぶ</sup>さんのお宅<sup>たく</sup>へ行<sup>い</sup>くとか仰<sup>おつ</sup>しやいまして、

――」

「何<sup>な</sup>んじやと。春<sup>はる</sup>信<sup>のぶ</sup>さんのお宅<sup>たく</sup>へ行<sup>い</sup>った。そりや新<sup>しん</sup>七、ほんま

かいな」

「ほんまでござります」

「おこのがまた、白<sup>しろ</sup>壁<sup>かべ</sup>町<sup>ちよう</sup>さんへ、どのような用<sup>よう</sup>事<sup>じ</sup>で行<sup>い</sup>ったの

じや。早<sup>はよ</sup>う聞<sup>き</sup>かせ」

「御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>の筋<sup>すじ</sup>は存<sup>ぞん</sup>じませぬが、帯<sup>おび</sup>をどうとやらすると、いつておい

ででござりました」

「帯。<sup>おび</sup>新七。<sup>しん</sup>——その箆筩<sup>たんす</sup>をあけて見<sup>み</sup>や」

あわてて箆筩<sup>たんす</sup>の抽斗<sup>ひきだし</sup>へ手<sup>て</sup>をかけた新七<sup>しん</sup>は、松江<sup>しょうこう</sup>のいいつ

け通り<sup>どお</sup>、片ッ端<sup>かたばし</sup>から抽斗<sup>ひきだし</sup>を開<sup>あ</sup>け始<sup>はじ</sup>めた。

「着物<sup>きもの</sup>も羽織<sup>はおり</sup>も、みなそこへ出<sup>だ</sup>して見<sup>み</sup>や」

「こうでござりますか」

「もつと」

「これも」

「ええもういちいち聞<sup>き</sup>くことかいな。一度<sup>ど</sup>にあけてしまいなはれ」

ぎつしり、抽斗<sup>ひきだし</sup>一杯<sup>ぱい</sup>に詰<sup>つま</sup>った衣装<sup>いしやう</sup>を、一枚<sup>まい</sup>残<sup>めこ</sup>らず畳<sup>たた</sup>の上<sup>うえ</sup>へ

ぶちまけたその中<sup>なか</sup>を、松江<sup>しょうこう</sup>は夢中<sup>むちゆう</sup>で引<sup>ひ</sup>ツかき廻<sup>まわ</sup>していたが、

やがて眼<sup>め</sup>を据<sup>す</sup>えながら新七<sup>しん</sup>に命<sup>めい</sup>じた。

「おまえ、直ぐに白壁町へ、おこの後を追うて、帯を取つて戻るのじゃ」

「何んの帯でござります」

「阿呆め、おせんの帯じゃ。あれがのうては、肝腎の芝居がわ

やになつてしまふがな」

剃りたての松江の眉は、青く動いた。

## 二

その時分、当のおこのは、駕籠を急がせて、月のない柳原の土手を、ひた走りに走らせていた。

鬱金うこんの風呂敷ふろしきに包つつんで、膝ひざの上に確うえしつかと抱かかえたのは、亭主ていしゅの松し  
 江ようこうが今度森田屋のおせんの狂言きやうげんを上じやうえん演えんするについて、  
 春信はるのぶの家へ日参いえにつさんして借かりて来きた、いわくつきのおせんの帯おびで  
 あるのはいうまでもなかつた。

鉄漿おはぐろも黒々くろぐろと、今朝染けさそめたばかりのおこの歯はは、堅かたく右みぎ  
 の袂たもとを噛かんでいた。

当時江戸では一番ばんだという、その笠森かさもりの水茶屋みずぢややの娘むすめが、ど  
 れ程勝ほどすぐれた縹きりよう緞なになにもせよ、浪速なになは天満てんまん天神てんじんの、橋はしの袂たもとに程  
 近どちかい薬種問屋やくしゆどんや「小西こにし」の娘むすめと生まれて、何なにひとつ不自由ふじゆうも知し  
 らず、我わがまま勝手かたてに育てそだてられて来きたおこのは、たとい役者やくしやの女に  
 房ようぼうには不向ふむきにしろ、品ひんなら縹きりよう緞なにななら、人ひとには引ひけは取とらな

いと、固<sup>かた</sup>い己<sup>うぬぼれ</sup>惚<sup>ぼ</sup>があつたのであろう。仮令<sup>たとええど</sup>江戸<sup>いこ</sup>に幾千<sup>おんな</sup>の女がいようともうちの太夫<sup>たゆう</sup>にばかりは、足<sup>あし</sup>の先<sup>さき</sup>へも触<sup>ふ</sup>らせることではないと、三年<sup>ねんまえ</sup>前に婚<sup>こん</sup>礼<sup>れい</sup>早<sup>そう</sup>々<sup>そう</sup>大阪<sup>おおさか</sup>を発<sup>た</sup>つて来<sup>き</sup>た時<sup>とき</sup>から、肚<sup>はら</sup>の底<sup>そこ</sup>には、挺<sup>てこ</sup>でも動<sup>うご</sup>かぬ強<sup>つよ</sup>い心<sup>こころ</sup>がきまつていた。

この秋<sup>あき</sup>の狂<sup>きやうげん</sup>言<sup>おつと</sup>に、良人<sup>えら</sup>が選<sup>えら</sup>んだ「おせん」の芝居<sup>しばい</sup>を、重<sup>じゆう</sup>助<sup>すけ</sup>さんが書<sup>か</sup>きおろすという。もとよりそれには、連<sup>つ</sup>れ添<sup>そ</sup>う身<sup>み</sup>の異存<sup>いぞん</sup>のあろうはずもなく、本<sup>ほん</sup>読<sup>よ</sup>みも済<sup>す</sup>んで、愈<sup>いよいよ</sup>稽古<sup>はいこ</sup>にかかった四<sup>に</sup>五<sup>ご</sup>日は、寝<sup>ね</sup>る間<sup>ま</sup>をつめても、次<sup>つぎ</sup>の間に控<sup>ひか</sup>えて、茶<sup>ちや</sup>よ菓子<sup>かし</sup>よと、女<sup>に</sup>房<sup>ようぼう</sup>の勤<sup>つと</sup>めに、さらさら手落<sup>ておち</sup>はなく過<sup>す</sup>ぎたのであつたが、さて稽古<sup>けいこ</sup>が積<sup>つ</sup>んで、おのれの工夫<sup>くふう</sup>が真<sup>しん</sup>剣<sup>けん</sup>になる時分<sup>じぶん</sup>から、ふと眼<sup>め</sup>についたのは、良人<sup>おつと</sup>の居間<sup>いま</sup>に大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>にたたんで置<sup>お</sup>いてある、もみじを

散らした一本の女帯だった。

買った衣装というのなら、誰に見しようとて、別に邪間にな

るまいと思われる、その帯だけに殊更に、夜寝る時まで枕

許へ引き付ての愛着は、並大抵のことではないと、疑う

ともなく疑ったのが、事の始まりというのであろうか。おこのが

昼といわず夜といわず、ひそかに睨んだとどのつまりは、独り四

畳半に立籠もつて、おせんの型にうき身をやつす、良人の胸

に巻きつけた帯が、春信えがくところの、おせんの大事な持

物だった。

カツとなつて、持ち出したのではもとよりなく、きのうもきよ

うもと、二日二晩考え抜いた揚句の果てが、隣座敷で茶を入

れていると見せての、雲くも隠かくれが順じゆんよく運はこんで、大通りへ出でて、駕籠かごを拾ひろうまでの段取りだんどりは、誰だれ一人ひとり知る者しもなものかろうとおもったのが、手落ておちといえはいえようが、それにしても、新七しんが後あとを追おつて来きようなぞとは、まったく夢ゆめにも想おもわなかつた。

「駕籠屋かごやさん。済すまんが、急いそいどくれやすえ」

「へいへい、合が点ってんでげす。月つきはなくとも星ほし明あかり、足許あしもとに狂くる

いはござんせんから御安心ごあんしんを」

「酒手さかてはなんぼでもはずみまますさかい、そのつもりで頼たのみます」

「相棒あいぼう」

「おお」

「聞きいたか」

「聞いたぞ」

「流石さすがにいま売うりだしの、堺屋さかいやさんのお上かみさんだの。江戸えどの女おんな達たちに聞きかしてやりてえ嬉しい台詞せりふだ」

「その通とおり。——お上かみさん。太夫たゆうの人氣にんきは大たいしたもんでげすぜ。

これからア、何なんにも恐こわいこたアねえ、日ひの出での勢いきおいでげさア」

「そうともそうとも、酒手さかてと聞ききいていうんじやねえが、太夫たゆうはでえいち、品ひんがあるツて評判ひょうばんだて。江戸えど役者やくしやにや、情なさけねえこ

とに、品ひんがねえからのう」

「おや駕籠屋かごやさん。左様さようにいうたら、江戸えどのお方かたに憎にくまれまッせ」

「飛とんでもねえ。太夫たゆうを誉ほめて、憎にくむような奴やつア、みんなけだも

のでげさアね」

「そうとも」

柳原の土手を左に折れて、駕籠はやがて三河町の、大

銀杏の下へと差し加つていた。

夜は正に四つだった。

### 三

しろかべちよう  
白壁町の春信の住居では、今しも春信が彫師の松五郎  
を相手に、今度鶴仙堂から板おろしをする「鷺娘」の下絵  
を前にして、頻りに色合せの相談中であつたが、そこへひ  
よつこり顔を出した弟子の藤吉は、団栗眼を一層まるく

しながら、二三度<sup>どつづ</sup>続けさまに顎<sup>あご</sup>をしゃくつた。

「お師匠<sup>ししやう</sup>さん、お客<sup>きやく</sup>でござんす」

「どなたかおいでなすつた」

「堺屋<sup>さかいや</sup>さんの、お上<sup>かみ</sup>さんがお見<sup>み</sup>えなんで」

「なに、堺屋<sup>さかいや</sup>のお上<sup>かみ</sup>さんだと。そりやアおかしい。何か<sup>なに</sup>の間違<sup>まちが</sup>

いじやねえのかの」

「間違<sup>まちが</sup>いどころじやござんせん。真正<sup>しんしょう</sup>証<sup>しょう</sup>銘<sup>めい</sup>のお上<sup>かみ</sup>さんでござんすよ」

「お上<sup>かみ</sup>さんが、何<sup>な</sup>んの用<sup>よう</sup>で、こんなにおそく来<sup>き</sup>なすつたんだ」

ついに一度<sup>ど</sup>も来<sup>き</sup>たことのない、中村<sup>なかむら</sup>松江<sup>しやうかう</sup>の女房<sup>にやうぼう</sup>が、訪<sup>たず</sup>

ねて来<sup>き</sup>たと聞<sup>き</sup>いただけでは、春信<sup>はるのぶ</sup>は、直<sup>す</sup>ぐさまその気<sup>き</sup>になれな

かつたのであろう。絵の具から眼を離すと、藤吉の顔をあらためて見直した。

「何の御用か存じませんが、一刻も早くお師匠さんにお目にかかつて、お願いしたいことがあると、それはそれは、急いでおりますんで。……」

「はアてな。——何んにしても、来たとあれば、とにかくこつちへ通すがいい」

藤吉が、あたふたと行つてしまうと、春信は仕方なしに松五郎の前に置いた下絵を、机の上へ片着けて、かるく舌うちをした。

「飛んだところへ邪間が這入つて、気の毒だの」

「どういたしやして、どうせあつしやア、外ほかに用ようはありやアしねえんで。……なんならあつちへ行いつて待まつとりやしようか」

「いやいや、それにやア及およぶまい。話はなしは直すぐに済すもうから、構かまわすここにいろがいい」

「そんならこつちの隅すみの方ほうへ、まいまいつぶろのようになつて、一服ぷくやつておりやしよう」

ニヤリと笑わらつた松五郎まつごろうが、障子しょうじの隅すみへ、まるくなつた時ときだつた。藤吉とうきちに案内あんないされたおこの姿すがたが、影絵かげえのように縁先えんさきへ現あらわれた。

「師匠ししょう、お連れ申もうしました」

「御免ごめんやすえ」

「さア、ずっとこつちへ」

鬱金うこんの包つつみを抱かかえたおこのは、それでも何なにやら心こころが乱みだれたのであ  
ろう。上じょうき氣おそした顔かおをふせたまま、敷居しきいぎわ際に頭あたまを下さげた。

「こないに遅おそう、無ぶしつけ躰うかがに伺うかがまして。……」

「どんな御用ごようか、遠慮えんりよなく、ずっとお通とおりなさるがいい」

「いいえもう、ここで結け構つこうでおます」

行燈あんどんの灯ひが長ながく影かげをひいた、その鼠ねずみ色いろに包つつまれたまま、  
石いしのように硬かたくなつたおこの髪かみが二筋すじ三筋すじ、夜風よかぜに怪あやしくふる  
えて、心こころもち青あおみを帯おびた頬ほほのあたりに、ほのかに汗あせがにじん  
でいた。

「そうしてお上かみさんは、こんな遅おそく、何なんの用ようでおいでなすつた」

「拝借はいしやくの、おせん様さまの帯おびを、お返しかえ申しに。――」

「なに、おせんおびの帯おびを。――」

「はい」

「それはまた何なんでの」

春信はるのぶは、意外いがいなおこの言葉ことばは、思おもわず眼めを瞠みはった。

「御大切おたいせつなお品しなゆえ、粗相そそうがあつてはならんよつて、速はやうお返かえ

し申もうすが上分じようぶん別べつと、思おもい立たつて参さんじました」

「では太夫たゆうはこの帯おびを、芝居しばいにや使つかわないつもりかの」

「はい。折角せつかくながら。……」

おこのは、そのまま固かたくく唇ちびるを噛かんだ。

## 四

「ふふふ、お上<sup>かみ</sup>さん」  
じつとおこの顔<sup>かお</sup>を見詰<sup>み</sup>めていた春信<sup>はるのぶ</sup>は、  
苦笑<sup>くしやう</sup>に唇<sup>くちびる</sup>を歪<sup>ゆが</sup>め  
た。

「はい」

「お前<sup>まえ</sup>さんもう一度<sup>ど</sup>、思い直<sup>おもいなお</sup>して見<sup>み</sup>なさる気<sup>き</sup>はないのかい」

「おもい直<sup>なお</sup>せといやはりますか」

「まずのう」

「なぜでおます」

「なぜかそいつは、そっちの胸<sup>むね</sup>に、訊<sup>き</sup>いて見<sup>み</sup>たら判<sup>わか</sup>んなさろう。

——その帯は、おせんから頼まれて、この春信が描いたものにや違ちがいないが、まだ向むこうの手へ渡わたさないうちに、太夫が来て、貸かしてくれとのたツての頼たのみ、これがなくては、肝腎かんじんの芝居しばいが出で来きないとまでいった挙句あげく、いや応なしに持もって行いかれてしまったものだ。おせんによもとより、内所ないしょで貸かして渡わたした品物しなもの、今い更急まさきゆうに返かえす程ほどなら、あれまでにして、持もって行きはしなからう。お上かみさん。お前まえ、つまらない料簡りようけんは、出ださないほうがいいぜ」

「そんならなんぞ、わたしがひとりの料簡りようけんで。……」

「そうだ。これがおせんの帯でなかったら、まさかお前まえさんは、この夜道よみちを、わざわざここまで返かえしにや来きなさるまい。太夫たゆうが締しめて踊おどったとて、おせんの色香いろかが移うつるという訳わけじゃアなし、芸げいに

人のつれあいが、そんな狭い考えじゃ、所詮うだつは揚がらないというものだ。余計なお接介のようだが、今頃太夫は、帯の行方を探しているだろう。お前さんの来たこたア、どこまでも内所ないしょにしておこうから、このままもう一度、持つて帰つてやるがいい」

「ほほほ、お師匠さん」

おこのは冷たく額つめで笑つた。

「え」

「折角せつかくの御親切ごしんせつでおますが、いったんお返ししようと、持つて参まゐりましたこの帯おび、また拝借はいしゃくさせて頂いたくとしまして、今夜こはお返し申もうします」

「ではどうしても、置いて行こうといいなさるんだの」

「はい」

「そうかい。それ程ほどまでにいうんなら、仕方しかたがない、預あずかろう。その換かわり、太夫たゆうが借かりに来きたにしても、もう二度と再どふたび貸かすことじゃないから、それだけは確しかと念ねんを押おしとくぜ」

「よう判わかりました。この上うえの御迷惑ごめいわくはおかけしまへんよつて。

……」

「はッはッはッ」と、今いままで座敷ざしきの隅すみに黙だまりこくつていた松五郎まつごろうが、急きゆうに煙管きせるをつかんで大おお笑わらいに笑わらった。

「どうした松まつつあん」

「どうもこうもありませんが、あんまり話はなしが馬鹿ばか氣げてるんで、と

うとう辛抱しんぼうが出来できなくなりやしたのさ。——師匠ししょう、ひとつあつしに、ちつとばかりしやべらしておくんなせえ」

「何なんとの」

「身みに降ふりかかる話はなしじゃねえ。どうせ人様ひとさまのことだと思おもつて、黙だまつて聴きいて居おりやしたが。——もし堺屋さかいやさんのお上かみさん、つまらねえ焼やきもちは、焼やかねえ方ほうがようがすぜ」

「なにいいなはる」

「なにも蟹かにもあつたもんじゃねえ。蟹かになら横よこにはうのが近道ちかみちだろうに、人間にんげんはそうはいかねえ。広ひろいようでも世間せけんは狭せめえものだ。どうか真まツ直向すぐむいて歩あるいておくんなせえ」

「あんたはん、どなたや」

「あつしやア松五郎まつごろうという、けちな職人しよくにんでげすがね。お前まえさんの仕方しかたが、あんまり情なさけな過すぎるから、口くちをはさましてもらったのさ。知らしなきやいつて聞きかせるが、笠森かさもりのおせん坊ぼうは、男おとこ嫌きらいで通とおっているんだ。今いまさらお前まえさんとこの太夫たゆうが、金きん鉾ぼを打うった駕籠かごで迎むかえに来きようが、毛筋けすじ一本動ぽんどうかすような女おんなじやねえから安心あんしんしておいでなせえ。痴話喧嘩ちわげんかのとばつちりがこ  
こまでくるんじや、師匠ししょうも飛とんだ迷惑めいわくだぜ」  
松五郎まつごろうはこういつて、ぐつとおこのを睨にらみつけた。

## 五

やみなか ねずみ  
 暗の中を、鼠のようになって、まっしぐらに駆けて来た堺屋  
 おとしゆうしん  
 の男 衆 新七は、これもおこのと同じように、柳 原の土手  
 つじ はら いそ  
 を八辻ヶ原へと急いだ、夢中になつて走り続けてきたせいで  
 みぎ い しろかべちよう  
 あろう。右へ行く 白壁町 への道を左へ折れたために、狐につ  
 ほうかく  
 ままれでもしたように、方角さえも判らなくなつた折も折、彼  
 なた ほんだぶぜんてい  
 方の 本多豊前邸 の練堀の影から、ひた走りに走ってくる女の  
 けはい おも  
 気配。まさかと思つて眼をすえた刹那瞼ににじんだ髪かたちは、  
 まさ  
 正しくおこのの姿だつた。

しん  
 新七は、はッとして飛び上つた。

かみ  
 「おお、お上さん」

まえ  
 「あッ。お前はどこへ」

「どこへどころじゃござりません。お上さんこそ今時分、どちらへおいでなさいました」

「わたしは、お前も知つての通り、あの絵師の春信さんのお宅へ、いつて来ました」

「そんならやつぱり、春信師匠のお宅へ」

「お前がまた、そのようなことを訊いて、何んにしやはる」

「手前は太夫からのおいっけで、お上さんをお迎えに上つたのでござります」

「わたしを迎えに。――」

「へえ。――そうしてあの帯をどうなされました」

「何、帯とえ」

「はい。おせんさんの帯は、お上さんが、お持ちなされたのでござりましょう」

「そのような物を、わたしが知ろかいな」

「いいえ。知らぬことはございますまい。先程お出かけなさるとき、帯を何んとやら仰しやつたのを、新七は、たしかにこの耳で聞きました」

「知らぬ知らぬ。わたしが春信さんをお訊ねしたのは帯や衣装のことではない。今度鶴仙堂から板おろしをしやはるという、鷺娘の絵のことじや。——ええからそこを退きなされ」

「いいや、それはなりません。お上さんは、確に持つてお出なされたはず。もう一度手前と一緒に、白壁町のお宅へ、お戻り

なすつて下くださりませ」

「なにいうてんのや。わたしが戻もどつたとて、知らぬものが、あろうはずがあるかいな。——こうしてはいられぬのじゃ。そこ退のきやいの」

おこのが払はらつた手てのはずみが、ふと肩かたから滑すべつたのであろう。  
袂たもとを放はなしたその途端とたんに、新七しんはいやという程ほど、おこのに頬ほほを打うたれていた。

「あッ。お打ちなさいましたな」

「打うつたのではない。お前まえが、わたしの手てを取りとやはつて。……」  
「ええ、もう辛抱しんぼうがなりませぬ。手前てまえと一緒しよにもう一度ど、春はる信ぶさんのお宅たくまで、とつとおいでなさりませ」

ぐつとおこのの手首をつかんだ新七しんには、もはや主しゅ従じゆうの見みさかいてもなくなつていたのであろう。たとえ何なんであろうと、引ひずつても連れて行いかねばならぬという、強つよい意地いじが手伝てつだつて、荒あ々あしく肩かたに手てをかけた。

「これ、新七しん、何なにをしやる」

「何もかもござりませぬ。あのおお帯びは、太夫たゆうが今度こんどの芝居しばいにはなく  
てはならない大事だいじな衣い装しょう、手前てまえがひとりで行いつたとて、春信はるのぶ  
さんは渡わたしておくんないますまい。どうしてもお前まえ様さまを一し緒しょに  
連れて。――」

「ええ、行いかぬ。何なんというてもわしや行いかぬ」  
星ほしのみ光ひかつた空そらの下したに、二つのかたちは、犬いぬの如ごとくに絡からみ合あつ

ていた。

「ふふふ。みつともねえ。こんなことであろうと思つて、後をつけて来たんだが、お上さん、こいつア太夫さんの辱ンなるぜ」

「えッ」

「おれだよ。彫職人の松五郎」

## 六

留めるのもきかずに松五郎が火のようになって出て行つてしまつた後の画室には、春信がただ一人おこのの置いて行つた帯を前にして、茫然と煙管をくわえていたが、やがて何か思いだし

たのであろう。突然顔をあげると、吐きだすように藤吉を呼んだ。

「藤吉。——これ藤吉」

「へえ」

いつにない荒い言葉に、あわてて次の間から飛んで出た藤吉は、敷居際で、もう一度ぺこりと頭を下げた。

「何か御用で」

「羽織を出しな」

「へえ。——どツかへお出かけなさるんで。……」

「余計な口をきかずに、速くするんだ」

「へえ」

何なにが何なにやら、一向見当が付かなくなつた藤吉とうきちは、次の間つぎまに  
 取とつて返かえすと、箆たんす笥すをがたぴしいわせながら、春信はるのぶが好みこのの鶯う  
 茶ぐいすちやの羽織はおりを、捧ささげるようにして戻もどつて来きた。

「これでよろしいんで。……」

それには答こたえずに、藤吉とうきちの手から羽織はおりを、ひつたくるように  
 受取うけとつた春信はるのぶの足あしは、早はやくも敷居しきいをまたいで、縁先えんさきへおりて  
 いた。

「師匠ししょう、お供ともをいたしやす」

「独りひとでいい」

「お一人ひとりで。……そんなら提灯ちようちんを。――」

が、春信はるのぶの心こころは、やたらに先さきを急いそいでいたのであろう。いつ

もなら、とうきち 藤吉を供に連れてきえ、よみち 夜道を歩くには、かならちようち 必ず提ちようちん 灯まを持もたせるのであつたが、いま今はその提ちようちん 灯まを待つ間もどかしく、はおり羽織の片袖かたそでを通とおしたまま、はや早くも姿は枝折戸しおりどの外そとに消えていた。

とうきち 「藤吉。——とうきち 藤吉」

「へえ」

おく 奥からの声は、こえこの春まで十五年の永い間、ねんねながあいだ、ばんちよう番町の武家屋敷しきへ奉公ほうこうに上あがつていた。はるのふいもう春信の妹むすめ梶女かじめだつた。

「ここへ来きや」

「へえ」

やしきもの お屋敷者の見識けんしきとでもいうのであろうか。あし足が不自由ふじゆうであ

るにも拘かわらず、四十ちかに近い顔かおには、触ふれば剥はげるまでに濃こく白おしろ  
 粉いぬを塗ぬつて、寝ねる時ときより外ほかには、滅めつた放はなしたことのな長なが煙ぎせ  
 管るを、いっひつも膝ひざの上うえについていた。

「お兄様にいさまは、どちらにお出でかけなされた」

「さア、どこへおいでなさいましたか、つい仰おつしやらねえもんで  
 ござんすから。……」

「何なにをうかうかしているのじゃ。知しらぬで済すもうとお思おもいか。な  
 ぜお供ともをせぬのじゃ」

「そう申もうしたのでござんすが、師匠ししょうはひどくお急いそぎで、行く先さき  
 さえ仰おつしやらねえんで。……」

「直すぐに行いきや」

「へ」

「提ちようちん 灯とう を持つて直ぐに、後あとを追おうて行きやというのじや」

「と仰おつしやいまして、どっちへお出でかけか、方角ほうかくも判わかりやア

いたしやせん」

「まだ出でたばかりじや。そこまで行いけば直ぐに判わかろう。たじろい

でいる時ときではない。速はやう。速はやう」

この上うへ躡ちようちよ 躡ちようちよしていたら、持もった煙管きせるで、頭あたまのひとつも張はら

れまじき氣配けはいとなつては、藤吉とうきちも、立たたない訳わけには行いかなかつ

た。

提ちようちん 灯とう は 提ちようちん 灯とう、蠟燭ろうそく は 蠟燭ろうそく と、右みぎと左ひだりに別々べつべつにつ

かんだ藤吉とうきちは、追おわれるように、梶女かじじよの眼めからおもてに遁のがれ

た。

七

鏡<sup>かがみ</sup>のおもてに映<sup>うつ</sup>した眉間<sup>みけん</sup>に、深<sup>ふか</sup>い八<sup>じ</sup>の字<sup>よ</sup>を寄<sup>よ</sup>せたまま、ただい  
らいらした氣持<sup>きもち</sup>を繰返<sup>くりかえ</sup>していた中<sup>なか</sup>村<sup>むらし</sup>松<sup>しょう</sup>江<sup>こう</sup>は、ふと、格<sup>こう</sup>子<sup>し</sup>戸<sup>ど</sup>  
の外<sup>そと</sup>に人<sup>ひと</sup>の訪<sup>おとず</sup>れた氣配<sup>けはい</sup>を感じ<sup>かん</sup>て、じつと耳<sup>みみ</sup>を澄<sup>すま</sup>した。

「もし、今<sup>こん</sup>晩<sup>ばん</sup>は。——今<sup>こん</sup>晩<sup>ばん</sup>は」

（おお、やはりうちかいな）

そう、思<sup>おも</sup>った松<sup>しょう</sup>江<sup>こう</sup>は、次<sup>つぎ</sup>の座敷<sup>ざしき</sup>まで立<sup>た</sup>って行<sup>い</sup>って、弟<sup>で</sup>子<sup>し</sup>の  
いる裏<sup>うら</sup>二階<sup>かい</sup>へ声<sup>こえ</sup>をかけた。

「これ富江、松代、誰もいぬのか。お客さんがおいでなされたよ  
うじゃ」

が、先刻新七におこのの後を追わせた隙に、二人とも、どこ  
ぞ近所へまぎれて行ったのであろう。もう一度呼んで見た松  
江の耳には、容易に返事が戻っては来なかった。

「ええけつたいな、何んとしたのじゃ。お客さんじゃというのに。

――

口小言をいいながら、自ら格子戸のところまで立つて行つた  
松江は、わざと声音を変えて、低く訊ねた。

「どなた様でござります」

「わたしだ」

「へえ」

しろかべちよう

「白壁町の春信だよ」

はるのぶ

「えッ」

おじろ

驚きと、土間を駆け降りたのが、殆ど同時であつた。

ほとんどうじ

「お師匠さん

ししやう

さんでおましたか。これはまア。……」

がらりと開けた雨戸の外に、

あ あまど そと

提灯も持たずに、独り蒼白く

ちやうちん

も

ひと あおじろ

佇んだ春信の顔は暗かつた。

た たす はるのぶ かお くら

「面目次第もござりませぬ。

めんぼくしだい

——でもまア、ようおいで。——

——

「ふふふ。あんまりよくもなからうが、ちと、来ずには済まされ

き

す

ぬことがあつての」

「そこではお話も出来ませんで。……どうぞ、こちらへお通り下さりませ」

「しかし、わたしが上つても、いいのか」

「何を仰しやいます。狭苦しゅうはござりますが、御辛抱し

やはりまして。……」

「では遠慮なしに、通してもらいましょうか。……のう太夫」

座敷へ上つて、膝を折ると同時に、春信の眼は陰しく松

江を見詰めた。

「今更あらためて、こんなことを訊くのも野暮の沙汰だが、お

このさんといいなさるのは、確にお前さんの御内儀だらうのう」

「何んといやはります」

しようにう 松 江のおもてには、不安ふあんの色いろが濃こい影かげを描えがいた。

「深ふかいことはどうでもいいが、ただそれだけを訊きかしてもらいた

いと思おもつての。あれが太夫たゆうの御内儀ごないぎなら、わたしはこれから先さき、

お前まえさんと、二度どと顔かおを合あわせまいと、心こころに固かたく極きめて来きたのさ」

「えッ。ではやはり。……」

「太夫たゆう。つまらない面つらあてでいう訳わけじゃないが、お前まえさんは、い

いお上かみさんを持もちなすつて、仕合しあわせだの。——帯おびはたしかにわた

しの手てから、おせんのとこへ返かえそうから、少すこしも懸念けねんには、及およば

ねえわな」

「どうぞ堪かん忍にんしておくれやす」

「お前まえさんにあやまらせようと思おもつて、こんなにおそく、わざわ

ざひとりで出て来た訳じやアさらさらない。詫なんぞは無用にしておくんないさ

「なんで、これがお詫せいでおられましょう。愚なおこのが、いらぬことを仕出来しました心なさからお師匠さんに、このようないやな思ひをおさせ申しました。堺屋、穴があつたら這入りとうおます」

松江は、われとわが手で顔を掩つたまま、暫し身じろぎもしなかつた。

霜の来ぬ間に、早くも弱り果てた蟋蟀であろう。床下にあえぐ音が細々と聞かれた。

月つき

一

「――そら来た来きなんせ、土平どへいの飴あめじや。大人おとなも子供こどもも銭持ぜにつて  
 おいで。当時とうじ名代なだいの土平どへいの飴あめじや。味あじがよくつてでがあつて、お  
 まけに肌理きめが細こまこうて、笠かさ森もりおせんはの羽二重えはだ肌だを、紅べにで染そめた  
 ような綺麗きれいな飴あめじや。買かつて往ゆかんせ、食たべなんせ。天竺てんじく渡来とらい  
 の人参にんじん飴あめじや。何なんと皆みなの衆合しゅうが点てんか」

もはや陽ひが落ちて、空そらには月つきさえ懸かつていた。その夕月ゆうづきの光ひかり

の下<sup>した</sup>に、おのが淡<sup>あわ</sup>い影<sup>かげ</sup>を踏<sup>ふ</sup>みながら、言葉<sup>ことば</sup>のあやも面白<sup>おもしろ</sup>おかしく、舞<sup>ま</sup>いつ踊<sup>おど</sup>りつ来<sup>き</sup>懸<sup>か</sup>つたのは、この春<sup>はる</sup>頃<sup>ごろ</sup>から江戸中<sup>えどじゅう</sup>を、隈<sup>くま</sup>なく歩<sup>ある</sup>き廻<sup>まわ</sup>つてゐる飴<sup>あめ</sup>売<sup>うり</sup>土平<sup>どへい</sup>。まだ三十にはならないであろう。おどけてはゐるが、どこか犯<sup>おか</sup>し難<sup>がた</sup>いところのある顔<sup>かお</sup>かたちは、敵<sup>かたき</sup>も持<sup>も</sup>つ武家<sup>ぶけ</sup>が、世<sup>よ</sup>を忍<sup>しの</sup>んでの飴<sup>あめ</sup>売<sup>うり</sup>だとさえ噂<sup>うわさ</sup>されて、いやが上<sup>うえ</sup>に人<sup>にん</sup>氣<sup>き</sup>が高<sup>たか</sup>く、役<sup>やく</sup>者<sup>しや</sup>ならば菊<sup>きく</sup>之<sup>の</sup>丞<sup>じよう</sup>、茶屋女<sup>ちややおんな</sup>なら笠<sup>かさ</sup>森<sup>もり</sup>おせん、飴<sup>あめ</sup>屋<sup>や</sup>は土平<sup>どへい</sup>、絵<sup>え</sup>師<sup>し</sup>は春<sup>はる</sup>信<sup>のぶ</sup>と、当時<sup>とうじ</sup>切<sup>き</sup>つての評<sup>ひ</sup>判<sup>ょう</sup>者<sup>ばんもの</sup>だつた。

「わッ、土平<sup>どへい</sup>だ土平<sup>どへい</sup>だ」

「それ、みんな来<sup>こ</sup>い、みんな来<sup>こ</sup>いやアイ」

「お母<sup>つか</sup>ア、銭<sup>ぜに</sup>くんな」

「父、おいらにも錢ぜにくんな」

「あたいもだ」

「あたしもだ」

軒端のきばに立つ蚊柱かばしらのように、どこからともなく集あつまつて来た子こ供どもの群むれは、土平どへいの前後左右ぜんごさゆうをおツ取り巻まいて、買かうも買かわぬも一様ようにわツわツと囃はやしたてる賑にぎやかさ、長屋ながやの井戸端いどばたで、一心不しんふら乱らんに米こめを磨といでいたお上さん達たちまでが、手てを前まえかけで、拭ふきながら、ぞろぞろつながつて出てくる有様ありさまは、流石さすがに江戸えどは物見ものみ高たかいと、勤番者きんばんものの眼めの玉たまをひっくり返かえさずにはおかなかつた。

「——さア来きた来きた、こつちへおいで、高たかい安やすいの思案しあんは無用むよう。

思案するなら谷中へござれ。谷中よいとおせんの茶屋で、お茶  
 を飲<sup>の</sup>みましょ。煙草<sup>たばこ</sup>をふかそ。煙草<sup>たばこ</sup>ふかして煙<sup>けむ</sup>だして、煙<sup>けむ</sup>の中<sup>なか</sup>か  
 らおせんを見<sup>み</sup>れば、おせん可愛<sup>かあい</sup>や二九からぬ。色気程<sup>いろけほど</sup>よく靨<sup>えくぼ</sup>が霞<sup>かす</sup>  
 む。霞<sup>かす</sup>む靨<sup>えくぼ</sup>をちよいとつつ突<sup>つ</sup>いて、もしもしそなおせん様<sup>さま</sup>。お  
 はもじながらここともとは、そもじ思うて首<sup>くび</sup>ツたけ、鳥<sup>からす</sup>の鳴<sup>な</sup>かぬ日<sup>ひ</sup>  
 はあれど、そもじ見<sup>み</sup>ぬ日は寝<sup>ね</sup>も寝<sup>ね</sup>つかれぬ。雪駄<sup>せつた</sup>ちやらちやら横<sup>よ</sup>  
 眼<sup>こめ</sup>で見<sup>み</sup>れば、咲<sup>さ</sup>いた桜<sup>さくら</sup>か芙蓉<sup>ふよう</sup>の花<sup>はな</sup>か、さても見<sup>み</sup>事<sup>こと</sup>な富士<sup>ふじ</sup>びたえ。  
 ——さッさ買<sup>か</sup>いなよ買<sup>か</sup>わしやんせ。土平<sup>どへい</sup>自慢<sup>じまん</sup>の人<sup>にん</sup>参<sup>じん</sup>飴<sup>あめ</sup>じや。遠<sup>え</sup>  
 んりよ慮<sup>むよう</sup>は無用<sup>むよう</sup>じや。買<sup>か</sup>わしやんせ。買<sup>か</sup>つておせんに惚<sup>ほ</sup>れしやんせ」  
 手振<sup>てぶ</sup>りまでまじえての土平<sup>どへい</sup>の唄<sup>うた</sup>は、月<sup>つき</sup>の光<sup>ひかり</sup>が冴<sup>さ</sup>えるにつれて、  
 愈<sup>いよ</sup>益<sup>ます</sup>々<sup>ます</sup>面白<sup>おもしろ</sup>く、子供<sup>こども</sup>ばかりか、ぐるりと周<sup>しゅう</sup>圍<sup>うい</sup>に垣<sup>かき</sup>を作<sup>つく</sup>つた

おおかた 大方は、通りがかりの、大人の見物で一杯であつた。

「はッはッはッ。これが噂の高い土平だの。いやもう感心感心。」

心。この咽では、文字太夫も跣足だて」

「それはもう御隠居様。滅法名代の土平でござんす。これ程

のいい声は、鉦と太鼓で探しても、滅多にあるものではござんせ

ぬ」

「御隠居は、土平の声を、始めてお聞きなすつたのかい」

「左様」

「これはまた迂濶千万。飴売土平は、近頃江戸の名物でげ

すぜ」

「いや、噂はかねて聞いておつたが、眼で見たのは今が初めて。」

まことにはや。面目次第めんぼくしだいもござりませぬて」

「はははは。お前様まえさまは、おなじ名代なだいなら、やっぱりおせんの方ほうが、御贔屓ごひいきでげしよう」

「決して左様さような訳わけでは。……」

「お隠かくしなさいますな。それ、そのお顔かおに書いてある」

見物けんぶつの一人ひとりが、近くちかにいる隠居いんきよの顔かおを指さした時ときだった、誰だれ

かが突然とつぜん頓狂とんきような声こえを張り上げあげた。

「おせんが来きた。あすこへおせんが帰かえつて来きた」

「なに、おせんだと」

「どこへどこへ」

飴あめ売うり土平どへいの道化どうけた身振みぶりに、われを忘わすれて見入みいつていた人ひと達は、降ふつて湧わいたような「おせんが来きた」という声こえを聞きくと、一齊せいに首くびを東ひがしへ振ふり向むけた。

「どこだの」

「あすこだ。あの松まつの木きの下したへ来くる」

斜ななめにうねつた道角みちかどに、二抱ふたかかえもある大松おおまつの、その木きの下したをただ一人ひとり、次第しだいに冴さえた夕月ゆうづきの光ひかりを浴あびながら、野中のなかに咲さいた一本ほんの白菊しらぎくのように、静しずかに歩あゆみを運はこんで来くるほのかな姿すがた。それはまごう方かたない見世みせから帰かえりのおせんであつた。

「違えねえ。たしかにおせんだ」

「そら行け」

駆け出す途端に鼻緒が切れて、草履をさげたまま駆け出す小僧

や、石に躓いてもんどり打って倒れる職人。さては近所の

生臭坊主が、俗人そのけに目尻をさげて追いつがるていた

らく。所詮は男も女もなく、おせんに取っては迷惑千万に

違いなかうが、遠慮会釈はからりと棄てた厚かましきから

つるんだ犬を見に行くよりも、一層勢い立って、どつとばかりに

押し寄せた。

「いやだよ直さん、そんなに押しちやア転ンじまうよ」

「人の転ぶことなんぞ、遠慮してたまるもんかい。速く行つて

触<sup>さわ</sup>らねえことにや、おせんちゃん<sup>かえ</sup>は帰<sup>かえ</sup>ッちまわア」

「おツと退<sup>ど</sup>いた退<sup>ど</sup>いた。番太郎<sup>ばんたろう</sup>なんぞの<sup>み</sup>見るもんじゃねえ」

「馬鹿<sup>ばか</sup>にしなさんな。番太郎<sup>ばんたろう</sup>でも男<sup>おとこ</sup>一匹<sup>びき</sup>だ。綺麗<sup>きれい</sup>な姐<sup>ねえ</sup>さんは見<sup>み</sup>てえや」

「さア退<sup>ど</sup>いた、退<sup>ど</sup>いた」

「火事<sup>かじ</sup>だ火事<sup>かじ</sup>だ」

ひと<sup>ひと</sup>こ<sup>こ</sup>ころ<sup>ころ</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ころ</sup>の<sup>の</sup>人の心<sup>こころ</sup>が心<sup>こころ</sup>に乗<sup>の</sup>つて、愈<sup>い</sup>調<sup>よ</sup>子<sup>あ</sup>づいた<sup>うし</sup>のであろう。茶代<sup>ちやだい</sup>いら

ずの<sup>うえ</sup>その上<sup>うえ</sup>にどさくさまぎれの有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>さは、たとえ指<sup>ゆび</sup>先<sup>さき</sup>へでも

触<sup>さわ</sup>れ<sup>さわ</sup>ば触<sup>さわ</sup>り得<sup>とく</sup>と考<sup>かん</sup>えての悪<sup>いた</sup>戯<sup>ずら</sup>か。ここぞとばかり、息<sup>いき</sup>せき切<sup>き</sup>つ

て駆<sup>か</sup>け着<sup>つ</sup>けた群<sup>ぐん</sup>衆<sup>しゆう</sup>を苦<sup>く</sup>笑<sup>しょう</sup>の<sup>う</sup>ちに見<sup>み</sup>守<sup>も</sup>つていたのは、飴<sup>あめ</sup>餡<sup>う</sup>

売<sup>り</sup>の土<sup>ど</sup>平<sup>へい</sup>だつた。

「ふふふ。飴あめも買かわずに、おせん坊ぼうへ突つ走ばしつたな豪勢ごうせいだ。

こんな鉄鑄てつさびのような顔かおをしたおいらより、油壺あぶらつぼから出でたよ

なおせん坊ぼうの方が、どれだけいいか知しれねえからの。いやもう、

浮世うきよのことは、何なにをおおいても女おんなが大事だいじ。おいらも今度こんどの世よにやア、

犬いぬになつても女おんなに生うまれて来くることだ。——はツくしよい。これア

いけねえ。みんなが急きゆうに散ちつたせい、水みづツ洩ばながで出きて来きたぜ。風か

邪ぜでも引ひいちやアたまらねから、そろそろ帰かえるとしべえかの」

「おツと、飴屋あめやさん」

「はいはい、お前まえさんは、何なんであつちへ行いきなさらない」

「行いきたくねえからよ」

「行いきたくないとの」

「そうだ。おいらはこれでも、辱はじを知しつてゐるからの」

「面白おもしろい。人間にんげん、辱はじを知しつてゐたア何なによりだ」

「何なにより小こより御存ごぞんじよりか。なまじ辱はじを知しつてゐるばかりに、おいら出しゅっせ世でが出来できねえんだよ」

「お前まえさんは、何なにをしなさる御家業おかぎようだの」

「絵えかきだよ」

「名前なまえは」

「名前なまえなんざあるもんか」

「誰だれのお弟子でしだの」

「おいらはおいらの弟子でしよ。絵えかきに師匠ししやうや先生せんせいなんざ、足あ手てまといになるばツかりで、物ものの役やくにや立たたねえわな」

そういいながら、鼻はなの頭あたまを擦こすったのは、変かわり者ものの春重はるしげだった。

## 三

「おツとツとツと、おせんちゃん。何なんでそんなに急いそぎなさるんだ。みんながこれ程ほど騒さわいでるんだぜ。齧えくぼの一つも見みせてツてくんねえな」

「そうだそうだ。どんなに待まったか知しれやアしねえよ。おめえに急いそいで帰かえられたんじや、待まつてたかいがありやアしねえ」

それと知しつて、おせんを途とちゅう中に押おツ取とりかこんだ多勢おおぜいは、飴屋あめやの土平どへいがあつ氣けに取とられていることなんぞ、疾とうの昔むかしに忘わすれ

たように、我れ先にと、夕ぐれ時のあたりの暗さを幸いにして、鼻から先へ突出していた。

が、いつもなら、人にいわれるまでもなく、まずこつちから愛

嬌を見せるにきまっていたおせんが、きようは何んとしたの

であろう。齧を見せないのはまだしも、まるで別人のようにせ

かせかと、先を急いでの素気ない素振に、一同も流石におせん

前へ、大手をひろげる勇氣もないらしく、ただ口だけを達者に動かして、少しでも余計に引止めようと、あせるばかりであつた。

「もし、そこを退いておくんなさいな」

「どいたらおめえが帰ツちまうだろう。まアいいから、ここで遊

んで行きねえ」

「あたしや、先を急ぎます。きようは堪忍しておくんないよ」  
「先ツたつて、これから先ア、家へ帰るより道はあるめえ。それ  
ともどこぞへ、好きな人でも出来たのかい」

「なんでそんなことが。……」

「ねえンなら、よかろうじやねえか」

「でもお母さんが。——」

「お袋の顔なんざ、生れた時から見てるんだろう。もう大概、  
見あきてもよさそうなもんだぜ」

「そうだ、おせんちゃん。帰る時にや、みんなで送ってツてやろ  
うから、きよう一ン日の見世の話でも、聞かしてくんねえよ」  
「お見世のことなんぞ、何んにも話はござんせぬ。——どうか通

しておくんなさい」

「紙屋かみやの若旦那わかだんなの話はなしでも、名主なぬしさんのじやんこ息子むすこの話はなしでも、

いくらもあるうというもんじやねえか」

「知りませんよ。お母つかさんが風邪かぜを引ひいて、独りひとで寝ねててござんすから、ちつとも速はやく帰かえらないと、あたしや心配しんぱいでなりません

のさ」

「お袋ふくろさんが風邪かぜだツて」

「あい」

「そいつアいけねえ。何なんなら見舞みまいに行いつてやるよ」

「おいらも行いくぜ」

「わたしも行いく」

「いいえ、もうそんなことは。――」

少しも長く、おせんを引き止めておきたい人情が、互の口を益々軽くして、まるく囲んだ人垣は、容易に解けそうにもなかった。

すると突然、はッはッはと、腹の底から絞り出したような笑い声が、一同の耳許に湧き立った、

「はッはッは。みんな、みつともねえ真似をしねえで、速くおせんちゃんを、帰してやったらどんなもんだ」

「おめえは、春重だな」

「つまらねえ差し出口はきかねえで、引ッ込んだ、引ッ込んだ」

「ふふふ。おめえ達、あんまり気が利かな過ぎるぜ。おせんちゃ

んにや、おせんちゃんようの用があるんだ。野暮やぼな止めだてするより

も、一刻こくも速はやく歸かえしてやんねえ」

「馬鹿ばかアいわッし。そんなお接介せつかいは受けねえよ」

一同どうの視線しせんが、春重はるしげの上うえに集あつまっている暇ひまに、おせんは早はやく

も月つきの下影したかげに身みを隠かくした。

#### 四

「お母つかさん」

「おや、おせんかえ」

「あい」

猫ねこに追おわれた鼠ねずみのように、慌あわただしく駆かけ込こんで来きたおせんの声こえに、折おりから夕ゆう餉げの支した度を急いそいでいた母ははのお岸きしは、何なにやら胸むねに凶きよう事じを浮うかべて、勝かつ手の障しょう子じをがらりと明あけた。

「どうかおしかえ」

「いいえ」

「でもお前まえ、そんなに息いきせき切きつてさ」

「どうもしやアしませんけれど、いまそこで、筆屋ふでやさんの黒くろがじやれたもんだから。……」

「ほほほほ。黒くろが尾おを振ふつてじやれるのは、お前まえを慕したっているからだよ。あたしやまた、悪わるいいたずらでもされたかと思おもつて、びつくりしたじやアないか。何なにも食くいつくような黒くろじやなし、逃にげ

てなんぞ来ないでも、大丈夫金の脇差だわな。——こつちへおいで。頭あたまを撫なで付けてあげようから。……」

「おや、髪かみがそんなに。——」

母ははの方ほうへは行いかずに、四畳半じようはんのおのが居間いまへ這入はいったおせんは、直すぐさま鏡かがみの蓋ふたを外はずして、薄暮はくぼの中なかにじつとそのまま見入みいったが、二筋三筋襟すじ すじえりに乱みだれた鬢びんの毛けを、手早てばやく搔かき揚あげてしまふと、今度こんどはあらためて、あたりをぐるりと見廻みまわした。

「お母つかさん」

「あいよ」

「あたしの留守るすに、ここに誰だれか這入はいりやしなかつたかしら」

「おやまア滅相めつそうな。そこへは鼠ねずみ一匹ぴきも滅多めったに入るこつちやアな

いよ。——何んぞ変わつたことでもおありかえ」

「さア、ちつとばかり。……」

「どれ、何かの。——」

障子の隙間から、顔を半分窺かせた母親を、おせんはあわてて遮つた。

「氣にする程でもござんせぬ。あつちへ行つておくんなさい」

「ほんにまア、ここへは来るのじやなかつたツけ」

三日前の夜の四つ頃、浜町からの使いといつて、十六七の男の子が、駕籠に乗った女を送つて来たその晩以来、お岸はおせんの口から、観音様への願かけゆえ、向う三十日の間何事があつても、四畳半へは這入つておくんなさいますな。あた

しの留守るすにも、ここへ足あしを入れたが最後さいご、お母つかさんの眼めはつぶれ  
 ましよう、きつくいわれたそれからこつち、何なにが何なにやら分わからな  
 いままに、おせんたのの頼かたみを堅まもく守もつて、お岸きしは、鬼門きもんへ触さわるよう  
 に恐おそれていた座敷ざしきだったが、留守るすに誰だれかが這入はいつたと聞きいては、  
 流石さすがにあわてずにいられたかつたらしく、拵こしらえかけの蜷しじみ汁じる  
 を、七厘りんへ懸かけツ放ばなしにしたまま、片眼かためでいきなり窺のぞき込んだの  
 であらう。

部屋へやの中なかは、窓まどから差さすほのかな月つきの光ひかりで、漸ようく物もののけじめが  
 つきはするものの、ともすれば、入れ換かえたばかりの青あお 畳たたみの  
 上うへにさえ、暗くらい影かげが斜ななめに曳ひかれて、じつと見詰みつめている眼先めさきは、  
 海うみのように深ふかかった。

母は直ぐに勝手へ取つて返したと見えて、再び七厘の下を煽ぐ  
 洩団扇の音が乱れた。

暗い、何者もはつきり見えない部屋の中で、おせんはもう一  
 度、じつと鏡の中を見詰めた。底光のする鏡の中に、澄めば  
 澄む程ほのかになつてゆく、おのが顔が次第に淡く消えて、三日  
 月形の自慢の眉も、いつか糸のように細くうずもれて行つた。

「吉ちゃん。——」

ふと、鏡のおもてから眼を放したおせんの唇は、小さく綻びた。  
 と同時に、すり寄るように、体は戸棚の前へ近寄つた。

「済みません。ひとりぼっちで、こんなに待たせて。——」  
 そういいながら、おせんのふるえる手は襖の引手を押えた。

## 五

部屋へやの中なかは益ます々ます暗くらかつた。

その暗くらい部屋へやの片隅かたすみへ、今いましもおせんが、辺あたりに氣きを配くばりなが

ら、胸むね一杯ぱいに抱かかえ出したのは、つい三日みつかまえ前の夜よる、由齋ゆうさいの許もとか

ら駕籠かごに乗のせて届とどけてよこした、八百屋やお七の舞台姿ぶたいすがたをそのま

まの、瀬川菊之丞せがわきくのじようの生人形いきにんぎようであつた。

おせんは抱かかえた人形にんぎようを、東ひがしに向けて座敷ざしきのまん中なかに立たてる

と、薄月うすづきの光ひかりを、まともに受うけさせようがためであらう。音おとせ

ぬ程ほどに、窓まどの障子しょうじを徐しずかに開あけ始はじめた。

庭には虫の声もなく、遠くの空を渡る雁のおとずれがうつろの  
ように、耳に響いた。

「吉ちゃん。——いいえ、太夫、あたしや会いとうござんした」  
生きた相手にいう如く、如何にもなつかしうに、人形を  
仰いだおせん的眼には、情の露さえ仇に宿つて、思いなしか、声  
は一途にふるえていた。

「——朝から晩まで、いいえ、それよりも、一生涯、あたし  
や太夫と一緒にいとうござんすが、なんといいても、お前は今を  
時めく、江戸一番の女形。それに引き換えあたしやそこらに履き  
捨てた、切れた草鞋もおんなじような、水茶屋の茶汲み娘。百  
夜の路を通つたとて、お前に逢つて、昔話もかなうまい。そ

れゆえせめての心から、あたしがいつも夢に見るお前のお七を、  
 由齋さんに仕上げてもらつて、ここまで内緒で運んだ始末。  
 お前のお宅にくらべたら、物置小屋にも足りない住居でござんす  
 が、ここばかりは、邪間する者もない二人の世界。どうぞ辛  
 抱して、話相手になつておくんなさいまし、——あたしや、  
 王子で育つた十年前も、お見世へ通うきようこの頃も、心に毛  
 筋程の vari はござんせぬ。吉ちやんと、おせんちゃんとは夫婦  
 だと、ままごと遊びにからかわれた、あの春の日が忘れられず、  
 枕を濡らして泣き明かした夜も、一度や二度ではござんせんし。  
 おせんも年頃、好きなお客の一人くらいはあろうかと、折節  
 のお母さんの心配も、あたしの耳には上の空。火あぶりで死ん

だお七が羨ましいと、あたしやいつも、思い続けてまいりました。

——太夫、お前は、立派なお上さんのその外に、二つも寮をお持ち

ちの様子。引くてあまたの、御鼈肩筋もござんしようが、あたし

やこのままこがれ死んでも、やっぱりお前の女房でござんす」

思わず知らず、我れとわが袖を濡らした不覚の涙に、おせんは

「はッ」として首を上げたが、どうやら勝手許の母の耳へは這

入らなかつたものか、まだ抜け切らぬ風邪の咳が二つ三つ、続け

ざまに聞こえたばかりであつた。

しばしおせんは、俯向いたまま眼を閉じていた。その眼の底を、

稲妻のように、幼い日の思い出が突ツ走つた。

「おせんや」

母の聲が聞かれた。

「あい」

「この暗いのに、行燈もつけずに」

「あい。さして暗くはござんせぬ」

「何をしておいでだか知らないが、支度が出来たから御飯にしよ  
うわな」

「あい、いまじきに」

「暗い所に一人でいると、鼠に引かれるよ」

隣座敷では、母が燈芯をかき立てたのであろう。障子が

急に明るくなつて、膳立をする音が耳に近かつた。

よろめくように立上ったおせんは、窓の障子に手をかけた。

と、その刹那、低いしかも聞き慣れない声が、窓の下から浮き上った。

「おせん」

「えッ」

「驚くにや当らねえ。おいらだよ」

おせんは、火箸のように立ちすくんでしまった。

## 六

「ど、どなたでござんす」

「叱っ、静かにしねえ。怪しいものじゃねえよ。おいらだよ」

「あッ、お前は兄さん。――」

「ええもう、静かにしろというのに。お袋の耳へへえッたら、事が面倒になる」

そういうしながら、出窓の縁へ肘を懸けて、するりと体を持ちあげると、如何にも器用に履いた草履を右手で脱ぎながら、腰の三尺帯へはさんで、猫のように青畳の上へ降り立ったのは、三年前に家を出たまま、噂にさえ居所を知らせなかった兄の千吉だった。――藍微塵の素袷に算盤玉の三尺は、見るから堅気の着付ではなく、殊に取った頬冠りの手拭を、驚掴みにしたかたちには、憎いまでの落着があつた。

まったく夢想もしなかつた出来事に、おせんは、その場に腰を

据<sup>す</sup>えたまま、直<sup>す</sup>ぐには二の句<sup>く</sup>が次<sup>つ</sup>げなかつた。

「おせん。おめえ、いくつンなつた」

「十八でござんす」

「十八か。――」

千吉<sup>きち</sup>はそういつて苦<sup>く</sup>笑<sup>しょう</sup>するよう<sup>う</sup>に頷<sup>うな</sup>いたが、隣<sup>となり</sup>座<sup>ざ</sup>敷<sup>しき</sup>を氣<sup>き</sup>にしながら、更<sup>さら</sup>に声<sup>こゑ</sup>を低<sup>ひく</sup>めた。

「怖<sup>こわ</sup>がるこたアねえから、後<sup>あと</sup>ずさりをしねえで、んねえ。おいらア何<sup>なに</sup>も、久<sup>ひさ</sup>し振<sup>ふ</sup>りに会<sup>あ</sup>つた妹<sup>いもうと</sup>を、アいやアしねえ」

「あかりを、つけさせておくんなさい」

落<sup>おち</sup>着<sup>つつ</sup>いていてく  
取<sup>と</sup>つて食<sup>く</sup>おうた

「おつと、そんな事をされちやアたまらねえ。暗やみでもてえげえ見えるだろうが、おいらア堅かたぎ気の商人しょうにんで、四角かくい帯おびを、うしろで結むすんで来たき訳わけじゃねえんだ。面めん目ぼくねえが五ご一いち三さん分ぶん六ろくのやくぎ者ものだ。おめえやお袋ふくろに、会あわせる顔かおはねえンだが、ちつとばかり、人ひとに頼たのまれたことがあつて、義理ぎりに挟はさまれてやつて来たきのよ。おせん、済すまねえが、おいらの頼たのみを聞きいてくんねえ」

「そりやまた兄あにさん、どのようなことでござんす」

「どうのこうのと、話はなせば長ながえ訳わけあい合あいが、手てツ取とり早はやくいやア、おいらア金かねが入用いりようなんだ」

「お金かねとえ」

「そうだ」

「あたしや、お金<sup>かね</sup>なんぞ。……」

「まア待<sup>ま</sup>った。藪<sup>やぶ</sup>から棒<sup>ぼう</sup>に飛<sup>と</sup>び込<sup>こ</sup>んで来<sup>き</sup>た、おいらの口<sup>くち</sup>からこう  
 いったんじや、おめえがかぶりを振<sup>ふ</sup>るのももつともだが、こつち  
 もまんざら目<sup>もく</sup>算<sup>さん</sup>なしで、出<sup>で</sup>かけて来<sup>き</sup>たという訳<sup>わけ</sup>じやねえ。そこ  
 にやちつとばかり、見<sup>み</sup>かけた蔓<sup>つる</sup>があつてのことよ。——のうおせ  
 ん。おめえは通<sup>とお</sup>りあふらちよう油<sup>あぶら</sup>町の、橘<sup>たちばな</sup>屋<sup>や</sup>の若<sup>わ</sup>旦<sup>か</sup>那<sup>んな</sup>を知<sup>し</sup>つてるだ  
 ろう」

「なんとえ」

「徳<sup>とく</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>ろう</sup>という、始<sup>しま</sup>末<sup>まつ</sup>の良<sup>よ</sup>くねえ若<sup>わ</sup>旦<sup>か</sup>那<sup>んな</sup>だ」

「さア、知<sup>し</sup>つてるような、知<sup>し</sup>らないような。……」

「ここア別<sup>べつ</sup>に白<sup>しら</sup>洲<sup>す</sup>じやねえから、隠<sup>かく</sup>しだてにや及<sup>およ</sup>ばねえぜ。知<sup>し</sup>ら

ねえといったところが、どうでそれじゃア通らねえんだ。先アおめえに、家蔵売つてもいとわぬ程の、首ツたけだというじゃねえか」

「まア兄さん」

「恥かしがるにやア当らねえ。何もこつちから、血道を上げてるという訳じやなし、おめえに惚れてるな、向う様の勝手次第だ。——おせん。そこでおめえに相談だが、ひとつこつちでも、気のある風をしちやあくれめえか」

「えッ」

「おめえも十八だというじやアねえか。もうてえげえ、そのくれえの芸当は、出来ても辱にやアなるめえぜ」

千吉<sup>きち</sup>は、たじろぐおせんを見詰<sup>み</sup>めながら、四角<sup>かく</sup>く坐<sup>すわ</sup>つて詰<sup>つ</sup>め寄<sup>よ</sup>つた。

## 七

「もし、兄<sup>あに</sup>さん」

月<sup>つき</sup>は雲<sup>くも</sup>に覆<sup>おお</sup>われたのであろう。障子<sup>しょうじ</sup>を漏<sup>も</sup>れる光<sup>ひかり</sup>さえない部屋<sup>へや</sup>の中<sup>なか</sup>は、僅<sup>わず</sup>かに隣<sup>となり</sup>から差<sup>さ</sup>す行燈<sup>あんどん</sup>の方影<sup>かたかげ</sup>に、二人<sup>ふたり</sup>の半身<sup>はんしん</sup>を淡<sup>あわ</sup>く見<sup>み</sup>せているばかり、三年<sup>ねんぶ</sup>振りで向<sup>む</sup>き合<sup>あ</sup>つた兄<sup>あに</sup>の顔<sup>かお</sup>も、おせんははつきり見極<sup>みきわ</sup>めることが出来<sup>でき</sup>なかつた。

その方暗<sup>かたやみ</sup>の中に、おせんの声<sup>こえ</sup>は低<sup>ひ</sup>くふるえた。

「兄さん<sup>あに</sup>」

「え」

「帰<sup>かえ</sup>つておくんなさい」

「何<sup>な</sup>んだって。おいらに帰<sup>けえ</sup>れッて」

「あい」

「冗<sup>じようだん</sup>談 じゃねえ。用<sup>よう</sup>がありやこそ、わざわざやつて来<sup>き</sup>たんだ。

なんでこのまま帰<sup>けえ</sup>れるものか。そんなことよりおいらの頼<sup>たの</sup>みを、  
素直<sup>すなお</sup>にきいてもらおうじゃねえか。おめえさえ首<sup>くび</sup>を縦<sup>たて</sup>に振<sup>ふ</sup>つてく

れりやア、からきし訳<sup>わけ</sup>はねえことなんだ。のうおせん。赤<sup>あか</sup>の他人<sup>たにん</sup>

でさえ、事<sup>こと</sup>を分<sup>わ</sup>けて、かくかくの次第<sup>しだい</sup>と頼<sup>たの</sup>まれりや、いやとばか

りやアいえなからう。おいらアおめえの兄貴<sup>あにき</sup>だよ。――血<sup>ち</sup>を分<sup>わ</sup>け

た、たつた一人の兄貴だよ。それも、百とまとまった金が入用だという訳じゃねえ。四半分の二十五両で事が済むんだ」

「二十五両。——」

「みつともねえ。驚く程の高でもあるめえ」

「でも、そんなお金は。……」

「だからよ。初手からいつてる通り、おめえやお袋の臍くりから、引つ張り出そうたアいやアしねえや。狙いをつけたなあ若旦那」

「な、橘屋の徳太郎というでくの棒よ。ふふふふ。何んの」

「雑作もありアしねえ。おめえがここでたつた一言。おなつかし」

「ゆうござんす、とかなんとかいつてくれさえすりア、おいらの頼みア聴いてもらえようツてんだ。お釈迦が甘茶で眼病を直すよ」

り、もつとわけねえ仕事しごとじゃねえか」

「それでもあたしや。心こころにもないことをいつて。……」

「そ、その料簡りようけんがいけねえんだ。腹はらにあらうがなからうが、武士ぶしは戦略せんりやく、坊主ぼうずは方便ほうべん、時ときと場合ばあいじや、人ひとの寝首ねくびをかく

ことさえあらうじやねえか。——さ、ここに筆ふでと紙かみがある。いろ

はのいの字じとろの字じを書いて、いろよい返事へんじをしてやんねえ」

千吉きちがふところから取出とりだしたのは、巻紙まきがみと矢立やたてであつた。

おせんは、あわてて手てを引ひツ込こめた。

「堪忍かんにんしておくんない」

「何もあやまるこたアありやアしねえ。暗くらくツて書かけねえという

ンなら、仕方しかたがねえ。行燈あんどんをつけてやる」

「もし。――」

今度はおせんが、千吉きちの手をおさえた。

「何をなにするんだ」

「あたしや、どうでもいやでござんす」

「そんならこれ程ほどまでに、頭あたまをさげて頼たのんでもか」

「外ほかのことは訳わけが違ちがい、あたしや数かずあるお客きやくのうちでも、いの

一番ばんに嫌きらいなお人ひと、たとえ嘘うそでも冗じようだん談だんでも、氣きの済すまないこ

とはいやでござんす」

「おせん。おめえ、兄貴あにきを見殺みころしにするつもりか」

「何なんてえ」

「おめえがいやだとかぶりを振ふりやア、おいらは人ひとから預あずかった、

大事な金だいじかねを落おとしたかどで、いやでも明日あしたは棒縛ぼうしばりだ。——そ  
いつもよかろう。おめえはかげで笑わらつていねえ」

「兄あにさん」

「もう何なんにも頼たのまねえ。これから帰けえつて縛しばられようよ」

千吉きちは、わざとやけに立たち上あがつて窓辺まどべへつかつかと歩あゆみ寄よつた。

突然とつぜん隣座敷となりざしきから、お岸きしのすすり泣なく声こえが、障子しょうじ越こしに聞きこ

えて来きた。

文ふみ

## 一

「若旦那わかだんな、もし、油町あぶらちようの若旦那わかだんな」

「おお、お前は千吉まえきちつあん」

「そんなに急いそいで、どこへおいでなせえやす」

「お前まえのとこさ」

「何、あつしんとこでげすツて。——あつしんとこなんぎ、若わかだ

旦那んなにおいでを願ねがうような、そんな氣きの利きいた住居すまいじゃござん

せん。火口箱ほくちばこみてえな、ちっぽけな棟割むねわり長屋ながやなんで。……」

「小ちいさかろうが、大おおきかろうが、そんなことは考かんえちやいられな

いよ」

「何<sup>な</sup>んと仰<sup>おつ</sup>しやいます」

「あたしやお前<sup>まえ</sup>に頼<sup>たの</sup>んだ返<sup>へん</sup>事を、聞<sup>き</sup>かせてもらいに、往<sup>ゆ</sup>くところ  
じやないか」

「はッはッは。それでわざわざお運<sup>はこ</sup>び下<sup>くだ</sup>さろうッてんでげすか。  
これあどうも恐<sup>おそ</sup>れいりやした。そのことなら、どうかもう御<sup>ご</sup>心<sup>しん</sup>  
配<sup>い</sup>は、御無<sup>ごむ</sup>用<sup>よう</sup>になすつておくんなさいまし」

「おお、そんなら千<sup>ち</sup>吉<sup>きち</sup>さん、おせんの返<sup>へん</sup>事を。――」

「憚<sup>はば</sup>りながら、いったんお引<sup>ひ</sup>受<sup>きう</sup>け申<sup>もう</sup>しやした 正<sup>しょう</sup>直<sup>じき</sup> 千<sup>ち</sup>吉<sup>きち</sup>、お約<sup>や</sup>  
束<sup>くそく</sup>を違<sup>たが</sup>えるようなこたアいたしやせん」

「済<sup>す</sup>まない。あたしはそうとは思<sup>おも</sup>つていたものの、これがやつぱ  
り恋<sup>こい</sup>心<sup>ごころ</sup>か。ちつとも速<sup>はや</sup>く返<sup>へん</sup>事<sup>じ</sup>が聞<sup>き</sup>き度<sup>た</sup>くて、帳<sup>ちやう</sup>場<sup>うば</sup>格<sup>こう</sup>子<sup>し</sup>と二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>

の間を、九十九度も通つた挙句、とうとう辛抱が出来なくなつたばかりに、ここまで出向いて来た始末さ。そうと極つたら、どうか直ぐに色よい返事を聞かせておくれ」

「ま、ま、待つておくんせえやし。そんなにお急ンならねえでも、おせんの返事は、直ぐさまお聞かせ申しやすが、ここは道端、誰に見られねえとも限りやせん。筋の通つたい所で、ゆつくりお目にかけてようじやござんせんか」

「そりやもう、いずれおまんまでも食べながら、ゆつくり見せてもらおうが、まず文の上書だけでも、ここでちよいと、のぞかせておくれでないか」

「御安心くださいまし。上書なんぎ二の次三の次、中味から

封じ目まで、おせんの手てに相違そういはございません。あいつア七八つ  
 の時分じぶんから、手習てならいツ子の仲間なかまでも、一といつて二と下つたこと  
 のねえ手筋てすじ自慢じまん。あつしやア質屋しちやの質しちの字じと、万金丹まんきんたんの丹たんの字じ  
 だけしきや書かけやせんが、おせんは若旦那わかだんなのお名前なまえまで、ちや  
 アんと四角かくい字じで書かけようという、水茶屋女みずぢややおんなにや惜おしいくら  
 いの立派りっぱな手書てがき。——この通りとお、あつしがふところに預あずかつて  
 おりやすから、どうか親船おやぶねに乗のつた氣きで、おいでなすつておく  
 んなせえやし」

「安心あんしんはしているけれど、ちつとも速はやく見みたいのが人情にんじようじ  
 やないか。野暮やぼをいわずに、ちよいとでいいから、ここでお見みせ  
 よ」

「堪忍かんにんしておくんない。道みちツ端ぱたではお目めにかけねえようにと、こいつ妹いもうとからの、堅かたい頼たのみでござんすので。……」

「はてまア、何なんという野暮やぼだろうのう」

「どうか察さつしておやんなすつて。おせんにして見みりや、自分じぶんから文ふみを書かいたな始はじめての、いわば初はつこい恋こいとでも申もうしやしようか。はずかしい上うえにもはずかしいのが人にんじよう情じようでげしよう。道みちツ端ぱたで展ひろげたところを、ひよつと誰だれかに見みられた日ひにやア、それこそ若旦わかだん那な、氣きの弱よわいおせんは、どんなことになるか、知しれたもんじゃござんせん。野暮やぼは承知しょうちの上うえでござんす。どうか、ここンところをお察さつしなすつて……」

谷中やなかから上野うえのへ抜ぬける、寛永寺かんえいじの土塀どべいに沿そつた一筋道すじみち、光

うりん 琳の絵のような桜の若葉が、道に敷かれたまん中に佇んだ、若

かだんな とくたろう

旦那

徳太郎とおせんあにの兄きちの千吉とは、折おりからの夕陽ゆうひを浴あびて、

いろ

色よい返事へんじを認したためたおせんふみの文みを、見みせる見みせないのいさかいに、

こころ みだ

しばし心を乱みだしていたが、この上うへの争あらそいは無駄むだと察さつしたのである

う。やがて徳太郎とくたろうは細ほそい首くびをすくめた。

「あたしや気きが短みじいから、どこへ行ゆくにしても、とても歩あるいちゃ

行いかれない。千吉きちつあん、直すぐに駕籠かごを呼よんでもらおうじやない

か」

「合が点ってんでげす」

千吉きちは二ふたつ返事へんじで頷うなずいた。

## 二

徳太郎とくたろうと千吉きちとが、不忍池畔しのばずちはんの春草亭しゅんそうていに駕籠かごを停とめたのは、それから間まもない後あとだった。

徳太郎とくたろうは女中じよちゆうの案内あんないも待またず、駆け込かこむように千吉きちの手てをとつて、奥おくの座敷ざしきへ連れ込こんだ。

「さ、千吉きちさん」

「へえ」

「早くはやお見みせ」

「何なにをでござんす」

「おや、何なにはあるまい。おせんのふみじやないか」

「おそうだ。これはすっかり忘れて居りやした」

「お前は道端じや見せられないというから、わざわざ駕籠を急がせて、ここまで来たんだよ。さ大事な文を、少しでも速く見せてもらいましょう」

「お見せいたしやす」

「口ばかりでなく、速くお出しツたら」

「出しやす。――が、ちよいとお待ちなすつておくんなさい。その前に、あつしやア若旦那に、ひとつお願い申してえことがござんすので。……」

「何んだえ、あらたまつて。――」

「実アその、おせんの奴から。……」

「なに、おせんから、あたしに頼みとの」

「へえ」

「そんならなぜ、もつと早くいわないのさ」

「申もうしあ上げたいのは山やま々でござんすが、ちと厚あつかましい筋すじだも

んでげすから、ついその、あつしの口くちからも、申もうしあ上げにくかつ

たような訳わけでげして」

「馬鹿ばかな。つまらない遠慮えんりよなんか、水臭みずくさいじゃないか。そん

な遠慮えんりよはいらないから、いっとくれ。あたしでかなうことなら、

どんな願ねがいでも、きつと聞きいてあげようから。……」

「そりやどうも。おせんに聞きかしてやりましたら、どれ程喜ほよろこぶか

知しれやアしません。——ところで若旦那わかだんな」

「なにさ」

「そのお願いと申しますのは」

「その頼みとは」

「お金を。――」

「何んのことかと思つたら、お金かい。憚りながら、あたしア江戸でも人様に知られた、橘屋の徳太郎、おせんの頼みとあれば、決していやとはいわないから、かまわずにいつて御覧。たとえどれ程の大金でも、あれのためなら、首は横にや振らないつもりだよ」

「へえへえ、どうも恐れいりやした。いやもう、おせん、おめえよく捕つたぞ。これ程の鼠たア、まさか思つちや。……」

「これ千吉きちつあん、何をなにおいしいだ。あたしのことを鼠ねずみとは。……」  
 「ど、どういたしやして、鼠ねずみなんぞた申しもうしやしません。若旦那わかだんなにはこれからも、鼠ねずみのように、チウ義ぎをおつくし申せもうと、こう申したのでございます」

「お前は口が上手まへくちじょうずだから。……」

「口くちはからきし下手へたの皮かわ、人様ひとさまの前まへへ出たら、ろくにおしやべりも出来る男できおとこじやござんせんが、若旦那わかだんなだけは、どうやら赤あかの他人たにんとは思われず、ついへらへらとお喋りしゃべりもいたしやす。——ねえ若旦那わかだんな。どうかおせんに、二十五両りようだけ、貸かしてやっておくんなせえやし」

「何なに、二十五両りよう。——」

「江戸で名代の橘屋の若旦那。二十五両は、ほんのお小遣じゃござんせんか」

千吉はそういういながら、ふところ深くひそませた、おせんのふみを取りだした。

ありがたく存じ候かしこ

せん　より

若旦那さま

ふみのおもては、ただこれだけだった。

朝あさつばらの柳湯やなぎゆは、町ちやうない内のわか若い者と、楊枝ようじけず削りの御家ごけ  
 人と道楽者あさがえの朝歸りあさがえとが、威勢いせいのよしあしを取とりまぜて、柘ざくろ  
ぐち榴口うちの内と外そととにとぐろを巻まいたひと時のとき、辱はじも外聞がいぶんもない、  
てぬぐい手拭ぽん一本の裸絵巻はだかえまきを展ひろげていたが、こんな場合ばあい、誰だれの口から  
おなも同じように吐はかれるのは、何吉なにきちがどこの賭場とばで勝かつたとか、  
 どこそこのお何なにが、近頃ちかごろ誰だれにのぼせているとか、さもなければ  
しばい芝居うわさの噂よしわら、吉原できごとの出来事かんのんさま、観音ちややおんな様の茶屋女みの身の上うえなど、  
 おそらく口くちを開ひらけば、一様ようにおのれの物知ものしりを、少しすこも速はやく人ひとに  
き聞きかせたいとの自慢じまんからであらう。玉たまのような汗あせを額ひたいにためなが  
 ら、いずれもいい気持きもちでしゃべり続つづける面白おもしろさ。中なかには、顔かおさ  
あらえ洗あらやもう用ようはねえと、流ながしのまん中なかに頑張がんばつて、四斗樽とだるのよう

な<sup>からだ</sup>体を、あつちへ<sup>ま</sup>曲げ、こつちへ<sup>のぼ</sup>伸して、隣<sup>となり</sup>近<sup>きん</sup>所<sup>じよ</sup>へ<sup>あわ</sup>泡を<sup>と</sup>飛ばす暇<sup>ひま</sup>な<sup>いん</sup>隠<sup>きよ</sup>居<sup>よ</sup>や、膏<sup>こう</sup>藥<sup>やく</sup>だらけの<sup>せ</sup>背<sup>な</sup>中<sup>な</sup>を<sup>み</sup>見せて、弘<sup>こう</sup>法<sup>ぽう</sup>灸<sup>きゅう</sup>の<sup>こ</sup>効<sup>こ</sup>能<sup>うのう</sup>を、相<sup>あ</sup>手<sup>いて</sup>構<sup>かま</sup>わず吹<sup>ふ</sup>き散<sup>ちら</sup>す半<sup>はん</sup>病<sup>び</sup>人<sup>にん</sup>もある有<sup>あり</sup>様<sup>さま</sup>。湯<sup>ゆ</sup>屋<sup>や</sup>は朝<sup>あさ</sup>

から寄<sup>より</sup>合<sup>あい</sup>所<sup>しよ</sup>の<sup>にぎ</sup>よう<sup>ぎ</sup>に賑<sup>にぎ</sup>わいを<sup>み</sup>見せていた。

「長<sup>ちよう</sup>兄<sup>あに</sup>イ。聞<sup>き</sup>いたか」

「何<sup>なに</sup>を」

「何<sup>なに</sup>を<sup>き</sup>じゃねえ、千<sup>ち</sup>吉<sup>きち</sup>がしこたま<sup>もう</sup>儲<sup>も</sup>けた<sup>はなし</sup>ツて話<sup>はなし</sup>をよ」

「うん<sup>うん</sup>にや。聞<sup>き</sup>かねえよ」

「迂<sup>う</sup>濶<sup>かつ</sup>だな」

「だつておめえ、知<sup>し</sup>らねえもなア<sup>しかた</sup>仕<sup>し</sup>方<sup>かた</sup>がねえや。——いつてえ、

あ<sup>なま</sup>の怠<sup>なま</sup>け者<sup>もの</sup>が、どこでそ<sup>もう</sup>んなに儲<sup>も</sup>けや<sup>う</sup>が<sup>う</sup>つた<sup>う</sup>たんだ」

「どこツたつておめえ、そいつが、てえそうないかさまなんだぜ」

「ふうん、奴やつにそんな器用きようなことが出来るのかい」

「相手あいてがいいんだ」

「椋鳥むくどりか」

「ちやきちやきの江戸えどっ子こよ」

「はアてな、江戸えどっ子こが、奴やつのいかさまに引ひツかかるたアおかし

いじやねえか」

「いかさまツたつて、おめえ、丁ちようはん半はんじやねえぜ」

「ほう、さいころじやねえのかい」

「女おんなが餌えさだ」

「女おんな——」

「相手あいてを釣つつて儲もうけたのよ」

「そいつなア尚おさら更はつ初み耳みだ。——その相手あいてツてな、どこの誰だれよ」

「油あぶら町ちようの紙問屋かみどんや、橘たちばな屋やの若旦那わかだんなだ」

「ほう、そいつなアおもしれえ」

「あれだ。おもしれえは氣きの毒どくだぜ。千吉きちは妹いもうとのおせんを餌えさにし

て、若旦那わかだんなから、二十五両りようという大金たいきんをせしめやがつたんだ」

「なに二十五両りようだつて」

「どうだ。てえしたもんだろう」

「冗じよう談だんじゃねえ。二十五両りようといやア、小判こばんが二十五枚まいだぜ。

こいつが二両りようとか、二両二分りようぶとかいうンなら、まだしも話はなしの筋すじが

通とおるが、二十五両りようは飛とんでもねえ。あいつの首くびを引換ひきかえにしたつ

て、借りられる金じやアねえぜ。冗談も休み休みいつてくん

ねえ」

「ふん、知らねえツてもなアおツかねえや。おいらア現にたつた今、この二つの眼で、睨んで来たばかりなんだ。山吹色で二十五枚、滅多に見られるかさじやアねえて」

「ふふふふ、金の字。その話をもうちつと委しく聞かせねえか」  
 そういいながら、柘榴口から、にゅツと首を出したのは、絵師の春重だった。

「春重さん、お前さんいたのかい」

「いたから顔を出したんだがの。大分話が面白そうじゃねえか」  
 春重は、もう一度ニヤリと笑った。

## 四

「ふふふ、金の字、なんで急に唾のように黙り込んじやつたんだ。話して聞かせねえな。どうせおめえの腹が痛む訳でもあるめえしよ」

柘榴口から流しへ出て来た春重の様子には、いつも通りの、妙な粘りツ気が絡みついていて、傘屋の金蔵の心持を、ぞツとする程暗くさせずにはおかなかった。

「てえした面白え話でもねえからよ」

「なに面白くねえことがあるもんか。二十五両といやア、おい

らのような貧乏人は、まごまごすると、生<sup>しょう</sup>涯<sup>がい</sup> お目<sup>め</sup>にやぶら  
 下<sup>さ</sup>がれない大金<sup>たいきん</sup>だぜ。そいつをいかさまだかさまだかにつ  
 るさげて、物<sup>もの</sup>にしたと聞<sup>き</sup>いちゃア、志道軒<sup>しどうけん</sup>の講<sup>こう</sup>釈<sup>しやく</sup>じゃねえ  
 が、嘘<sup>うそ</sup>にも先<sup>さき</sup>を聞<sup>き</sup>かねえじやいらねえからの。――相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>が橘<sup>たちばな</sup>  
 屋<sup>なや</sup>の若旦那<sup>わかだんな</sup>だつたてえな、ほんまかい」

「おめえさん、それを聞<sup>き</sup>いてどうしようツてんだ」  
 顔<sup>かお</sup>をしかめて、春重<sup>はるしげ</sup>を見守<sup>みまも</sup>つたのは、金蔵<sup>きんぞう</sup>に兄<sup>あに</sup>イと呼ば<sup>よ</sup>れ  
 た左官<sup>さかん</sup>の長<sup>ちよう</sup>吉<sup>きち</sup>であつた。

「どうもしやアしねえがの。そいつがほんまなら、おいらもちつ  
 とばかり、若旦那<sup>わかだんな</sup>に借<sup>か</sup>りてえと思<sup>おも</sup>つてよ」

「若旦那<sup>わかだんな</sup>に借<sup>か</sup>りるツて」

「まずのう。だが安心しなよ。おいらの借りようツてな、二十  
 五両の三十両のという、大それた訳のもんじやねえ。ほんの二分  
 か一両が関の山だ。それも種や仕かけで取るようないちなこたア  
 しやアしねえ。真証間違いなしの、立派な品物を持つてつ  
 て、若旦那の喜ぶ顔を見ながら、拝借に及ぼうツてんだ」  
 「そいつア駄目だ」

「なんだつて」

「駄目ツてことよ。橘屋の若旦那は、たとえお大名か  
 ら拝領の鎧兜を持つてツたつて、金ア貸しちやアくれめ  
 えよ。——あの人の欲しい物ア、日本中にたつたひとつ、笠  
 森おせんなさけの情より外ほかにや、ありやアしねツてこつた」

「だから、そのおせんの、身みから分わけた物ものを、おいらア買かつてもらいに行いこうツてえのよ」

「身みから分わけた物もの。――」

「そうだ。他ほかの者ものが望のぞんだら、百両りやうでも譲ゆずれる品しなじゃねえんだが、相手あいてがおせんに首くびツたけの若旦那わかだんなだから、まず一両りやうがとこで辛し抱おぼしてやろうと思おもつてゐるんだ」

「春重はるしげさん。またお前まえ、つまらねえ細工物さいくものでもこしらえたんだな」

「冗談じやうだんじゃねえ、こしらえたもんなんぞた、天てんから訳わけが違ちがうンだぜ」

「訳わけが違ちがうツたつて、そんな物ものがざらにあらうはずもなからうじ

やねえか」

「ところが、あるんだから面白えや」  
おもしろ

「そいつアいつてえ、なんだつてんだい」

「爪つめよ」

「え」

「爪つめだつてことよ」

「爪つめ」

「その通りだ。おせんの身みについてた、嘘うそ偽いつわりのねえ生なま爪づめ

なんだ」

「馬ば、馬鹿ばかにしちやアいけねえ。いくらおせんの物ものだからツて、

爪つめなんざ、何なんの役やくにもたちやアしねえや。かつぐのもいい加減かげん

にしてくんねえ」

「ふん、物の値打もの ねうちのわからねえ奴やつにやかなわねえの。女の身体おんな からだに

ついてるもんで、年ねんが年ねん中じゅう、休みやすなしに伸びのてるもなア、髪かみ

の毛けと爪つめだけだぜ。そのうちでも爪つめの方は、三日見みつなけりや目立めだ

って伸びのる代物しろものだ。——指ゆびの数かずで三百本ほん、糠ぬか袋かぶくろに入いれてぎ

つと半分はんぶんよ。この混まじりツけのねえおせんおせんの爪つめが、たつた小判こばん

一枚まいだとなりや、若旦わかだんな那ねが猫ねこのように飛とびつくなア、磨とぎたて

の鏡かがみでおのが面つらを見るみより、はつきりしてるぜ」

春重はるしげのまわりには、いつか、ぐるりと裸はだかの人垣ひとがきが出来できてい

た。

## 五

「千の字。おめえ、いい腕うでンなつたの」

「ふふふ」

「笑わらいごつちやねえぜ。二十五両りようたア、大束おおたばに儲もうけたじやねえか」

「どこで、そいつを聞きいた」

「壁かべに耳みみありよ。さつき、通とおりがかりに飛とび込こんだ神田かんだの湯屋ゆやで、傘屋かさやの金藏きんぞうとかいう奴やつが、てめえのここのように、自慢じまんらしく、みんなに話はなして聞きかせてたんだ」

「あいつ、もうそんな余計よけいなことを喋しゃべりやがったかい」

「喋<sup>しゃべ</sup>ったの、喋<sup>しゃべ</sup>らねえの段<sup>だん</sup>じゃねえや。紙<sup>かみ</sup>屋<sup>や</sup>の若<sup>わ</sup>旦<sup>かだん</sup>那<sup>な</sup>をまるめ

込<sup>こ</sup>んで。――」

下<sup>しも</sup>総<sup>ふさむさし</sup>武<sup>く</sup>蔵<sup>にざかい</sup>の国<sup>くに</sup>境<sup>さかい</sup>だという、両<sup>りよう</sup>国<sup>こく</sup>橋<sup>ばし</sup>のまん中<sup>なか</sup>で、ぼん

やり橋<sup>はし</sup>桁<sup>げた</sup>にもたれたまま、薄<sup>うす</sup>汚<sup>ぎた</sup>い婆<sup>ばあ</sup>さんが一<sup>ひ</sup>匹<sup>き</sup>五<sup>もん</sup>文<sup>もん</sup>で売<sup>う</sup>つ

ている、放<sup>はな</sup>し亀<sup>かめ</sup>の首<sup>くび</sup>の動<sup>うご</sup>きを見<sup>み</sup>詰<sup>つ</sup>めていた千<sup>ち</sup>吉<sup>きち</sup>は、通<sup>とお</sup>りがかりの

細<sup>ほ</sup>川<sup>そかわ</sup>の厩<sup>うま</sup>中<sup>ま</sup>間<sup>ま</sup>竹<sup>たけ</sup>五<sup>ろう</sup>郎<sup>ろう</sup>に、ぽんと背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>をたたかれて、立<sup>た</sup>

続<sup>つづ</sup>けに聞<sup>き</sup>かされたのが、柳<sup>やなぎ</sup>湯<sup>ゆ</sup>で、金<sup>きん</sup>蔵<sup>ぞう</sup>がしやべったという、

橘<sup>たちばな</sup>屋<sup>や</sup>の一件<sup>けん</sup>であつた。

が、もう一<sup>ひと</sup>度<sup>たび</sup>竹<sup>たけ</sup>五<sup>ろう</sup>郎<sup>ろう</sup>が、鼻<sup>はな</sup>の頭<sup>あたま</sup>を引<sup>ひ</sup>ッこすつて、ニヤリと笑<sup>わら</sup>つ

たその刹<sup>せつ</sup>那<sup>な</sup>、向<sup>む</sup>うから来<sup>き</sup>かかつた、八<sup>ち</sup>丁<sup>よう</sup>堀<sup>ぼり</sup>の与<sup>より</sup>力<sup>き</sup>井<sup>い</sup>上<sup>うえ</sup>藤<sup>とう</sup>

吉<sup>ち</sup>の用<sup>よう</sup>を聞<sup>き</sup>いている鬼<sup>おに</sup>七<sup>しち</sup>を認<sup>み</sup>めた千<sup>ち</sup>吉<sup>きち</sup>は、素<sup>す</sup>速<sup>はや</sup>く相<sup>あい</sup>手<sup>て</sup>を眼<sup>め</sup>で制<sup>せい</sup>

した。

「叱ッ。いけねえ。行っちめえねえ」

「合点だ」

するりと抜けるようにして、竹五郎が行ってしまふと、はやくも鬼七は、千吉の眼の前に迫っていた。

「千吉。おめえ、こんなところで、何をうろうろしてるんだ」

「へえ。きようは親父の、墓詣りにめえりやした。その帰りがけでござんして。……」

「墓詣り」

「へえ」

「いつツから、そんな心がけになつたんだ」

「どうか御勘弁を」

「勘弁かんべんはいいが、——丁度ちやうどいい所ところでおめえに遭あつた。ちつと

ばかり訊ききてえことがあるから、つきあつてくんねえ」

「へえ」

「びくびくすることアありやしねえ。こいつあこつちから頼たのむんだから、安心あんしんしてついて来きねえ」

鬼七おにと呼ばれてはいるが、名前なまえとはまったく違ちがつた、すつきり

とした男おとこ前まえの、結ゆいたての鬚まげを川風かわかぜに吹ふかせた格好かっこうは、

如何いかにも颯爽さつそうとしていた。

折柄おりからの上潮あげしおに、漫々まんまんたる秋あきの水みづをたたえた隅田川すみだがわは、

眼めのゆく限かぎり、遠とおく筑波山つくばやまの麓ふもとまで続つづくかと思おもわれるまでに澄す

渡<sup>みわた</sup>つて、綾瀬<sup>あやせ</sup>から千住<sup>しじゅ</sup>を指<sup>さ</sup>して迦<sup>さ</sup>のぼまほ<sup>かたほ</sup>方帆<sup>かたほ</sup>が、黙々<sup>もくもく</sup>と千鳥<sup>ちどり</sup>のように川幅<sup>かわはば</sup>を縫<sup>ぬ</sup>つていた。

その絵巻<sup>えまき</sup>を展<sup>ひろ</sup>げた川筋<sup>かわすじ</sup>の景色<sup>けしき</sup>を、見<sup>み</sup>るともなく横目<sup>よこめ</sup>で見<sup>み</sup>ながら、千吉<sup>きち</sup>と鬼七<sup>おに</sup>は肩<sup>かた</sup>をならべて、静<sup>しず</sup>かに橋<sup>はし</sup>の上<sup>うへ</sup>を浅草御門<sup>あさくさごもん</sup>の方<sup>ほう</sup>へと歩<sup>あゆ</sup>みを運<sup>はこ</sup>んだ。

「千吉<sup>きち</sup>、おめえ、おせんのところへは出<sup>で</sup>かけたろうの」

「どういたしやして。妹<sup>いもうと</sup>にや、三年<sup>ねん</sup>この方<sup>かた</sup>、てんで会<sup>あ</sup>やアいたしません」

「ふふふ。つまらねえ隠<sup>かく</sup>し立<sup>た</sup>ては止<sup>や</sup>めねえか。いまもいつた通<sup>とお</sup>り、おい<sup>あ</sup>らアおめえを、洗<sup>あら</sup>い立<sup>た</sup>てるツてんじやねえ。こつちの用<sup>よう</sup>で訊<sup>き</sup>きてえことがあるんだ。悪<sup>わる</sup>いようにやしねえから、はつきり聞<sup>き</sup>か

してくんねえ」

「どんな御用で。……」

「おせんのとこへ、菊之丞が毎晩通うツて噂を聞き込んだんだが、そいつをおめえは知ってるだろうの」

こう訊きながら、鬼七の眼は異様に光った。

## 六

鬼七の問は、まったく千吉には思いがけないことであつた。――子供の時分から好きでこそあれ、嫌いではない菊之丞を、おせんがどれ程思い詰めているかは、いわずと知れているものの、

今では江戸一番の女形といわれている菊之丞が、自分からおせ  
 んの許へ、それも毎晩通つて来ようなどとは、どこから出た噂  
 であろう。岡焼半分の悪刷にしても、あんまり話が食い違  
 い過ぎると、千吉は思わず鬼七の顔を見返した。

「何んで、そんな不審そうな顔をするんだ」

「何んでと仰しやいますが、あんまり親方のお聞きなさること  
 が、解せねえもんでござんすから。……」

「おいらの訊くことが解せねえッて。——何が解せねえんだ」

「浜村屋は、おせんのところへなんぎ、命を懸けて頼んだつて、  
 通つちやくれませんか」

「おめえ、まだ隠してるな」

「どういたしやして、嘘うそも隠かくしもありやアしません。みんなほんまのことを申もうしあ上げて居おりやすんで。……」

「千吉きち」

「へ」

「おめえ、二三日にちまえ前いに行いった時とき、おせんが誰だれと話はなしをしてえたか、そいつをいつて見みねえ」

「話はなしでげすつて」

「そうだ。おせん一人ひとりじゃなかったろう。たしか相手あいてがいたはずだ」

「お袋ふくろが、隣座敷となりざしきにいた外ほかにや、これぞいつて、人ひとらしい者ものアいやアいたしません」

「ふふふ、お七はいなかったか」

「お七ッ」

「どうだ、お七の衣装いしやうを着た浜村屋はまむらやが、ちやアんと一人ひとりいたはずだ。おめえはその眼めで見たじゃねえか」

「ありやア親方おやかた。——」

「あれもこれもありやアしねえ。おいらはそいつを訊きいてるんだ」

「人形にんぎようじゃござんせんか」

「とぼけちやいけねえ。人間にんげんを人形にんぎようと見違みちがえる程ほど、鬼七おにア

まだ耄碌もうろくしちやアいねえよ。ありやア菊之丞きくのじように違ちがえあるめえ」

「確たしかにそうたア申上もうしあげられねえんで。……」

「おめえ、眼めが上あがったな。判わかった。——もういいから帰けえンな」

「有難うござんすが、——親方、あれがもしか浜村屋だった  
ら、どうなせえやすんで。……」

「どうもしやアしねえ」

「どうもしねンなら、何も。——」

「聞きてえか」

「どうか、お聞かせなすつておくんなせえやし」

「浜村屋は、役者を止めぎアならねえんだ」

「何んでげすツて」

「口が裂けてもいうじやアねえぞ。——南御町奉行の、信

濃守様の妹御のお蓮様は、浜村屋の日本一の御最良

なんだ」

「ではあの、壱岐様いきさまからのお出戻りでもどの。――」

「叱しつ。余計よけいなこたアいつちやならねえ」

「へえ」

「さ、帰けえンねえ」

「有難ありがとうござんす」

千吉きちは、ふところの小判こばんを氣きにしながら、ほつとして頭あたまを下げ

た。

襟えりに當あたる秋あきの陽ひは狐きつねいろ色いろに輝かがやいていた。

七

無理むりやりてならに、手習てならいツ子こに筆ふでを握にぎらせるようにして、たつた二  
 行ぎようの文ふみではあつたが、いや応おうなしに書かかされた、ありがたく存ぞんじ  
 候そうろうかしこの十一文字もじが氣きになるままに、一夜やをまんじりともしな  
 かつたおせんは、茶ちやの味あじもいつものようにさわやかでなく、まだ  
 小半時こはんときも早いはや、明あけたばかりの日差ひざしの中なかを駕籠かごに揺ゆられながら、  
 しろかべちよう  
 白壁町はくへきまちの春信はるのぶの許もとを訪おとずれたのであつた。

弟子でしの藤吉とうきちから、おせんが来きたとの知しらせを聞きいた春信はるのぶは、  
 起き出おたばかりで顔かおも洗あらつていなかつたが、とりあえず画室がしつへ通とお  
 して、磁器じきの肌はだのように澄すんだおせんの顔かおを、じつと見詰みつめた。

「大たいそう早いはやの」

「はい。少しすこばかり思おもい余あまつたことがござんして、お智恵ちえを拝はいし

借やくに伺うかがいました」

「智恵ちえを貸かせとな。はッはッは。これは面白おもしろい。智恵ちえはわたしよりお前まえの方が多分ほうに持もち合あせているはずだかの」

「まアお師匠ししょうさん」

「いや、それア冗じょう談だんだが、いったいどんなことが持もち上あつたといいなさるんだ」

「あのう、いつもお話しはないたします兄あにが、ゆうべひよつこり、帰かえつて来きたのでござんす」

「なに、兄にいさんが帰かえつて来きたと」

「はい」

「よく聞きくお前まえの話はなしでは、千吉きちとやらしい兄にいさんは、まる三年ねんも

行方知れずになつていたとか。——それがまた、どうして急に。

——

「面目次第もござんせぬが、兄さんは、お宝が欲しいばかりに、歸つて来たのだと、自分の口からいつてでござんす」

「金が欲しいとの。したがまさか、お前を分限者だとは思うまいがの」

「兄さんは、あたしを囹にして、よその若旦那から、お金を借り申したのでござんす」

「ほう、何んとして借りた」

「いやがるあたしに文を書かせ、その文を、二十五両に、買つておもらい申すのだと、引ツたくるようにして、どこぞへ消え失せ

ましたが、そのお人は誰ひとあろう、通油町とおりあぶらちようの、橘屋たちばなやの徳と太郎くたろうさんという、虫むしが走るはしくらい、好すかないお方かたでござんす」  
 「そんなら千吉きちさんは、橘屋たちばなやの徳とくさんから、その金かねを借かりて。

――

「はい。今頃いまごろはおおかた、どこぞお大名屋敷だいみようやしきのお廐うまやで、好すきな勝負しょうぶをしてでござんしようが、文ふみを御覧ごらんなすつた若旦那わかだんなが、まッことあたしからのお願いねがとお思おもいなされて、大枚たいまいのお宝たからをお貸かし下くださいましたら、これから先さきあたしや若旦那わかだんなから、どのような難題なんだいをいわれても、返かえす言葉ことばがござんせぬ。――お師匠ししょうさん。何なんとしたらよいものでござんしよう」

まったく途方とほうに暮くれたのであろう。春信はるのぶの顔かおを見みあげたおせ

んの<sup>まぶた</sup>瞼は、露<sup>つゆ</sup>を含<sup>ふく</sup>んだ花弁<sup>かべん</sup>のように潤<sup>うる</sup>んで見<sup>み</sup>えた。

「さアてのう」

腕<sup>うで</sup>をこまねいて、あご<sup>あご</sup>を引<sup>ひ</sup>いた春信<sup>はるのぶ</sup>は、暫<sup>しば</sup>し己<sup>おの</sup>が膝<sup>ひざ</sup>の上<sup>うへ</sup>を見<sup>み</sup>詰<sup>つ</sup>めていたが、やがて徐<sup>おもむろく</sup>に首<sup>くび</sup>を振<sup>ふ</sup>つた。

「徳<sup>とく</sup>さんも、人<sup>ひと</sup>の心<sup>こころ</sup>の読<sup>よ</sup>めない程<sup>ほど</sup>馬鹿<sup>ばか</sup>でもなからう。どのような文句<sup>もんく</sup>を書<sup>か</sup>いた文<sup>ふみ</sup>か知<sup>し</sup>らないが、その文<sup>ふみ</sup>一本<sup>ぽん</sup>で、まさか二十五両<sup>りよう</sup>の大<sup>たい</sup>金<sup>きん</sup>は出<sup>だ</sup>すまいよ」

「それでも兄<sup>にい</sup>さんは、ただの二<sup>じ</sup>字<sup>じ</sup>でも三<sup>じ</sup>字<sup>じ</sup>でも、あたしの書<sup>か</sup>いた文<sup>ふみ</sup>さえ持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>けば、お金<sup>かね</sup>は右<sup>みぎ</sup>から左<sup>ひだり</sup>とのことでござんした」

「そりや、いつのことだの」

「ゆうべでござんす」

おせんがもう一度、顔を上げた時であつた。突然障子の外から、藤吉の声が低く聞えた。

「おせんさん、大変なことができましたぜ。浜村屋の太夫が、急病だつてこつた」

おせんは「はッ」と胸が詰まつて、直ぐには口が听けなかつた。

夢<sup>ゆめ</sup>

子、丑、寅、卯、辰、巳、——と、客のない上りかまちに腰を  
かけて、独り十二支を順に指折り数えていた、仮名床の亭主伝  
吉は、いきなり、息がつまるくらい荒ッぽく、拳固で背中をど  
やしつけられた。

「痛ッ。——だ、だれだ」

「だれだじゃねえや、てえへんなことがおつ始まつたんだ。子  
丑寅もなんにもあつたもんじゃねえ。あしたツから、うちの小  
屋は開かねえかも知れねえぜ」

火事場の纏持のように、息せき切つて駆け込んで来たのは、  
同じ町内に住む市村座の木戸番長兵衛であつた。  
伝吉はぎよつとして、もう一度長兵衛の顔を見直した。

「な、なにがあつたんだ」

「なにがも、かにがもあるもんじゃねえ、まかり間違<sup>まちが</sup>や、てえした騒<sup>さわ</sup>ぎになろうツてんだ。おめえンとこだつて、芝居<sup>しばい</sup>のこぼれを拾<sup>ひろ</sup>つてる家業<sup>かぎよう</sup>なら、万<sup>まん</sup>更<sup>ざら</sup>かかり合<sup>あい</sup>のねえこともなかう。こけが秋刀魚<sup>さんま</sup>の勘<sup>かん</sup>定<sup>じよう</sup>でもしてやしめえし、指<sup>ゆび</sup>なんぞ折<sup>お</sup>つてる時<sup>とき</sup>じやありやアしねえぜ」

「いってえ、どうしたツてんだ、長<sup>ちよう</sup>さん」

「おめえ、まだ判<sup>わか</sup>らねえのか」

「聞<sup>き</sup>かねえことにや判<sup>わか</sup>らねえや」

「なんて血<sup>ち</sup>のめぐりが悪<sup>わる</sup>く出来<sup>でき</sup>てるんだ。——

浜<sup>はま</sup>村<sup>むら</sup>屋<sup>や</sup>の太<sup>た</sup>夫<sup>ゆう</sup>が、

舞<sup>ぶ</sup>台<sup>たい</sup>で踊<sup>おど</sup>つてたまま倒<sup>たお</sup>れちやつたんだ」

「何<sup>な</sup>んだツてそいつアおめえ、本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>かい」

「おれにや、嘘<sup>うそ</sup>と坊主<sup>ぼうず</sup>の頭<sup>あたま</sup>アいえねえよ。——仮<sup>かり</sup>にもおんなじ芝

居<sup>ばい</sup>の者<sup>もの</sup>が、こんなことを、ありもしねえのにいつて見<sup>み</sup>ねえ。それ

こそ簀<sup>すまき</sup>巻<sup>まき</sup>にして、隅<sup>すみ</sup>田<sup>だが</sup>川<sup>がわ</sup>のまん中<sup>なか</sup>へおツ放<sup>は</sup>り込<sup>こ</sup>まれらアな」

「長<sup>ちよう</sup>さん」

「ええびつくりするじゃねえか。急<sup>きゆう</sup>にそんな大<sup>おお</sup>きな声<sup>こえ</sup>なんぎ、出<sup>だ</sup>

さねえでくんねえ」

「何<sup>なに</sup>をいつてるんだ。これがおめえ、こそこそ話<sup>ばなし</sup>にしてられるか

い。おい<sup>だれ</sup>らア誰<sup>だれ</sup>が好きだといつて、浜<sup>はま</sup>村<sup>むら</sup>屋<sup>や</sup>の太<sup>た</sup>夫<sup>ふう</sup>く<sup>う</sup>れえ、好<sup>す</sup>き

な役<sup>やく</sup>者<sup>しやしゆう</sup>衆<sup>しゆう</sup>はねえんだよ。芸<sup>げい</sup>がよ<sup>う</sup>くつて愛<sup>あい</sup>嬌<sup>きよう</sup>があつて、お

まけに自<sup>じ</sup>慢<sup>まん</sup>気<sup>げ</sup>なんぎ薬<sup>くすり</sup>にしたくもねえツてお人<sup>ひと</sup>だ。——ど<sup>どこ</sup>が悪<sup>わる</sup>

くツて、どう倒れたんだか、さ、そこをおいらに、委しく話して聞かしてくんねえ」

どやしつけられた、背中の痛さもけろりと忘れて、伝吉は、もとゆい元結が輪から抜けて足元へ散らばったのさえ気付かず、夢中で長兵衛の方へ膝をすり寄せた。

「丁度二番目の、所作事の幕に近え時分だと思ひねえ。知つての通りこの狂言は、三五郎さんの頼朝に、羽左衛門さんの梶原、それに太夫は鷺娘で出るといふ、豊前さんの淨瑠璃としつくり合つた、今度の芝居の呼び物だらうじやねえか。はねに近くなつたつて、お客は唯の一人だつて、立とうなんて料簡の者アねえやな。舞台ははずむ、お客はそろつて一寸でも

先へ首を出そうとする。いわば紙一重の隙もねえツてとこだった。  
 どうしたはずみか、太夫の踊つてた足が、躓いたようによろよろ  
 つとしたかと思うと、あツという間もなく、舞台へまともに突ツ  
 俯しちまつたんだ。——客席からは浜村屋ツという声が、  
 石を投げるように聞こえて来るかと思うと、御鼻肩の泣く声、喚  
 く声、そいつが忽ち渦巻になつて、わツわツといつてるうちに、  
 道具方が氣を利かして幕を引いたんだが、そりやおめえ、ここ  
 でおれが話をしてるようなもんじやアねえ、芝居中がひっくり  
 返るような大騒ぎだ。——そのうちに頭取が駆け着ける、弟  
 子達が集まるで、倒れた太夫を、鷺娘の衣装のまま樂屋へ  
 かつぎ込んだが、まだおめえ、宗庵先生のお許しが出

ねえから、太夫は楽屋に寝かしたまま、家へも帰れねえんだ」

「よし、お花、おいらに羽織を出してくんねえ」

伝吉は突然こういつて立上った。

## 二

「お前さん、どこへ行くんだよ。真ッ昼間ッからお見世を空けて出て行ったんじや、お客様に申し訳がないじゃないか。太夫さんとこへお見舞に行くなら、日が暮れてからにしとくれよ。」

——ようッてば」

下剃一人をおいて出られたのでは、家業に障ると思つたの

であろう。一張羅の羽織を、渋々箆笥から出して来たお花は、  
 亭主の伝吉の袖をおさえて、無理にも引止めようと顔を窺き  
 込んだ。

が、伝吉は、いきなり吐きだすようにけんのみを食わせた。

「馬鹿野郎。何をいつてやがるんだ。亭主のすることに、女な

んぞが口を出すこたアねえから黙つて引ッ込んでろ。外のことな

らともかく、太夫が急病だつてのを、そのままにしといたん

じゃ、世間の奴等になんていわれると思うんだ。仮名床の伝吉

の奴ア、ふだん浜村屋が好きだの蜂の頭だのと、口幅ツてえ

ことをいつてやがるくせに、なんてざまなんだ。手間が惜しさに

見舞にも行かねえしみツたれ野郎だ、とそれこそ口をそろえて悪

くいわれるなア、加賀様の門よりもよく判つてゐるぜ。——つまりねえ理屈アいわねえで、速く羽織を着せねえかい。こうなったり一刻だつて、待てしばしはねえんだ」

お花の手から羽織を引つたくつた伝吉は、背筋が二寸も曲がつたなりに引ツかけると、もう一度お花の手を振りもぎつて、喧嘩犬のように、夢中で見世を飛び出した。

「待ちねえ、伝さん」

長兵衛は背後から声をかけた。

「何んの用だ」

「用じゃアねえが、おかみさんもああいうんだから、晩にしたらどうだ。どうせいま行つたつて、会えるもんでもねえんだから。」

「

「ふん、おめえまで、余計よけいなことはおいてくんねえ。おいらの足あしでおいらが歩いてくんあるだ。どこへ行いこうが勝手かってじやねえか」

「ほう、大まかに出でやアがおおつたな。話はなしをしたなアおれなんだぜ。

行ゆくんなら、せめておれの髻ひげだけでもあたたツてツてくんねえ」

「髻ひげは帰きつて来きてからだ」

「帰かえつて来きてからじゃ、間まに合あわねえよ」

「間まに合あわなかつたら、どこいでも行いつて、やつてもらつて来くる

がいいやな。——ええもう面倒臭めんどうくせえ、四の五のいつてるうちに、

日ひが暮くれちまわア」

前まへつぼの固かたい草履ぞうりの先さきで砂すなを蹴けつて、一目散もくさんに駆かけ出だした伝で

んきち

吉は、提灯屋の角まで来ると、ふと立停たちどまつて小首を傾かしげた。

「待まてよ。こいつア市村座いちむらざへ行くより先に、もつと大事だいじなところ

ろがあるぜ。——そうだ。まだおせんちゃん知らねえかもしれ

ねえ。こんな時ときに人情にんじようを見せてやるのが、江戸ツ子の腹はらの見み

せどこだ。よし、ひとつ駕籠かごをはずんで、谷中やなかまで突つ走はしつてや

ろう」

おお うなず  
大きく領うなずいた伝吉でんきちは、折おりから通とおり合あわせた辻駕籠つじかごを呼よび止とめて、

笠森かさもり稲荷いなりの境内けいだいまでだと、酒手さかてをはずんで乗のり込こんだ。

「急いそいでくんねえよ」

「ようがす」

「急きゆう病びよう人にんの知しらせに行ゆくんだからの」

「合点だ」  
がってん

返事は如何にも調子がよかつたが、肝腎の駕籠は、一向突  
へんじ いか ちようし かんじん かご こうつ  
 ツ走つてはくれなかつた。  
ばし

「ちえツ。吉原だといやア、豪勢飛びやアがるくせに、谷中  
よしわら きち ごうせい と やなか  
 の病人の知らせだと聞いて、馬鹿にしてやがるんだろう。伝  
びようじん し き ばか で  
 吉アただの床屋じゃねえんだぜ。当時江戸で名高え笠森おせ  
きち とこや とうじ えど なだけ かさもり  
 んの、襟を剃るなアおいらより外にや、広い江戸中に二人たね  
えり あた ほか ひろ えどじゆう ふたり

えんだ」

伝吉が駕籠の中で鼻の頭を引ツこすつてのひとり啖呵も、駕  
でんきち かご なか はな あたま ひ たんか か  
 籠屋には少しの効き目もないらしく、駕籠の歩みは、依然として  
ごや すこ きめ かご あゆ いぜん  
 緩やかだった。  
ゆる

## 三

床屋<sup>とこや</sup>の伝吉<sup>でんきち</sup>が、笠森<sup>かさもり</sup>の境内<sup>けいだい</sup>へ着<sup>つ</sup>いたその時分<sup>じぶん</sup>、春信<sup>はるのぶ</sup>の  
 住居<sup>すまい</sup>で、菊之丞<sup>きくのじよう</sup>の急病<sup>きゆうびよう</sup>を聞<sup>き</sup>いたおせんは無我夢中<sup>むがむちゆう</sup>でのおのが  
 家の敷居<sup>いえしきい</sup>を跨<sup>また</sup>いでいた。

「お母<sup>つか</sup>さん」

「おやおまえ、どうしたというの、何<sup>なに</sup>かお見世<sup>みせ</sup>にあつたのかい」  
 今<sup>いま</sup>ごろ帰<sup>かえ</sup>つて来<sup>こ</sup>ようとは、夢<sup>ゆめ</sup>にも考<sup>かん</sup>えてい<sup>な</sup>かつたお岸<sup>きし</sup>は、慌<sup>あわただ</sup>  
 しく駆<sup>か</sup>け込<sup>こ</sup>んで来<sup>き</sup>たおせんの姿<sup>すがた</sup>を見<sup>み</sup>ると、まず、怪我<sup>けが</sup>でもしたの  
 ではないかと、穴<sup>あな</sup>のあく程<sup>ほど</sup>じツと見詰<sup>みつ</sup>めながら、静<sup>しず</sup>かに肩<sup>かた</sup>へ手<sup>て</sup>を

かけたが、いつもと様子ようすの違ちがつたおせんは、母ははの手を振り払はらうようにして、そのまま畳たたみざわりも荒あらく、おのが居間いまへ駆け込こんで行いつた。

「どうおしだよ、おせん」

「お母つかさん、あたしや、どうしよう」

「まアおまえ。……」

「吉きちちゃんが、——あの菊之丞きくのじようさんが、急きゆう病びようとの事ことでござんす」

「なんとえ。太夫たゆうさんが急きゆう病びようとえ。——」

「あい。——あたしやもう、生いきてる空そらがござんせぬ」

「何なにをおいいだえ。そんな氣きの弱よわいことでどうするものか。人ひとの

口は、<sup>くち</sup>どうにでもいえるもの。急病<sup>きゅうびょう</sup>といったところが、どこ

まで本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>のことかわかったものではあるまいし。……」

「いえいえ、嘘<sup>うそ</sup>でも夢<sup>ゆめ</sup>でもござんせぬ。あたしやたしかに、この耳<sup>みみ</sup>で聞<sup>き</sup>いて来<sup>き</sup>ました。これから直<sup>す</sup>ぐに市村座<sup>いちむらざ</sup>の楽屋<sup>がくや</sup>へお見舞<sup>みまい</sup>に行<sup>い</sup>つて来<sup>き</sup>とうござんす。お母<sup>つか</sup>さん、そのお七の衣装<sup>いしやう</sup>を脱<sup>ぬ</sup>がせておくんなさいまし」

「えッ、これをおまえ」

「吉<sup>きち</sup>ちゃん<sup>ちん</sup>が、去<sup>き</sup>年<sup>ねん</sup>の芝居<sup>しばい</sup>が済<sup>す</sup>んだ時<sup>とき</sup>、黙<sup>だま</sup>つて届<sup>とど</sup>けておくんなすつたお七の衣装<sup>いしやう</sup>、あたしに着<sup>き</sup>ろとの謎<sup>なぞ</sup>でござんしょう」

「それでもこれは。——」

「お母<sup>つか</sup>さん」

おせんは、部屋へやの隅すみに立たてかけてある人形にんぎようの傍そばへ、自分じぶんから歩あゆみ寄よると、いきなり帯おびに手てをかけて、まるで芝居しばいの衣装着いしょうつけがするように、如何いかにも無造作むぞうさに衣装いしょうを脱ぬがせ始はじめた。

「お止よし」

「いいえ、もう何なんにもいわないでおくんなさい。あたしやお七こころとおんなじ心こころで、太夫たゆうに会あいに行ゆきとうござんす」

ばらりと解といたお七おびの帯おびには、夜毎よごとに焚たきこめた伽羅きやらの香かりが悲かなしく籠こもつて、静しずかに部屋へやの中なかを流ながれそめた。

「ああ。――」

おせんはその帯おびを、ずツと胸むねに抱だきしめた。

「おせんや」

お岸は優し眼をふせた。

「あい」

「おまえ、一人で行く気かえ」

「あい」

衣装を脱がせて、襦袢を脱がせて、屏風のかげへ這入つ

たおせんは、素速くおのが着物と着換えた。と、この時格子戸の外から降つて湧いたように、男の声が大きく聞えた。

「おせんさん、仮名床の伝吉でござんす。浜村屋の太夫さん

が、急病と聞いて、何より先にお知らせしてえと、駕籠を飛

ばしてやってめえりやした。笠森様においでがねえんでこつち

へ廻つて来やした始末。ちつとも速く、葺屋町へ行つとくンな

せえやし」

「親方、その駕籠を、待たせといておくんなさい」

「合点でげす」

おせんの声は、いつになく甲高かつた。

#### 四

人目を避けるために、わざと塵巻を深く垂れた医者駕籠に乗  
せて、男衆と弟子の二人だけが付添ったまま、菊之丞の不  
随の体は、その日の午近くに、石町の住居に運ばれて行つ  
た。

が、たださえ人<sup>にん</sup>氣<sup>き</sup>の頂<sup>ちやうてん</sup>点<sup>てん</sup>にある菊<sup>きく</sup>之<sup>の</sup>丞<sup>じやう</sup>が、舞<sup>ぶ</sup>台<sup>たい</sup>で倒<sup>たお</sup>れた  
 との噂<sup>うわさ</sup>は、忽<sup>たちま</sup>ち人<sup>ひと</sup>から人<sup>ひと</sup>へ伝<sup>つた</sup>えられて、今<sup>いま</sup>は江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>の隅<sup>すみ</sup>々<sup>ずみ</sup>まで、  
 知<sup>し</sup>らぬはこけの骨<sup>こつちやう</sup>頂<sup>てい</sup>とさえいわれるまでになつていた。他<sup>は</sup>目<sup>め</sup>  
 からは、どう見<sup>み</sup>ても医<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>の見<sup>み</sup>舞<sup>まい</sup>としか想<sup>おも</sup>われなかつた駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>の周<sup>まわ</sup>圍<sup>り</sup>  
 は、いつの間<sup>ま</sup>にやら五<sup>にん</sup>人<sup>にん</sup>十<sup>じよ</sup>人<sup>にん</sup>の男<sup>だん</sup>女<sup>じよ</sup>で、百<sup>まん</sup>万<sup>べん</sup>遍<sup>べん</sup>のよう<sup>よう</sup>に取<sup>とり</sup>  
 囲<sup>こ</sup>んで、追<sup>お</sup>え<sup>え</sup>ば追<sup>お</sup>う程<sup>ほど</sup>、その数<sup>かず</sup>は増<sup>ま</sup>して来<sup>く</sup>るばかりであつた。  
 「ちよいとお前<sup>まえ</sup>さん、何<sup>な</sup>んだつてあんなお医<sup>い</sup>者<sup>しや</sup>の駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>に、くツつ  
 いて歩<sup>ある</sup>いてゐるのさ」  
 「なんだ神<sup>か</sup>田<sup>んだ</sup>の、明<sup>み</sup>神<sup>しん</sup>様<sup>さま</sup>の石<sup>いし</sup>の鳥<sup>とり</sup>居<sup>い</sup>じやないが、お前<sup>まえ</sup>さんも  
 きがなさ過<sup>す</sup>ぎるよ。ありやアただのお医<sup>おい</sup>者<sup>しや</sup>様<sup>さま</sup>の駕<sup>か</sup>籠<sup>ご</sup>じやないよ」  
 「だつてお辰<sup>たつ</sup>つあん、どう見<sup>み</sup>たつて。……」

「叱ッ、静かにおしなね。あんなにや、浜村屋の太夫さんが乗  
つてゐるんだよ」

「浜村屋の太夫さん。——」

「そうさ。きのう舞台で倒れたまま、今が今まで、楽屋で寝てえ  
たんじやないか。それをお前さん、どうでも家へ帰りたいたと駄々  
をこねて、とうとうあんな塩梅式に、お医者と見せて帰る途  
中だつてことさ」

「おやまあ、そんならそこを退いとくれよ」

「なぜ」

「あたしや駕籠の傍へ行つて、せめて太夫さんに、一言でもお見  
舞がいたいインだから。……」

「何をいうのさ。<sup>なに</sup> 太夫は <sup>たゆう</sup> 大病人 <sup>だいびょうにん</sup> なんだよ。ちつとだツて騒い<sup>さわ</sup>だりしちやア、<sup>からださわ</sup> 体に障らアね。一緒<sup>しよ</sup>について行くなアいいが、こッから先<sup>さき</sup>へは出<sup>で</sup>ちやならねえよ」

「いいから退<sup>ど</sup>いとくれツたら」

「おや痛い<sup>いた</sup>、抓<sup>つね</sup>らなくツてもいいじゃないか」

「退<sup>ど</sup>かないからさ」

「おや、また抓<sup>つね</sup>ったね」

髪結<sup>かみゆい</sup>のお辰<sup>たつ</sup>と、豆腐屋<sup>とうふや</sup>の娘<sup>むすめ</sup>のお亀<sup>かめ</sup>とが、いいのいけないのと争<sup>あらそ</sup>つているうちに、駕籠<sup>かご</sup>は更<sup>さら</sup>に多<sup>おほ</sup>くの人数<sup>にんず</sup>に取巻<sup>とりま</sup>かれながら、芳<sup>よ</sup>しちようどお町<sup>ちやうどお</sup>通<sup>ひだり</sup>りを左<sup>ひだり</sup>へ、おやじ橋<sup>ばし</sup>を渡<sup>わた</sup>つて、牛<sup>うし</sup>の歩<sup>あゆ</sup>みよりもゆるやかに進<sup>すす</sup>んでいた。

菊之丞きくのじようの駕籠かごを一町ちようばかり隔へだてて、あたかも葬式そうしきでも送おくる  
 ように悵ちようぜん然くびと首くびを垂たれたまま、一足あしごと毎おもに重あゆい歩つづみを續つづけて  
 いたのは、市村座いちむらざの座元ざもと羽左衛門うざえもんをはじめ、坂東彦三郎ばんどうひこ、尾  
 上菊五郎のきくろう、嵐三五郎あらし、それに元服げんぷくしたばかりの尾上松助おのえまつすけなど  
 の一行こうであつた。

いずれも編笠あみがさで深ふかく顔かおを隠かくしたまま、眼めをしばたたくのみで、  
 互たがいに一言ごんも発はつしなかつたが、急きゆうに何か思おもいだしたのであろう。羽  
 左衛門ざえもんは、寂さびしく眉まゆをひそめた。

「松助さん」

「はい」

「お前まえさんは、折角せつかくだが、ここから帰かえる方ほうがいいようだの」

「なぜでございます」

「不吉なことをいうようだが、浜村屋さんはひよつとすると、

あのままいけなくなるかも知れないからの」

「ええ滅相な。左様なことがおますかいな」

そういつて眼をみはったのは嵐三五郎であつた。

「いや、わたしとて、太夫に元のようになつてもらいたいのには山

々だが、今までの太夫の様子では、どうも難かしからうと思わ

れる。縁起でもないことだが、ゆうべわたしは、上下の歯が一

本残らず、脱けてしまった夢を見ました。情ないが、所詮太夫

は助かるまい」

羽左衛門はそういつて、寂しそうに眉をひそめた。

## 五

夢ゆめから夢ゆめを辿たどりながら、更さらに夢ゆめの世界せかいをさ迷まよい続つづけていた菊はまむ  
 之丞らやは、ふと、夏なつの軒端のきばにつり残のこされていた風鈴ふうりんの音おとに、重おも  
 い眼めを開あけてあたりを見廻みまわした。

医者いしやの玄庵げんあんをはじめ、妻つまのおむら、座元ざもとの羽左衛門うざえもん、三五郎ろう、  
 彦三郎ひころう、その他たの人達ひとたちが、ぐるりと枕まくらもと許くるまぎに車座くるまざになつて、  
 何かなにひそひそと語かたり合あっている声こえが、遠とおい国くにの出来事できごとのように聞きこ  
 えていた。

「おお、あなた。——」

最初<sup>さいしよ</sup>におむらが、声<sup>こえ</sup>をかけた。が、菊之丞<sup>きくのじやう</sup>の心<sup>こころ</sup>には、声<sup>こえ</sup>の主<sup>ぬし</sup>が誰<sup>だれ</sup>であるのか、まだはつきり映<sup>うつ</sup>らなかつたのであろう。きよろりと一度<sup>ど</sup>見廻<sup>みまわ</sup>したきり、再び<sup>ふたたび</sup>眼<sup>め</sup>を閉<sup>と</sup>じてしまった。

玄庵<sup>げんあん</sup>は徐<sup>しず</sup>かに手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>つた。

「どなたもお静<sup>しず</sup>かに。——」

「はい」

急<sup>きゆう</sup>に水<sup>みづ</sup>を打<sup>う</sup>つたような静<sup>しず</sup>けさに還<sup>かえ</sup>つた部屋<sup>へや</sup>の中<sup>なか</sup>には、ただ香<sup>かう</sup>のかおりが、低<sup>ひく</sup>く這<sup>は</sup>っているばかりであつた。

玄庵<sup>げんあん</sup>は、夜着<sup>よぎ</sup>の下<sup>した</sup>へ手<sup>て</sup>を入れて、かるく菊之丞<sup>きくのじやう</sup>の手首<sup>てくび</sup>を掴<sup>つか</sup>んだまま首<sup>くび</sup>をひねつた。

「先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>、如何<sup>いか</sup>でございます」

「脈みやくに力ちからが出たようじゃが。……」

「それはまア、うれしゅうござんす」

「だが御安心ごあんしんは御無用ごむようじゃ。いつ何時なんどき変化へんかがあるか判わからぬか

らのう」

「はい」

「お見舞みまいの方かた々がたも、次つぎの間まにお引取ひきとりなすつてはどうじゃの、

御病人ごびょうにんは、出来できるだけ安あん静せいに、休やすませてあげるとよいと思おもう

での」

「はいはい」と羽左衛門うざえもんが大大おおおきくうなずいた。「如何いかにも御ごもつ

ともでございます。——では、ここはおかみさんにお願ねがい申もうして、

次つぎへ下さつていることにいたしましょう」

「それがようござる。及ばずながら愚老が看護して居る以上、  
 手落はいたさぬ考えじゃ」

「何分共にお願い申上げます」

一同は足音を忍ばせて、襖の開けたてにも気を配りながら、  
 次の間へ出て行つた。

暫し、鉄瓶のたぎる音のみが、部屋のしじまに明るく残され  
 た。

「御内儀」

玄庵の声は、低く重かつた。

「はい」

「お気の毒でござるが、太夫はもはや、一時の命じゃ」

「えッ」

「いや静かに。しず——ただ今、いま脈に力が出たようじやと申上げたが、じつ実は他の方々の手前をかねたままでのこと。かたがた心臓も、てまえ微かにぬく温みを保っているだけのことじや」

「それではもはや」

おむらの、いま今まで辛抱に辛抱を重ねていた眼からは、しんぼう玉のなみだような涙が、ほほ頬を伝つて溢れ落ちた。あふ

やがて、こうえん香煙を揺がせて、おそ恐る恐る襖の間から首を差出したのは、でし弟子の菊彌だつた。きくや

「お客様きやくさまでございます」

「どなたが」

「谷中のおせん様」  
やなか　さま

「えッ、あの笠森の。……」  
かさもり

「はい」

「太夫は御病氣ゆえ、お目にかかれぬと、お断りしておくれ」  
たゆう　ごびようき　め　め　ことわ

するとその刹那、ぱつと眼を開いて菊之丞の、細い声が鋭く  
せつな　め　あ　きくのじよう　ほそ　こえ　きこ　きこ  
 聞えた。

「いいよ。いいから、ここへお通し。——」  
とお　とお

## 六

初霜を避けて、昨夜縁に上げられた白菊であろう、下葉か  
はつしも　さ　さくやえん　あ　しらぎく　したは

ら次第に枯れてゆく花の周囲を、静かに舞っている一匹の虻を、猫が頻りに尾を振ってじやれる影が、障子にくつきり映っていた。

その虻の羽音を、聞くとともになしに聞きながら、菊之丞の枕頭に座して、じつと寝顔に見入っていたのは、お七の着付もある

でやかなおせんだった。

紫の香煙が、ひとつとすなおに立昇って、南向きの座敷は、硝子張の中のように暖かい。

七年目で会った、たった二人の世界。殆んど一夜のうちに生氣を失ってしまった菊之丞の、なかば開かれた眼からは、糸のような涙が一筋頬を伝わって、枕を濡らしていた。

「おせんちゃん」

きくのじよう  
菊之丞の声は、わずかに聞かれるくらい低かった。

「あい」

「よく来てくれた」

たゆう  
「太夫さん」

「太夫さんなぞと呼ばずに、やっぱり昔の通り、吉ちゃんと呼んでおくれな」

きち  
「そんなら、吉ちゃん。——」

「はい」

「あたしや、会いとうござんした」

「あたしも会いたかった。——こういったら、お前さんはさだめ

し、心こころにもないことをいうと、お想おもいだろうが、決して嘘うそでもな  
 けりや、お世辞せじでもない。——知しつての通とおり、あたしやどうやら  
 人にん気きも出でて、世間様せけんさまからなんのかのと、いわれているけれど、  
 心こころはやつぱり十年ねんまゑ前まへもおなじこと。義理ぎりでもらつた女にようぼう房ぼうよ  
 り、浮気うわきでかこつた女おんなより、心しんから思おもうのはお前まえの身みの上うゑ。暑あつい  
 につけ、寒さむいにつけ、切せつない思おもひは、いつも谷中やなかの空そらに通かよつては  
 いたが、今いまではお前まえも人にん気き娘むすめ、うっかりあたしが訪たずねたら、あ  
 らぬ浮名うきなを立てたられて、さぞ迷めい惑わくでもあろうかと、きようが日ひ  
 まで、辛しん抱ぼうして来きましたのさ」  
 「勿もつ体たいない、太夫たゆうさん。——」  
 「いいえ、勿もつ体たいないより、済すまないのはあたしの心こころ。役者やくしやかぎ

家業やうの憂うさ辛つらさは、どれ程ほどいやだとおもつても、御鼻屑ごひいきからの  
 お迎むかえよ。お座敷ざしきよといわれれば、三度どに一度どは出向でむいて行いつて、  
 笑顔えがおのひとつも見みせねばならず、そのたび毎ごとに、ああいやだ、こ  
 んな家業かぎやうはきようは止よそうか、明日あすやめようかと思おもうものの、  
 さて未練みれんは舞台ぶたい。このまま引ひいてしまつたら、折角せつかく鍛きたえたおの  
 が芸げいを、根ねこそぎ棄すてなければならぬ悲かなしさ。それゆえ、秋あきの野  
 に鳴なく虫むしにも劣おとる、はかない月日つきひを過すごして来きたが、……おせん  
 ちゃん。それもこれも、今いまはもうきのうの夢ゆめと消きえるばかり。所し  
 詮よせんは会あえないものと、あきらめていた矢先やさき、ほんとうによく来き  
 てくれた。あたしやこのまま死しんでも、思おもい残のこすことはない。――

「もし、吉ちゃんきち」

「おお」

「しつかりしておくんなさい。羞はづかしながら、お前まえがなくてはこ  
 の世よの中に、誰だれを思おもつて生いきようやら、おまえ一人ひとりを、胸むねにひそ  
 めて来きたあたし。あたしに死しねというのなら、たつた今いまでも、身み  
 代がわりにもなりましょう。——のう吉ちゃんきち。たとえ一夜やの枕まくらは交かわ  
 さずとも、あたしやおまえの女にようぼう房ぼうだぞえ。これ、もうし吉きち  
 ちゃん。返事へんじのないのは、不承知ふしうちかえ」  
 一膝ひざずつ乗出のりだしたおせんは、頬ほほがすれすれになるまでに、菊きく  
 之丞じようの顔かおを覗のぞき込こんだが、やがてその眼めは、仏像ぶつぞうのようにす  
 わって行いった。

「吉ちゃん。——太夫さん。——」

「お、せ、ん——」

「ああ、もし」

おせんは、次第に唇の褪せて行く菊之丞の顔の上に、涙と共に打ち伏してしまった。

隣座敷から、俄に人々の立つ気配がした。

## 七

二代目瀬川菊之丞の死が報ぜられたのは、その日の暮れ方近くだった。江戸の民衆は、去年の吉原の大火よりも、更

に大きな失望の淵に沈んだが、中にも手の中しゅちゆうの珠たまを奪うばわれた

ような、悲しみのどん底に落ち込んだのは、菊之丞きくのじようでなければ

夜も日もあけない各かく大名だいみようや旗本屋敷はたもとやしきの女中じょちゆう達たちだった。

殊ことに、この知らせを受けて、天地てんちが覆くつえつた程ほどの驚愕きようがくを覚おぼ

えたのは、南町奉行みなみまちぶぎよう本多信濃守ほんだしなののかみの妹お蓮いもうとれんであろう。折おりから

夕餉ゆうげの膳ぜんに對むかおうとしていたお蓮れんは、突然とつぜん手にした箸はしを取落とりおと

すと、そのまま狂氣きやうきしたように、ふらふらツと立上たちあがつて、跣は

足だしのまま庭にわ先さきへと駆け降りて行いった。

二三人にんの侍女じじよが、直ぐさまその後あとを追おった。

「もし、お嬢様じようさま。お危あぶのうござります」

「何をなにするのじや。放はなしや」

「どちらへおいで遊あそばします」

「知しれたことじや。これから直すぐに、浜村屋はまむらやの許もとへまいる」

「これはまあ、滅めつ相そうなことを仰おつしやいます」

なに

めつそう

「何が滅相めつそうなことじや、わらわがまいって、浜村屋はまむらやの病び氣ようき

なお

を癒なして取とらせるのじや。——邪間じやまだてせずと、そこ退のきや」

「なりませぬ」

「ええもう、退のきやというに、退のかぬか」

てあら

つ

の

ひとり

じじよ

ころ

手荒てあらく突つき退のけられた一人の侍女じじよは、転ころびながらも、お蓮れんの裾すそ

しか

おき

を確しかと押おきえた。

「お嬢じょう様さま。お氣きをお静しずめ遊あそばしまして。……」

「いらぬことじや。放はなせ」

「いいえお放<sup>はな</sup>しいたしませぬ。今頃<sup>いまごろ</sup>お出<sup>で</sup>まし遊<sup>あそ</sup>ばしましては、お身<sup>みづん</sup>分に係<sup>かか</sup>ります。もしまた、たつてお出<sup>で</sup>まし遊<sup>あそ</sup>ばしますなら、一応<sup>おう</sup>わたくし共<sup>ども</sup>から御家老<sup>ごからう</sup>へ、その由<sup>よし</sup>お伝<sup>つた</sup>えいたしませねば。

……

「くどいわ。放<sup>はな</sup>せというに、放<sup>はな</sup>さぬか」

夢<sup>むちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>で振<sup>ふ</sup>り払<sup>はら</sup>ったお蓮<sup>れん</sup>の片<sup>かた</sup>袖<sup>そで</sup>は、稻<sup>いな</sup>穂<sup>ほ</sup>のよう<sup>よう</sup>に侍<sup>じ</sup>女<sup>じよ</sup>の手<sup>て</sup>に残<sup>のこ</sup>つて、惜<sup>お</sup>し気<sup>げ</sup>もなく土<sup>つち</sup>を蹴<sup>け</sup>つてゆく白<sup>はく</sup>臘<sup>ろう</sup>の足<sup>あし</sup>が、夕<sup>ゆう</sup>闇<sup>やみ</sup>の中<sup>なか</sup>にほのかに白<sup>しろ</sup>かつた。

「もし、お嬢<sup>じようさま</sup>様<sup>さま</sup>。――」

池<sup>いけ</sup>を廻<sup>まわ</sup>つて、築<sup>つき</sup>山<sup>やま</sup>の裾<sup>すそ</sup>を走<sup>はし</sup>るお蓮<sup>れん</sup>の姿<sup>すがた</sup>は、狐<sup>きつね</sup>のよう<sup>よう</sup>に速<sup>はや</sup>かつた。

「それ、向うから。——」

「あちらへお廻り遊ばしました」

男おとこ氣けのなくない奥庭おくにわに、次第しだいに数かずを増ました女中じょちゆう達たちは、お蓮れん

の姿すがたを見失みうしつては一大事だいじと思おもつたのであろう。老おいも若わかきもおし

なべて、庭にわの木戸きどへと歩ほを乱みだした。

が、必死ひつしに駆かけ着つけた庭にわの木戸きどには、もはやお蓮れんの姿すがたは見みられ

なかつた。

「お嬢じようさま様。——」

「お待ち遊あそばせ」

しかも、年ねんに一度ども、駆かけたことなどなのないお蓮れんは、庭木戸にわきどを

出では出でたものの、既すでに脚あしが釣つるまでに疲つかれ果はてて、口くちの中なかで菊きく

之丞じようの名なを呼よびながら、今いまはもはや堪たえられない歩あゆみを、いず

くへとのあてもなしに、無理むりから先さきへ先さきへと運はこんでいた。

「——浜村屋はまむらや、待まちや。わらわを置おいて、そなたばかりがどこ

へ行く。——そりや聞きこえぬぞ。わらわも一しよ緒じや。そなたの行ゆ

きやるところなら、地獄じごくの極はてへなりと、いといはせぬ。連つれて行ゆ

きや。速はやう連つれて行ゆきや」

二十一ふたじゅういちで坂部さかべ壱岐守いきのかみへ嫁とついで八年ねんめ目に戻もどつて来きた。既すでに三十

の身みではあつたが、十四五こころの頃ころから早はやくも本多小町ほんだこまちと謳うたわれたお

蓮れんは、まだ漸ようやくく二十四五にじゅうごにしか見みえず、いずれかといえは妖艶ようえん

なかたちの、情じようねつ熱ねつに燃もえた眼めを据すえて、夕闇ゆうやみの中なかを音おともな

く歩あるいてゆく様さまは、ぞつとする程ほど凄すごかつた。

## 八

いずこの大名旗本の屋敷に、如何なる騒ぎが持上つて  
 いようと、それらのことは、まったく別の世界の出来事のように、  
 菊之丞の家は、静かにしめやかであつた。

座元をはじめ、あらゆる芝居道の人達はいうまでもなく、  
 鼯鼠の人々、出入のたれかれと、百を越える人数は、仕切りな  
 しに押し寄せて、さしも豪華を誇る住居も所狭きまでの混雑  
 を見ていたが、しかも菊之丞の冷たいむくろを安置した八畳の  
 間には、妻女のおむらさえないおせんがただ一人、首を垂

れたまま、默然<sup>もくねん</sup>と膝<sup>ひざ</sup>の上<sup>うへ</sup>を見詰<sup>みつ</sup>めていた。

ふと、おせんの固<sup>かた</sup>く結<sup>むす</sup>んだ唇<sup>くちびる</sup>から、低<sup>ひく</sup>い、微<sup>かす</sup>かな声<sup>こえ</sup>が漏<sup>も</sup>れた。

「吉<sup>きち</sup>ちゃん。おかみさんや、ほかの人<sup>ひと</sup>達<sup>たち</sup>に願<sup>ねが</sup>いして、あたし

がたつた一人<sup>ひとり</sup>、お前<sup>まえ</sup>の枕<sup>まくら</sup>許<sup>もと</sup>へ残<sup>のこ</sup>してもらつたのは、十年前<sup>ねんまえ</sup>

の、飯事<sup>ままごと</sup>遊<sup>あそ</sup>びが、忘<sup>わす</sup>れられないからでござんす。――みんなし

て、近<sup>きん</sup>所<sup>じよ</sup>の飛鳥<sup>あすか</sup>山<sup>やま</sup>へ、お花見<sup>はなみ</sup>に出<sup>で</sup>かけたあの時<sup>とき</sup>、いつもの通<sup>とお</sup>

り、あたしとお前<sup>まえ</sup>とは夫婦<sup>ふうふ</sup>でござんした。幔幕<sup>まんまく</sup>を張<sup>は</sup>りめぐらし

た、どこぞの御<sup>ご</sup>大<sup>たい</sup>家<sup>け</sup>の中<sup>なか</sup>へ、迷<sup>まよ</sup>い込<sup>こ</sup>んだあたし達<sup>たち</sup>は、それお前<sup>まえ</sup>も

覚<sup>おぼ</sup>えてである。絵<sup>え</sup>にあるような綺麗<sup>きれ</sup>いな、お嬢<sup>じよう</sup>様<sup>さま</sup>に何<sup>なに</sup>やかやと

御<sup>ご</sup>馳<sup>ち</sup>走<sup>そう</sup>を頂<sup>ちよう</sup>戴<sup>だい</sup>した挙<sup>あ</sup>句<sup>ぐ</sup>、お化粧<sup>けし</sup>直<sup>し</sup>しの幕<sup>まく</sup>の隅<sup>すみ</sup>で、あたしは

お前まえに、お前まえはあたしに、互たがいにお化粧けしょうをしあつて、この子達こたち、  
 もう小十年こねんも経たつたなら、きつと惚ほれ惚ほれするよううつくに美しくなる  
 であろうと、お世辞せじにほめて頂いたいた、あの夢ゆめのような日ひのことが、  
 いまだにはつきり眼めに残のこつて……吉きちちゃん。あたしや今こそお前まえ  
 に、精根せいこんをつくしたお化粧けしょうを、してあげとうござんす。――  
 紅白粉べにおしろいは、家いえを出でる時袱紗ときふくさに包つつんで持もつて来きました。あたしの  
 遣つかいふるしでござんすが、この紅筆べにふでは、お前まえが王子おうじを越こす時ときに、  
 あたしにおくんなすつた。今では形見かたみ。役者衆やくしやしゆうの、お前まえのお  
 気きに入いるよううに出来できますまいけれど、辛抱しんぼうしておくんなさい。  
 せめてもの、あたしの心こころづくしでござんす」

北きたを枕まくらに、静しずかに眼めを閉とじている菊之丞きくのじようの、女おんなにもみまほし

いまでに美しく澄んだ顔は、磁器の肌のように冷たかった。

白粉刷毛を持ったおせんの手は、名匠が毛描きでもするよ

うに、その上を丹念になぞつて行つた。

眼、口、耳。——真白に塗りつぶされたそれらのかたち、

間もなく濡手拭で、おもむろにふき清められると、やがて唇に

は真紅のべにがさされて、菊之丞の顔は今にも物をいうかと怪

しまれるまでに、生々と蘇つた。

おせんは、じつとその顔に見入つた。

「吉ちゃん。——もし、吉ちゃん」

次第におせんの声は、高かった。呼べば答えるかと思われる口

許は、心なしか、寂しくふるえて見えた。

「——あたしや、これから先も、きつとおまえと一緒に、生きて行くでござんしよう。おまえもどうぞ、魂だけはいつまでも、あたしの傍にいておくんない。あたしや千人万人の人からいい寄られても、死ぬまで動きはいたしませぬ。——もし、吉ちゃん。

……」

ぽたりと落ちたおせんの涙は、菊之丞の頬をぬらした。

「これはまア折角お化粧したお顔へ。……」

おせんはもう一度、白粉刷毛を手にとった。と、次の間から聞えて来たのは、妻女のおむらの声だった。

「おせんさん」

「は、はい。——」

「お焼しょうこう香のお客きやくさま様がお見えでござんす。よろしかつたら、お通とおし申もうします」

「はい、どうぞ。――」

あわてて枕まくらもと許ひから引き下さがつたおせんの眼めに、夜叉やしやの如ごとく  
 うつに映うつつたのは、本多信濃守ほんだしなののかみの妹いもうとお蓮れんの剥はげるばかりに厚あつげ化粧しょう  
 をした姿すがただった。

おせん （おわり）





# 青空文庫情報

底本：「大衆文学代表作全集 19 邦枝完二集」河出書房

1955（昭和30）年9月初版発行

1955（昭和30）年11月30日8刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：伊藤時也

校正：松永正敏

2007年4月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# おせん

邦枝完二

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>